

平成 28 年度

「地域の教育力向上とまちづくりで協働する  
地(知)の拠点整備」

事業実施報告書 ③



歴史が人と街をうごかす

北方警護の藩士達を水腫病から救った予防薬の和蘭コーヒー

この稚内／宗谷とコーヒーの歴史的なつながりが

学生達によって立ち上げられた「わっかないコーヒーフェスティバル」の原点となっている。



## 目 次

---

ごあいさつ	稚内北星学園大学 学長 斉藤 吉広	1
1. 事業概要（申請書より抜粋）		3
2. 推進組織		15
3. 平成28年度事業成果総括		17
4. 自己評価		22
5. 外部評価		29
6. 地域志向教育研究経費		37
7. 平成28年度COC全国シンポジウム		50
8. 地域活動報告会		61
9. COC推進連絡会議		71
10. 活動記録一覧		83
11. 活動レポート・COC新聞・その他広報資料		85
12. 報道一覧		121
13. 規程集（平成29年3月31日現在）		134



稚内北星学園大学

学長 齊 藤 吉 広



平成 26 年度から 30 年度まで 5 年間の補助事業として選定された本学の「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」が、中間年である平成 28 年度の活動を終えました。設定したいずれの課題に関しても、全学的な取り組みとして定着し、成果を蓄積してきたと自負しています。

地域の教育力向上の課題では、本学の数学・情報の教職課程で学ぶ学生が中心となって、稚内市や豊富町、猿払村などの子どもたちへの放課後学習支援を積み重ねており、高い評価を得ています。まちづくりの課題では、中央商店街の空き店舗にサテライト「まちなかメディアラボ（まちラボ）」を設置して活用を模索してきた結果、延べ利用者数は 1 万人を超えました。日本で初めて庶民がコーヒーを嗜んだ地が稚内であるという歴史を生かして、学生が企画・運営した「コーヒーフェスティバル」もこの「まちラボ」を中心に行われ、盛況のうちに第 2 回が実施されています。やはり学生主体で企画された「サンタ・ラン in Wakkanai」も、短い周知期間にもかかわらず数多くの参加者を集めました。映像の撮影・編集のスキルを身に付けて地域情報を発信する学生の活動は、本学の“お家芸”のようなものとして育っており、それらの作品は平成 28 年度も全国規模のコンテストでの入賞が続きました。豊富町 PR ドラマ『エゾカンゾウの咲くまちへ』は、そうした本学学生の実績への信頼と期待から制作が依頼されたものでした。

こうした活動が地域に広く知られるようになり、「学生がんばってるね」という声をしばしばいただくようになりました。逆に、学生は「地域に育ててもらっている」という実感を抱いています。いずれの実践においても、学生たちは地域の方々の支援を受けながら、学び、成長しています。地域の中で輝く学生たちを、誇らしく思います。

これらの活動の成果を背景にして、平成 28 年度は、豊富町、猿払村、宗谷総合振興局との間で包括連携協定を締結することができました。また 9 月には、COC 全国シンポジウム「地域の教育力向上に果たす大学の役割―稚内・宗谷の子育て運動に学ぶ地域の担い手づくり」を催し、地域内外の方々との交流を行いました。サブタイトルにある通り、歴史的な積み重ねを経てきた、この地の子育て運動に本学も参画していき、「幼保小中高大連携」という輪の中で学生がどう育つのかという観点で実り多い議論ができました。

まちラボとともにアクティブラーニングの拠点として設置した「わくほくメディアラボ(わくラボ)」に関しても、その運用が本格化して学習コンシェルジュを中心としてさまざまな企画が立てられて利用が活発化するとともに、学生の新たな“居場所”としても快適な環境を整えつつあります。

今後は、COC としての事業補助終了後を見据え、「地(知)の拠点」として本学がどのように機能していくのかを本格的に検討しなければならない時期になります。その意味では、COC 事業で取り組んできた活動内容を継承・発展させていく方法を模索するとともに、平成 29 年度に設置した「宗谷地域研究所」を中心にして地域の研究ネットワークの拠点となるという新たな使命を自らに課して前進しようとしているところです。

引き続きもみなさまの温かいご支援とご協力をお願いして、ごあいさつとさせていただきます。

## 1. 事業概要（申請書より抜粋）

---

地域課題解決型のアクティブ・ラーニングの機会を広げることによって、学生が社会との関わりを実感しながらチーム力及びマネジメント能力を高められるようカリキュラムを改善し、地域社会に貢献する能力と意欲を持った人材を育成する。とりわけ、以下の課題に取り組む。

- ① 小・中・高の生徒に対する地域の教育力を高める活動に大学が積極的に関わり、放課後学習への支援、授業における ICT 利用の支援、情報モラル教育などを履修科目と結び付けて展開する。
- ② インターネットを活用した地域の観光資源の発掘及び観光情報の発信、また観光ガイドアプリの制作やプロジェクションマッピングなど地域との共同事業に学生が主体的に参加していける仕組みをつくる。
- ③ 中心市街地活性化のために、空き店舗を利用した「まちなかメディアラボ」を設置・運営し、学生のボランティアやイベント参加などの地域活動や交流・学習教育・情報発信の拠点として整備する。

### I. 大学の目的・目標を踏まえた「地域志向」

#### （1）建学の精神における地域志向

本学は、寄附行為第3条及び学則第1条において、大学の目的を以下のように規定している。本学は、教育基本法及び学校教育法に基づく大学の教育をおこない、地域社会に貢献し、キリスト教精神の根底にある人間の自由と尊厳を重んじ平和を愛する人材を育成することを目的とする。

本学は、このように地域社会に貢献する人材の育成を建学の精神として掲げながら、昭和62（1987）年に稚内北星学園短期大学として設立され、平成12（2000）年に四年制の稚内北星学園大学に改組されて今日に至っている。建学の精神がこのように打ち立てられたのは、稚内市が宗谷圏域全体の発展を遂げるための不可欠な柱として高等教育機関の設立を位置づけたからである。すなわち、「宗谷の地に高等教育機関を」という地域社会の要請が本学の出発点であった。そのため、用地・校舎・施設等、大学設置にかかわる費用はすべて稚内市及び地元企業が負担しており、北海道で最初の公設民営大学となった。

#### （2）本学の地域志向の内容

第一に、大学の教育と研究の成果を地域に還元し、地域づくりに活かしていくことを重視している。本学は短大開学時から、情報メディアの最新の動向を研究し、高度情報化に適応できる人

材育成と教育に携わってきた。さらに四年制となって「情報メディア学部」を設けた際には、情報メディア技術の修得に加え、その社会的意味を十全に把握すること（社会科学的理解）及び効果的に表現すること（コンテンツ制作・アート表現）も含めた幅広いスキルと知見を獲得できるようカリキュラムを構成した。

本学はこれらの教育と研究の成果を公開講座や講演会及び事業受託などの形で地域に伝え・活かし、地域の知的資産として共有し、地域の発展に貢献してきた。また本学は稚内市を中心に中学校・高等学校の教員や自治体職員を輩出しており、稚内市役所及び地元産業界では本学出身者が多く活躍している。このように情報メディアの教育と研究の成果を地域の教育・行政・産業活動に活かすとともに、それらの活動を支える人材を育成することが本学の目指す第一の大学像である。

第二に、地域社会とともに生き、地域文化をともに作りあげる大学になることを目指している。本学の教育活動には前稚内市長や前教育長、さらには地元教育界や産業界やまちづくり団体のリーダー、自治体職員や地元在住の学識経験者などの協力を得ており、地域の文化を継承し創造する拠点となっている。

また「街を教室に」というコンセプトの下で、例えば、映像による地域情報発信を内容とした授業からは数多くのコンテスト受賞作品を生み出し、その活動を母体としたNPO法人の設立という成果も生んだ。地元のバス乗り換え案内アプリの制作や地域デジタルアーカイブの構築などの形でも、教育研究を地域社会に結びつけている。利尻島・礼文島における地域観光資源の開拓を目的とした域学連携事業にも演習科目の一環として参画し、参加した学生たちの地域課題への目覚めと深い達成感をもたらす貴重な経験となった。さらに、課外活動を通じて学生が小中学生の放課後学習支援などの実績を積み、地域からの信頼を獲得している。

現在、社会人の生涯学習に応えられる昼夜開講制としている。情報メディアの教育と研究の成果がここで学ぶ社会人によって地域の医療や防災やビジネスの現場で活かされるとともに、彼らの日々の暮らしをより知的で豊かなものにしており、大学の人材育成及び地域貢献として大きな成果を上げつつあると言える。





のシフトは避けられず、道北の観光経済は大きな打撃を受けると言われている。そうした中稚内市観光交流課は、インターネットを活用した情報発信の工夫やスピード感及び宿泊施設や飲食店におけるホスピタリティ向上に課題が多いとしている。

③稚内市は従来の「水産だけのまち」からの脱皮を目指して、稚内駅周辺を中心に「みなと」と中心市街地との一体的な再開発を実施したが、中心市街地への再開発効果が未だ芳しくない。他方、高齢者用住宅の入居者や市立病院への通院者をはじめとして中央地区における高齢者の人の流れは多く、また共働き世帯率が高いにもかかわらず子ども向けの放課後の居場所及び学習支援を行う施設が少ない。空き店舗の利用などによって高齢者や子どもが安心して楽しく過ごし、かつ異世代が交流できるような場の創出が求められている。

### 3. 当該「地域」を対象とする理由

稚内市は760 km<sup>2</sup>あり、東京23区を合わせた面積(621 km<sup>2</sup>)よりも広い。9つの町村を合わせた宗谷総合振興局管内では4,600 km<sup>2</sup>に達し、京都府とほぼ同じ規模であるから、都府県と並べると30位程度の広さである。また本学から最も近い高等教育機関は上川総合振興局管内の名寄市立大学であるが、直線距離で120km以上あり、東京駅からの距離で言えば富士宮や甲府や日光よりも遠い。この地に唯一の高等教育機関として存在する本学は、この地域が独自に抱える課題に教育・研究・社会貢献の全般にわたって取り組まなければならない。とりわけ本学の設立母体となった稚内市のニーズに応じて人材を育成し、まちづくりに参画することは大学としての使命である。

稚内市の平成26(2014)年～30(2018)年の基本計画として策定された「第4次稚内市総合計画 後期基本計画」には次のように記されており、本学との包括連携協定を取り結ぶ運びにもなっている。

大学と綿密な連携を保持しながら、市民に身近な教育機関となるよう、市民に対して生涯学習の機会を提供するとともに、大学が持つ教育設備等を地域へ開放・還元します。また、地域の人材と知識を集積する〈知(地)の拠点〉としての大学の姿を確立し、地域産業との結びつきを強めることで、地域振興・地域活性化につなげます。

利尻町とは主に教育委員会との協議を行い、学生による小中学生への学習支援を入口としたさまざまな連携への期待が高いことから、対象とする。

これまでの連携の実績としては、「I.大学の目的・目標を踏まえた「地域志向」」の項で述べたこと以外に、以下のような活動を挙げることができる。

稚内市は「稚内観光マイスター」を認定するための試験を実施しているが、現在本学がその試験問題の作成と採点を受託している。夏季観光では稚内市の「南中ソーラン祭」「稚内みなと南極まつり」での司会や出演に、冬季観光では「稚内みなとまちづくり懇談会」のメンバーとして「彩北わっキャナイト」の企画実行に参加している。また、稚内青年会議所との連携も緊密で、平成 22（2010）年には本学学生と共同で市民議会を立ち上げ「学生寺子屋」を提案し、平成 24（2012）年は電気自動車による列島縦断「稚内情熱キャラバン隊」に参加するなど、多方面で活動を続けている。さらに、市内の NPO 法人「街にいき隊」と共に中心市街地活性化に向けた活動を行った。また、「稚内新エネルギー研究会」との連携では風力発電＋燃料電池という世界で最初かつ唯一の再生可能エネルギーシステムの構築や大規模太陽光発電施設の誘致を行った。

稚内市の事業では「稚内市まちなか居住ポータルサイト」作成、「稚内市地域公共交通活性化再生総合事業」、「稚内スマートコミュニティ」事業等多くの事業を受託している。また、平成 22（2010）年度から稚内市の広報誌「広報わっかない」の編集・作成を行い、市民に好評である。また地元産業界との関係においては、稚内商工会議所の「地域力連携拠点事業」（経産省）に IT 講座の担当としてパートナー参加する他、函館税関稚内支署等のロシア語講座や日本電信電話ユーザー協会のパソコン講習等を毎年実施している。

なお、稚内市及び宗谷総合振興局管内の 9 つの町村は「宗谷定住自立圏」を構成し、生活基盤や経済基盤を相互協力関係の下で整備しようとしている。そしてその実現のために中心市稚内と個々の町村とが結んだ協定書にはすべて、「稚内北星学園大学の活用を推進する」との一文が添えられている。本申請における連携自治体として利尻町以外の名を記載できる段階には至っていないが、現在、豊富町の観光情報発信への協力を平成 26（2014）年度の「社会教育計画」における演習課題とすることが決まっており、また、猿払村の小中学生の放課後学習を本学学生が通信によって支援する構想の準備を始めている。宗谷唯一の高等教育機関である本学への期待に応えて大いに「活用」してもらえよう、本学から働きかけながら、徐々に連携する自治体を広げていく。

### Ⅲ. 地域を志向した教育・研究・社会貢献の現状と達成目標及び具体的取組

#### 1. 全体

##### （1）地域の事情に適合的な年間日程へ

寒冷地特有の問題であるが、これまでは、本学の夏休みが始まると間もなく小中高校の2学期が始まるという設定となっていた。学生が街に出て地域の教育力向上に寄与するためには、両者の夏休み期間の重なりを大きくすることが望ましい。他大学教員による集中講義の実施に齟齬をきたさないようにするなどカリキュラムの遂行上支障の生じない限りにおいて、年間日程の変更を平成27(2015)年度から実施できるよう準備する。

## (2) コース制の導入

平成27(2015)年度から1学科(情報メディア学科)5コース制(情報テクノロジーコース、地域デザインコース、メディア表現コース、ビジネス観光コース、数学教育コース)に移行することを決めているが、これは地域の進路志向に対応した選択肢を分かりやすい形で提供しようとするものである。また専門教育については教員ごとの個別の指導ではなく、コースごとの教員集団による指導によって学習効果を高めるという目的を持っており、学生の側からすれば、相互のコミュニケーションを図りながら問題解決に向かうことで、より高度な能力を発揮できるようになる。さらには次に述べるアクティブ・ラーニング拠点の整備によって、コースの枠を超えて異なる専門性を持ち寄って地域の課題に取り組む、プロジェクト型実践の機会も積極的に設けていく。

## (3) アクティブ・ラーニングの拠点整備

アクティブ・ラーニング、とりわけ地域課題の発見・解決のための〈街を教室に〉をコンセプトとした科目を豊富化させる。またこのアクティブ・ラーニングないしラーニング・コモンズの拠点として学内に「わくほくメディアラボ」を設け、学生の能動的かつ共同的な学習を支援する。さらに教職員と学生が直に地域の人や課題にアクセスし、交流、協働することができるよう、中央商店街の空き店舗に「まちなかメディアラボ」を設ける。

学生にとっては、必要な場面で、文脈に即して情報メディアを活用するという実践的な学習が何よりも効果的である。課題解決に向けたプロセスの中でコミュニケーション力やチーム力を高め、世の中の仕組みを知り、学ぶことと社会とのつながりを実感し、そして何よりも自己肯定感を深めることができる。地域課題取り組んだ学生が主体となって行う半期ごとの「地域活動報告会」を、経験交流の場として活かしながら活動を推進する。

## (4) 地域志向科目の豊富化

カリキュラムについては、全学生が地域志向活動に触れる機会を増加させることとし、地域イベントへの参加などこれまで個人的でボランティアであった活動も、可能なものは授業の一環と

して有機的に組み込んで学問的な裏付けを伴った活動として位置付けていく。共通科目で地域志向の基盤的な視点を学び、専門科目で学科ごと（平成 27（2015）年度入学生からはコースごと）の専門性に応じた地域課題対応の演習・実習を行えるようカリキュラムを整備するとともに、地域志向科目としての科目間のつながりを学生に明示する。

また、講義・演習への地元人材の招聘もより拡大し、地域の歴史・文化や産業についての知見を、現場で携わってきた市民から生き生きとした形で学ぶ機会とするとともに、そこで生まれた交流が学生のキャリア形成や人間的成長に資するよう工夫していく。

#### （5）地域連携の強化と拡大

地域連携に関しては、本申請で採択されない場合でも、継続的に地域連携を深める組織体制とカリキュラムの構築を目指すという立場から、まず、これまで結んでいなかった稚内市との包括連携協定の締結に向けて稚内市政策調整部との協議を始めた。そしてその協定を実質的に機能させるために、大学と稚内市相互の継続的な議論の場を設定する必要性についても確認した。今後、地域の課題それぞれにおいて稚内市、関連機関・団体及び市民との交流を続け、PDCA サイクルに則った実践を積み重ねていく。

一方、「Ⅱ3」で述べたようにこの地域は広大であり、しかも交通システムが脆弱である。学生の移動などに（特に冬期間は）困難が大きいため、そうした条件を無視した形で連携を拡大することはできないが、宗谷の他の町村も含め連携関係を築いていけるよう準備を進める。

#### （6）地域の再生・活性化プラン

- ・「Ⅱ2（2）」で上げた地域の課題①地域の教育力向上については、稚内市内4つの小学校で実施されている放課後学習支援「グングン塾」に本学学生を学力向上指導助手として派遣する。学内に地域教育支援室を設置し、参加する学生の登録や反省交流会を運営するとともに、稚内市教育委員会及び当該小学校との連絡・調整を行う。利尻町で夏休みの3日間行われる「小中合同学習会」への学生派遣にも、この支援室が中心となって取り組む。
- ・また小規模・複式校の実態と願いを汲み取った上で、ICT利用教育がどのようなシステムとコンテンツを備えるべきか検討し、とりわけ「調べ学習」による学力向上という観点から、全体のデザインを支援する。同時に、情報リテラシー・情報モラルに関する教員の指導力を高めるための講座を実施する。
- ・各種社会教育事業への学生ボランティア派遣の充実を図り、必要なものは有償化していく。

- ・同じく② 観光まちづくりについては、特にインターネットを活用したより効果的な情報発信を支援する。特に学生による、幅広い視野に立った新たな観光資源の発掘やリアルタイムでのPR活動を組織する。
- ・観光スポットや店舗・宿泊施設・特産品の情報、マップとナビゲーション、訪問予定のカレンダー登録、過去の映像資料などを連動させて適切な情報を手軽に利用できる“稚内観光ガイドアプリ”の開発を行う。
- ・稚内市で取り組まれているボランティアガイド事業強化への支援にも取り組み、また市内の宿泊施設や飲食店におけるホスピタリティ向上に資するための調査や研究を行う。
- ・③ 中心市街地活性化の課題に対しては、「まちなかメディアラボ」を学生のボランティアやイベント参加など地域活動の出発拠点として機能させるとともに、子どもたちへの放課後学習支援を行う場ともする。またスキルを持った人物を雇用し、常駐に近い形でPC・インターネット入門、メディア表現、プログラミングなどの指導を行う。スタジオ機能を持たせて情報発信の拠点としても整備し、同時に夜間主クラス授業を遠隔受講するサテライト教室としても利用する。アート作品の展示・上映会も行う。
- ・商店街の店が講師となってプロならではの専門的な知識やコツを無料で伝える“まちゼミ”を中央商店街で実施できるよう、コーディネートと宣伝を担う。
- ・課題を抱えたそれぞれの現場では、「とにかく若い人に来てもらいたい、学生の力がほしい」という声が強い。新たな賑いの種をそこにまくことで、中央商店街及び中央地区の活性化を図る。

## 2. 教育

### (1) 基盤としての情報メディア力

本学における全学生対象の共通科目カリキュラムは、オフィスソフトの操作をはじめカメラやビデオの撮影と加工・編集、インターネットの活用などのスキルや、効果的なコンテンツを制作する工夫、そして情報社会への社会科学的な理解が身に付く構成となっている。そうした情報メディアへの能力を強みとして活かせる地域活動の場面は非常に多い。学生たちが地域の抱える課題に創造的・実践的・協働的に取り組んでいけるよう授業や課外活動を充実させることによって、チーム力並びにマネジメント力を備えた人材を育成する。

またそのための環境整備として「わくほくメディアラボ」(レポート・論文執筆などの学習支援を行う学習コンシェルジュを配置)及び「まちなかメディアラボ」を設置し、ICTを活用しつつ、課題発見や交流・議論・調査及び協働・情報発信するための拠点とする。

## (2) 地域志向／地域課題への取組

本学ではすでに全学共通科目として「地域学」及び「地域文化論」を必修科目としている。「地域学」は稚内・宗谷・北海道の地域課題を本学教員がオムニバスで理論的かつ多角的に俯瞰する内容となっているが、平成 27 (2015) 年度よりこれを「地域学Ⅰ」として「地域学Ⅱ」を新設し、同様に必修とする。この科目では、稚内ないし宗谷地域の産業や文化を担った、あるいは現役として担っている方々から現場の実態や問題点を語ってもらい、その場で学生とコーディネーター役の教員を交えてディスカッションを行い、地域課題への認識を育むとともにその課題に実践的に取り組もうとする意欲を持った人材を育成する。

全学共通科目の選択科目として平成 26 (2014) 年度より「地域と金融」を新設し、経営学・金融論的な観点からの地域づくりを考察する機会とし、開設予定のビジネス観光コース専門科目「起業論」での起業シミュレーションなど実践的な学習につなげる。また平成 27 (2015) 年度より「観光メディア論」「観光英語」を同コース科目として設置する。

## (3) アクティブ・ラーニング

<街を教室に>というコンセプトは<地域課題に取り組むアクティブ・ラーニング>を想定したものであるが、上述した新設する「観光メディア論」も、観光産業をめぐって地域が抱える現実の問題を解決するために、街に出て市民や観光客と交流することから始まり、効果的な観光情報発信を実現しようとするものである。教員間の交流やFD活動を通じて、既存の科目においても学生の自発性を引き出す工夫を凝らしていく。

また教員を目指す学生たちが、地域の子どもや教師や保護者に学びながら教育経験を積む機会をさらに増やす。「グングン塾」や利尻町での「小中合同学習会」支援はまさしくそのような機会であり、さらに稚内高校の定時制の数学授業の一部を学生が担当する試行事業が始まっているが、本格実施に向かう。

これまで実施してきたボランティア報告会、教育実習報告会、インターンシップ報告会などの実績からすれば、「地域活動報告会」における発表・交流・議論自体が高度なアクティブ・ラーニングとなる。加えて、こうした学修を通じて、地域課題に取り組む各種の研究会・イベント実行団体等への学生の参加も促す。

## 3. 研究等

### (1) 地域課題を対象とした研究

本申請に係る地域課題との対応関係では、「実践力を育成する道徳教育授業の展開―地域連携で創る『道徳教育論』2」（本学紀要、以下同）など①地域の教育力向上の課題に対応した研究成果が多く、ほか「無線環境を用いた過疎地域におけるデジタルデバイドの解消―大学知を地域にどのように反映させるのか」「地域連携で創る図書館授業の展開」「地方中小都市のインフラを活かした電気自動車の開発構想」「協働型ユーザーによる地域スポーツ施設の運営管理モデル」など地域研究は教員の専門性に応じて多彩に展開されてきた。しかし、② 観光まちづくり、③ 中心市街地活性化についてはシンポジウム等での講演・報告及び稚内市からの諮問に応えた報告書などの形での成果に限られている。

今後、地域志向教育研究経費も活用しながら、地域課題に応える研究活動を全学的に強めていく。平成 26（2014）年度中に学内公募の要綱を作成し、27 年度より経費補助を開始する。研究の成果は論文等の形においてのみならず、稚内市が主催し、年に 20 回前後実施される「稚内学」での講座を担当することによって広く市民に公開することとする。

「わくわくメディアラボ」の開設に備え、「ラーニング・コモンズ」として同種の施設を開設している大学への訪問を行う。単なる大学図書館の拡張だけではなく、ライティングなどの学習支援の活動を積極的に行っている千葉大学・国際基督教大学・同志社大学を参考にする。

課題に応じた研究や実践の先進地域への視察訪問も積極的に行う。課題① 地域の教育力向上における ICT 利用教育への支援に関しては「1 人 1 台タブレット」「反転授業」などの試みで全国的に知られた佐賀県武雄市、課題② 観光まちづくりの稚内観光アプリ開発については業者丸投げでなく市民参加でコンテンツを充実させている福岡市、また街歩きのボランティアガイドを全国でも先駆的に事業化している弘前市及び盛岡市が参考になる。課題③ 中心市街地活性化の“まちゼミ”コーディネートに関しては全国のリーダー的役割を果たしている愛知県岡崎市に学ぶのは必須である。

## （2）広域的な研究連携

名寄市立大学の「道北地域研究所」及び「道北の地域振興を考える研究会」との交流・協力関係を築いていながら、気候や地理的条件、産業構造などに共通点の多い道北一帯を研究対象としてとらえた取り組みを進めていく。

また稚内市は愛知県江南市と「地域資源の広域連携による災害に強い地域の価値向上」をテーマにした連携を始めようとしている。両市が同時に大規模災害に遭うことはなく、したがってどちらか一方が被災した時には他方から人的・物的支援を行おうというものだが、平常時から“顔の見える関係”を徐々に築いていくために、エネルギーや観光・物産等の交流に加えて教育分野



でも協力関係を模索しようとしており、本学に対して江南市唯一の高等教育機関である江南短期大学との連携が提案されている。

#### 4. 社会貢献

##### (1) 地域の教育力向上

稚内市「グングン塾」、利尻町「小中合同学習会」や各種イベントへの学生の派遣については、「地域教育支援室」及び「学生ボランティア支援室」が主導しつつ、それらが単なるアルバイトとならないよう留意して運営し、「地域活動報告会」の場で地域との間で成果を確かめ合いながら事業を進める。

学校教育現場における ICT 利用については、それが自己目的とならないよう、また教師の授業準備や自らの ICT スキルへの不安に寄り添いながら提案を行っていく。

##### (2) 観光まちづくり

「観光メディア論」「ソフトウェア制作演習」などと連動させた“稚内観光ガイドアプリ”のコンテンツデザインやシステム開発など効果的な観光情報の発信や、ホスピタリティの向上、ボランティアガイドの事業強化、広域的な連携による観光プランの開発への支援など、自治体及び関連団体と連携しながら観光振興に多角的に取り組む。これらの活動への学生の参加については、後述する「地域観光支援室」がマネジメントする。

##### (3) 中心市街地活性化

稚内中央商店街の「まちなかメディアラボ」予定施設は商店街の事情により平成 27 (2015) 年度以降の本格運用にならざるを得ないが、施設の一部を活用して放課後学習支援や展示・上映会の会場として利用を始める。後述する「まちなか振興支援室」が学生の発想を活かしながら運営を担う。

“まちゼミ”については先進地での経験に学びつつ徐々に実施店舗を広げていく。その際、学生がコーディネーターとして積極的な役割を果たせるよう事業を進める。

##### (4) 生涯学習拠点として

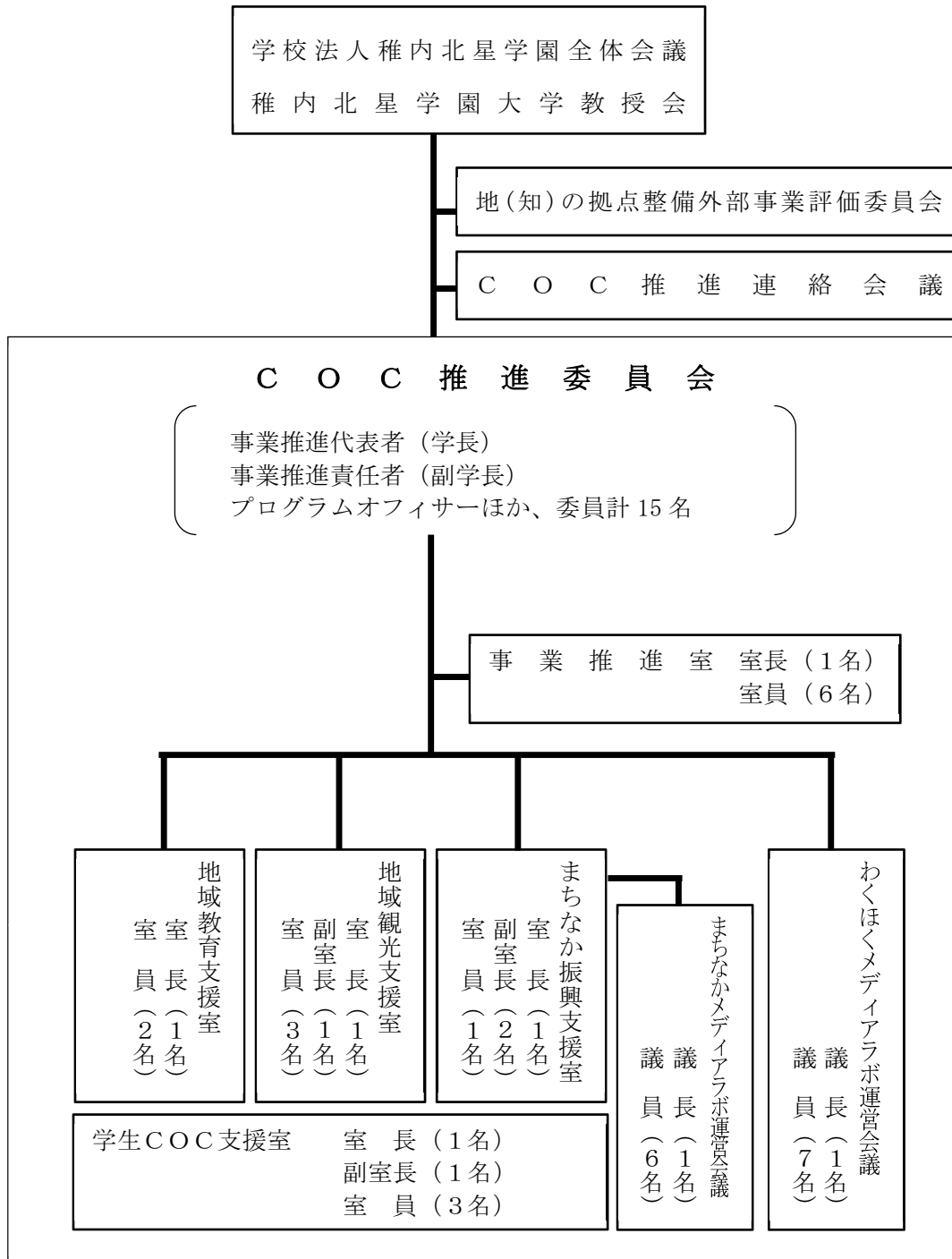
夜間主クラスで学ぶ学生を増やすために、スキルアップをめざす現役の公務員や会社員、教養を深めたい退職者等、対象者となる市民のニーズを把握して開設科目を工夫すると同時に広報活動を強める。

生涯学習の支援活動としては、教員の研究における地域志向を強めていくことによって「稚内学」での講座担当を徐々に拡大させていく。語学・ICT 関連などは大学主催の公開講座として引き続き行う。

## 2. 推進組織

### C O C 推進機構図

平成 29 年 3 月 31 日現在



(付記) COC 推進委員会決定により設置の小委員会・作業グループ等一覧

COC デザイン堂 (平成 27 年 3 月 31 日委員会決定、常設)

平成 27 年度 COC 地域シンポジウム実行委員会、第 3 回地域活動報告会実行委員会、第 4 回地域活動報告会実行委員会、平成 27 年度 COC 地域シンポジウム報告書編集小委員会、第 3 回地域活動報告会報告書編集小委員会、第 4 回地域活動報告会報告書編集小委員会  
(以上、臨時)

### COC 推進委員会委員名簿

平成 29 年 3 月 31 日現在

規程第 3 条	所属・役職	氏名
1 号委員	学長「事業推進代表者」	斉藤 吉広
2 号委員	副学長「事業推進責任者」	佐賀 孝博
3 号委員	情報メディア学部長	安藤 友晴
4 号委員	地域教育支援室長	米津 直希
5 号委員	地域観光支援室長	藤崎 達也
6 号委員	まちなか振興支援室長	若原 幸範
7 号委員	学生COC支援室長	侘美 俊輔
8 号委員	事業推進室長	黒木 宏一
9 号委員	図書館長	安藤 友晴
10 号委員	プログラムオフィサー	
11 号委員	学習コンシェルジュ	高 澍
12 号委員	大学事務局長	
13 号委員	大学事務局総務課長	石黒 志津
14 号委員	メディア表現指導員	中野 窓香
15 号委員	情報メディア学部 教授	坪内 晃

### 3. 平成 28 年度事業成果総括

---

平成 28 年度総合自己評価（総合評価）

#### （事業全体への総体的な評価）

地域課題に対応した「地域教育支援室」「地域観光支援室」及び「まちなか振興支援室」の 3 支援室（以下、3 支援室）と、学生活動を支援する「学生 COC 支援室」は、各支援室が所管する全学的な事業を積極的に推進した。特に 3 支援室の活動が本格化する中で、3 支援室が取り組んでいる事業への学生参加が一般化した。一方これに伴い「学生 COC 支援室」が、3 支援室事業への学生参加について調整・支援する機会はこれまでより少なくなった。このことから、29 年度より「学生 COC 支援室」は解消し、学生の活動支援について、COC 事業支援室が担うこととなった。

学内のアクティブラーニングの拠点「わくほくメディアラボ」（以下、「わくラボ」）と、中心市街地のサテライト「まちなかメディアラボ」（以下、「まちラボ」）の運用が恒常化し、学生が主体的に事業活動に参加する拠点として機能した。また、定期的に各ラボを利用した授業や市民を対象とした各種講座を行うことができた。

本学の COC 事業の取組みについて、「第 1 回 COC 全国シンポジウム」を開催し、1 日目は基調講演、パネルディスカッション、情報交換会、2 日目は第 5 回地域活動報告会、ポスターセッション、エクスカージョンを実施し、延べ 250 名の参加があった。シンポジウムの実施内容についてもアンケート結果などから好評で、本学の取り組んでいる COC 事業について理解と関心を持っていただけていることがわかった。

本事業に関連して、自治体や関係団体、市民への事業の認知と連携・協力関係の進展を図ってきた。28 年度は「北海道宗谷総合振興局」「豊富町」「猿払村」と包括連携協定を結び、協定に基づいた取り組みを 29 年度より本格的に行うこととしている。

また、各事業は概ね当初計画の通りの達成状況となり、その成果は地元紙をはじめとした新聞記事や、関係者による各種報告などによって広報することができた。

#### （大学の組織化・一体化への評価）

「COC 推進委員会」を 15 名の教職員で構成し、28 年度は 20 回の会議を開催した。また、事業全体の事務を円滑に進めるため、事業推進責任者を補佐する等の事務を担う「事業推進室」を設け、事業工程の確認、学内への周知を図り、活動や議論への一層の参加を促した。

28年度のCOCフォローアップアンケートによって、本事業に関わる教育・研究についてはほぼすべての教員が「関わっている」という自覚を持っており、本事業の意義を共有している。本事業の目的のひとつである本学のガバナンスの確立はほぼ達成されていると考えるが、これからも一層、全学が一丸となって本事業を推進していく所存である。

#### **(学生の参加と意識改革への評価)**

28年度は、地域志向科目をさらに豊富化(26年度18科目・27年度21科目・28年度31科目)した。26年度より1年生科目「地域学Ⅰ」を必修化したことで、28年度は1～3年生のほぼすべての学生が地域志向科目を受講しており、地域の課題や解決に必要な基盤的な知識および学問領域を学んだ上で、その後の授業科目や各事業で具体的に行動するという一連の繋がりを持たせることが可能となった。

学生参加の具体事例としては、稚内市での「放課後学力グングン塾」、豊富町の「小中合同学習会」等への学生の派遣をはじめ、稚内市内の児童生徒を対象として「まちなかメディアラボ」で開催している「教たま数学教室」や、地元民間企業・商店街との連携による映像制作、Webによる地域観光情報の発信、商店街周辺のイベントの企画立案、実施などがあり、学生による主体的な地域活動が展開された。

留意事項としては、学生が本事業に積極的に取り組もうとするほど、時間を取られ結果的に学生の負担感につながる恐れもある。これまでと同様に個別の状況に配慮しつつ、学生の参加を促していきたい。

#### **(学外、地域、市民との連携協働への評価)**

本学COC事業は、申請準備の段階から連携自治体をはじめ関係団体等との協議を重ね、地域の抱える課題(ニーズ)と本学の研究・教育の専門性(シーズ)のマッチングを図ったものである。その結果、採択初年度からスムーズに地域との連携協働のもとで事業が展開できている。年度末には、連携自治体や関連機関からなる「COC推進連絡会議」の第3回会議を開催し、出席者から29年度以降の事業への期待や激励を得た。

さらに、「北海道宗谷総合振興局」「豊富町」「猿払村」など、COC事業選定当時は連携自治体になっていなかった自治体などともCOC事業を契機に結びつきを強めている。

市民に対しては、プレスリリース（新聞記事、地域 FM での放送ほか）、折り込みチラシ、インターネット、ソーシャルメディアを通じて積極的な広報活動を行い、事業活動の周知を図った。また、事業の結果・成果は、委員会及び各支援室の活動レポートを適宜発行し、記録と公開に努めた。

## （分野別自己評価）

### （教育）

「わくラボ」「まちラボ」とも運用が本格化し、学生のアクティブラーニングの場として活用された。「わくラボ」については、学生の利用についてまだ多少の偏りがあるとはいえ、これまでより学生が自発的に活用する場面が増えてきたとともに、学習コンシェルジュを中心として様々な企画をたて一層の利用促進をはかった。また、他大学での同様の施設運営の視察を通じて、「わくラボ」の施設・備品の予約方法や、学生が気軽に利用できるように感じられる空間づくり等について改善を行った。「まちラボ」においても一部授業を「まちラボ」を拠点として行い、学生のアクティブラーニングをメディア表現指導員がコーディネートすることで、より大きな教育効果を得られた。

地域志向科目の豊富化は、ほぼ計画通り実施でき、一部科目については必修科目とすることでCOC事業と関連させた取り組みを行うことができた。ただし、選択科目については学生総数の少なさから受講生があまり集まらない科目もあったので、29年度の履修状況によっては、学生のニーズと照らして再検討が必要な科目もでてくると思われる。

学生による情報発信としてはCOC事業を起点として行った地域情報発信や映像制作などを継続して行い、外部からも評価を受けているが、それらによってどのような効果があったのかなど具体的な成果の計測方法の検討も今後の課題である。

教育の分野全体として、それぞれが計画していた目標を概ね達成できたと評価している。

### （研究）

研究分野では、「地域志向教育研究経費」について、28年度は6件の応募があった。いずれの応募内容もCOC事業と関連しており、研究するにふさわしいという「地域志向教育研究経費審査委員会」の評価で6件が採択された。それぞれの研究は担当教員の専門性を生かして地域課題に

取り組むものであり、また実践的な成果も生み出した。さらに学生との協働関係の中で、教育的な効果を発揮することもできた。

最終的な成果は28年度中に成果報告書を提出するとともに、29年度中には本学紀要または学会等で発表することとしているが、28年度の段階で、本学紀要5件、学会・研究大会等での発表2件、COC全国シンポジウム・地域活動報告会での発表6件の中間報告がなされている。

この他、稚内市立ノシャップ寒流水族館の協力を得て行った、魚情報の多言語化（カタログおよびQRコードによる表示）など実際に稼働した成果もあった。

各研究について進捗は概ね予定通りで、目標は達成できたと評価するが、水族館を題材とした研究と同様に、観光分野のシステム開発については、その成果を市民にわかりやすく広報できるようにする必要がある。

## （社会貢献）

社会貢献の分野は大きく「まちラボにおける市民講座」「学生による観光情報発信」「学生による教育支援」に分けられる。

「まちラボ」にメディア表現指導員が常時勤務することで、地域住民を対象にメディア表現に関する定期的な講座の開催や個別指導を行うことができ、常連となっている市民も増えてきた。一方、総利用者数はやや減少傾向にあるので、さらなる企画の立案など対策をとっていく。

28年度は留学生が中心となった、インバウンドを意識した情報発信に関する取り組みが行われた。外国人観光客へのアンケート調査やそれに基づいて、観光協会と協働で観光冊子の制作などを行った。

これまでと同様、放課後グングン塾や豊富町小中学校合同学習会への学生派遣は、地域の保護者や学校教職員からの評価も高く、学生が実際に児童と触れ合う中で学校教育・社会教育を学ぶ貴重な実習機会となっている。また「まちラボ」を会場とした学生が講師となって行う「教たま数学教室」では、参加中学生の数学の成績が上がったことで入試対策も依頼され、学生は自らの指導によって子どもが成績を上げたことで自信をつけた。

このように社会貢献の分野では事業目標を概ね達成できたものとする。



## (全体)

全国シンポジウム、地域活動報告会、外部評価委員会等の各種報告会や会議は、事業推進室を中心に工夫を凝らした中で有意義にかつ効果的な手法で開催された。

広報周知の手段としてのパンフレット、ポスター、チラシ類に関しては、学内の広報委員会が全体を取りまとめて制作し、配布も地元新聞宅配網を使って市内全域に行きわたっており効果的に活用された。

年度末に開催されたCOC推進連絡会議においては、各委員からの意見・提言とともに、ねぎらいと激励の言葉もいただき、それらを29年度事業に活かしていく考えである。

29年1月には本事業を支えていた手島プログラムオフィサーの急逝もあったが、全体として概ね計画通りの事業達成状況であった。29年は体制を再度整えCOC事業を通じ、学生・教員の地域志向教育の推進と地域課題解決への積極的なアプローチを展開していく。

なお、文部科学省による本事業の26年度からの取組みの中間審査において「平成28年度評価結果について」(29年2月)で「A」評価を受けたことをあわせて報告する。

## 4. 自己評価

---

### 地域教育支援室

#### 1. 支援室所管個別事業

- ⑦先進事例視察。調査先の様子の見学や実施者への聞き取り調査を実施(無料塾)
- ⑩稚内市内の小学校3・4年生に対して基礎学力の定着を図るために、稚内市教育委員会の主催で実施される放課後学習支援事業「グングン塾」に指導助手として学生を派遣
- ⑭「まちなかメディアラボ」において週に1・2日、主に小中学生を対象とした本学学生による無料の学習支援を実施
- ⑯本学COCの意義、進捗、発展可能性を地域内外の人々と共有するため、COC全国シンポジウム、第5回地域活動報告会を開催

#### 2. 実施計画、事業の実施状況及び今後の予定

- ⑦平成28年6月4日(土)に札幌のNPO法人Kacotamを訪問。学生7名、教員4名で塾の見学、および代表者への聞き取り調査を実施。
- ⑩平成28年5月31日～10月25日に、計17日間、グングン塾に学生を派遣した。
- ⑭平成28年5月24日～7月26日(火曜日のみ、全9回)、8月8日～10日(3日間、終日)、9月13日～12月20日(火曜日のみ、全13回)、平成29年1月16日、23日、30日(火曜日のみ、全3回)に「教たま数学教室」として中学3年生を対象とした学習塾を開催した(8月8日から3日間のもののみ小学生も対象)。
- ⑯平成28年9月17日(土)、18日(日)にCOC全国シンポジウム(基調講演、パネルディスカッション)、第5回地域活動報告会を開催した(ポスターセッション、エクスカージョンも実施)。シンポジウム約140人、地域活動報告会約100名、全日程を通じた参加者はのべ240名。

#### 3. 事業実施における成果等

- ⑦Kacotamの事業目的や内容、方法について理解を深めることができた。また、学生が直接見学に行くことによって、活動へのモチベーションが上がったように見受けられた。先進事例を取り入れた活動につながった。
- ⑩学生が指導員の助手として指導方法や子どもとの接し方を学びながら、地域へ貢献できた。他の活動につながる、学習指導の学びの場となっている。

- ⑭「申し込み制」「中学生対象」「経済的な事由を加味」等を取入れ、当番制で学生が指導。「指導のための指導」も行った。期毎に参加生徒数が増え、学力向上にもつながった。活動を通して、学生も指導の自信と技術を高めた。
- ⑯これまでの事業の活動と意義について、実施した学生自身の発表と教員による解説によって、地域や全国からの参加者と共有できた。実施アンケートにおいて、「参加して良かった」という肯定的な意見が両日とも8割を超えた。

#### **4. 特に重点的に取り組んだ事業等**

今年度は、「教たま数学教室」として実施した「無料塾」の活動を重点的な活動として位置付けた。平成27年度の「COC推進連絡協議会」の際に、地域住民から「部活の後にも参加できる時間帯に、中学生向けの塾を開けないか」という要望を受け、それに応える形となった。

学校の授業のスピードについていけなかった生徒がここで学び直すことで理解が進み、成績の向上につながった。また、そうした結果が出たことで指導した学生の自信にもつながった。

#### **5. 事業運営を通じて課題として残されたもの**

上記の活動を行う学生の負担が大きな課題として残されている。生活費・学費をすべて自身で用意している学生も少なくないため、時間的・経済的な負担は開始当初から課題となっている。今年度は、昨年度無償で行っていた「教たま数学教室」についても、稚内市、大学からそれぞれ謝金を出すことができたが、上記のような学生の状況を大きく改善したとは言えない。

多くの場合は教職志望の学生が指導を行っているため、上記のような課題があったとしても、自らの学びのためだと考え積極的に参加している。しかし今後教職を志望する学生が安定的に入学してこなければ、この活動は縮小せざるを得なくなる。今後の活動の安定化について、課題として残るものとする。

#### **6. 目的に対する達成度合い**

目的としていた活動内容については、概ね達成された。

#### **7. 事業全体を通しての自己評価、事業評価**

学習支援活動については、教職志望の学生のゼミナールに位置付けることで、現在のところは安定的に活動を続けることができている。大学に対して地域の教育関係者から理解を寄せていただけていることから、教職を目指す学生が在学している限り、今後も継続できる基盤が整いつつあると考えている。



## まちなか振興支援室

### 1. 支援室所管個別事業

- ②まちなかメディアラボの通常運用
- ⑧メディア表現指導員の配置による事業の推進
- ⑨「まちゼミ」コーディネートに向けた、稚内中央商店街の歴史についての調査学習の実施

### 2. 事業の実施状況

- ②「まちなかメディアラボ運営会議」を毎月開催し、月ごとの事業計画・評価をしながら学外のアクティブラーニングの拠点として運営した。また、「メディア表現指導員」を配置し、学生の地域活動・実践的学習の支援のほか、地域住民を対象にメディア表現に関する講座の開催や個別指導を行った。その他、地域連携イベントを実施するなどの事業を行った。
- ⑧学生のアクティブラーニングについては、「まちなかメディアラボ」で実施する講義（⑨関連等）のサポートや「白夜祭」に合わせた学生の自主的活動のコーディネートにメディア表現指導員が行った。市民のメディア表現指導については、毎月講座を開催したほか、日常的な個別相談・指導を行った。「まちなかメディアラボ」を地域住民の日常的な活動の場・交流の場とする（パソコン利用、ビジネス・自習、囲碁など）ほか、中国語講座などの学習会や子

ども向けの工作コーナー設置、各種イベントの会場提供等をメディア表現指導員がコーディネートした。

- ⑨「社会教育課題研究Ⅰ」（受講生7名）では、第12回まで基礎的・理論的内容を講義した。第13～15回は稚内市中心市街地・稚内中央商店街に関する構造調査（資料調査）を実施した。「社会教育課題研究Ⅱ」（受講生7名）では、「同Ⅰ」に資料調査をふまえつつ商店街10店舗へのインタビュー調査を実施し、中心市街地・商店街の歴史的盛衰の中で生きてきた店主の意識を調査した。調査成果の地域への還元の一環として、第6回地域活動報告会において調査報告を行った。

### 3. 事業実施における成果等

- ②「まちなかメディアラボ」にメディア表現指導員が常時勤務することで、日常的な地域との交流・情報収集が進んだ。これにより、商店街調査（⑨関連）などのアクティブラーニングをより効果的に進めることができた。また、地域連携イベントを実施する等により、本学と地域との連携機会をつくることができた。
- ⑧学生のアクティブラーニングをメディア表現指導員がコーディネートすることにより、より大きな教育効果を得られた。また、メディア表現指導員による講座や個別指導により市民のメディア表現に関する学習活動に貢献した。さらに、日常的な地域住民との交流・情報収集により、中心市街地活性化に係る情報・知見を収集できた。このことは、「まちなかメディアラボ」の諸事業や商店街調査（⑨関連）において具体的に活かされた。
- ⑨調査の結果としては、個々の店主が商店街としての連携を求める意識を持っていることが明らかとなり、その実現への課題として意識の世代間ギャップ等があることが示された。学生教育の面では、客観的に地域の実態を把握する調査・分析手法を体験的に身につける学習機会を提供できた。

### 4. 特に重点的に取組んだ事業等

昨年度に確立した基本的なルーティンに基づき、「まちなかメディアラボ」を安定して運営することを重点とした。施設・メディア表現指導員を利用するリピーターも現れるなど一定の成果を得ることができた。次年度以降もさらなる機能充実・運営安定化を目指すこととする。

もう1つの重点としては、学生のアクティブラーニングの一環として稚内中央商店街調査を実施した。この事業は、前項に記載した成果を踏まえながら次年度以降も形を変えて継続していく予定である。

## 5. 事業運営を通じて課題として残されたもの

「まちなかメディアラボ」の大学関係者の利用が十分には進まなかった。今後は講義・ゼミ等での活用を促すため、当支援室として具体的な施設活用方法の提案等を検討する必要がある。また、市民の利用の面では一定のリピーターを確保できたものの、総利用者数は昨年度に比べてやや減少した。新規の利用者を得るために、ニーズの掘り起こしと広報活動の充実を検討する必要がある。商店街の歴史や実態を把握するための調査を実施したが、講義における学生のアクティブラーニングの一環として実施したことによる制約上、研究的な深まりとしては課題が残った。

## 6. 目的に対する達成度合い

「メディア表現指導員」を配置した「まちなかメディアラボ」が地域における学生のアクティブラーニングおよび市民のメディア表現学習・活動の拠点として機能することにより概ね目的を達成することができた。また、稚内中央商店街の調査についても概ね目的を達成することができた。

## 7. 事業全体を通しての自己評価、事業評価

「まちなかメディアラボ」をはじめ本事業は地域に定着しつつあり、事業計画上の目的は概ね達成できている。しかし、中心市街地・商店街が抱えている課題の大きさからすれば依然として力不足であることは否めない。次年度以降も引き続き地域との連携を拡張・深化しながら、地域課題克服の方策を地域とともに探っていくことが必要である。



## 地域観光支援室

### 1. 支援室所管個別事業

- ⑤ソフトウェア制作演習における、稚内観光ガイドアプリシステム構築
- ⑩観光ガイド研修の実施(稚内市内、利尻町及び利尻富士町、礼文町、豊富町、猿払村)
- ⑬学生による観光情報発信、冊子の制作

### 2. 事業の実施状況

- ⑤平成 27 年度において「ソフトウェア制作演習」及び「観光ガイド事業論」にて、南稚内飲食店などと連携して店舗の情報を集めた。今年度はそのデータを元に、ガイドアプリとしての仕様を定め「ソフトウェア制作演習」の授業を活用しつつ作り込みを行った。プロトタイプについては、9月に行われたCOC全国シンポジウムにて発表した。現在はサーバにアップしており、来年度以降も継続してデータの補充とメンテナンスを行う。
- ⑩平成 27 年 12 月 10 日、稚内市立稚内中学校の土曜授業と連携して稚内の観光ガイドメニュー作成のワークショップなどをおこない、未来の観光ガイドを育成する研修を行った。90人近くの中学生達は休憩時間も熱心に取り組む子達も多く、校長先生や担当の先生からも大変好評をいただいた。稚内中学校は、ホテルや飲食店などが集中する稚内中央地区からノシャップ岬までの観光ルートの校区の子達が集まる学校だが、事前の調査で稚内市を観光地だと思っている生徒は一人もおらず、この地域が 30 万泊の一大観光地であることや日本人が一度は訪れたい観光地に必ず稚内が入っていること、外国人旅行者から注目されつつあることなどをレクチャーした。その後、グループに分かれて地域の隠れたポイントを抽出するワークショップを行った。
- ⑬平成 28 年 6 月に観光庁広域周遊ルートに宗谷地方が選定されたことを受け、訪日外国人旅行者(インバウンド)向けの情報提供のニーズが高まっている。このことも考慮し、外国人観光客向けに観光系ゼミナール学生による観光協会カウンターにおける対面での情報発信や、観光協会の動画制作事業と連携してユーチューブへの発信等、多角的なおもてなしを行うとともに、外国人観光客の観光資料としてニーズの高い A4 三つ折りのパンフレット作成を行った。

### 3. 事業実施における成果等

- ⑤現状ではデータ数が少ないことが課題であるが、将来、協力店舗数の拡大を見込んだ仕様とすることにより、大学以外でも例えば観光協会などで使えるプラットフォームを築くことができたと考える。また、当事業以外でも学内でも複数のアプリが開発されている。また、地域においてもアプリ開発への関心が高まっており、きっかけ作りに寄与したと考えている。オープン

ソースで開発を続けることにより、これらのアプリが地域観光振興において相乗効果を生むと考えられる。

⑩ワークショップで集まった情報は例えば「飲み屋の跡を、お父さん達が自分たちの『飲み場』にリフォームして酒盛りをしていること」や「地元の人しか買いにいかないソフトクリーム屋があること」などすぐにでも観光資源となるものばかりであった。また「公園にトイレがないこと」などのネガティブ情報も観光客にとっては有益であることを知り、参加者は観光的な視点と観光事業の視点を学んだ。先生達からも、地元を見つめ直す良いきっかけになった、グループ学習の新しい形を学べたなどの評価を受け、観光を通して地域振興に寄与できたと考える。

⑪学生自身が外国人観光客への接客を通しアンケート集計を行い、9月の全国シンポジウムにおいて、インターネット・紙媒体・対面といった複数のチャンネルでの情報提供の必要性という外国人のニーズ等について発表することができた。「観光冊子」では、アンケート集計で行った外国人観光客の声を反映させ、多言語化の情報ツールを作成することで、異文化の観光客への街の良さをいかにして伝えるべきかを学生が主体的に考える機会となった。

#### **4. 特に重点的に取組んだ事業等**

学生が取材・調査などの情報収集を行うことと、情報メディアを活用して収集した情報を発信していくことを心がけた。

#### **5. 事業運営を通じて課題として残されたもの**

情報収集と情報発信について、これらの事業を双方とも行うことができる学生はなかなか現れない。情報発信、特にプログラミングを学ぶ学生は、観光を学ぶ学生と専攻が異なっていることが原因である。しかしながら、本学が「情報メディア学部」であるという特性をふまえ、情報の収集から発信までをひとつの流れの作業として担当できる学生を育成していきたいと考えている。

#### **6. 目的に対する達成度合い**

当初の目標は概ね達成できたと判断している。

#### **7. 事業全体を通しての自己評価、事業評価**

情報収集と発信については、細かな問題を抱えつつも、概ね順調に進行している。次年度以降は、観光ガイドアプリについてさらなる進展が見られるようにしたい。



観光ガイド研修については、中学校の土曜授業の中で担当するという形をとったが、大変有意義なものであった。次年度以降も、何らかのかたちで継続していきたいと考えている。

## 5. 外部評価

---

### 実施要項

地（知）の拠点整備外部事業評価委員会（第3回）

日 時 平成29年7月4日（火）14:00～15:50

場 所 稚内北星学園大学本館1階会議室

### 議事次第

1. 開 会
2. 委員紹介、出席説明員、事務局紹介
3. 学長挨拶
4. 諮問状交付
5. 議事スケジュール、答申手続等
6. 議長選出
7. 議 事
  - 事業実績等報告
  - 個別評価の質疑
  - 全体評価の質疑
8. 議事の終結
9. 閉 会

### 外部事業評価委員名簿

所属・役職	要綱第4条第1項	氏名
名寄市立大学 教授	1号委員	松倉 聡史
北海道教育庁宗谷教育局 次長	2号委員	柏谷 祐
株式会社富田組 常務取締役	3号委員	佐々木良徳

※ 松倉聡史委員が委員長となった。

### 説明員名簿

役職	氏名
学長・事業推進代表者	斉藤 吉広
副学長・事業推進責任者	佐賀 孝博
プログラムオフィサー	遠藤 孝夫
地域教育支援室長	米津 直希
地域観光支援室長	B.P. ゴータム
まちなか振興支援室長 (兼) まちなかメディアラボ運営会議議長	若原 幸範
図書館長 (わくほくメディアラボ運営会議議長)	安藤 友晴
事業推進室 室員	石橋 豊之
事業推進室 室員	三浦 猛
事業推進室 室員	鏡山 樹



稚星大第 18 号

平成 29 年 7 月 4 日

地(知)の拠点整備外部事業評価委員会

委員長 松倉 聡史 殿

稚内北星学園大学

学長 斉 藤 吉 広

### 諮 問 書

(平成 28 年事業評価について)

稚内北星学園大学地(知)の拠点整備事業外部評価に関する要綱(平成 28 年 4 月 20 日)第 3 条に基づき、本学の実施する大学 COC 事業における平成 28 年度事業実績について、「地(知)の拠点整備事業」に関する自己点検評価及び外部評価委員会による評価の実施要領(平成 27 年 4 月 20 日制定、平成 28 年 2 月 1 日改正)による貴会の評価及び意見を求めます。



平成 29 年 9 月 15 日

稚内北星学園大学

学長 齊藤 吉広様

稚内北星学園大学 COC 事業

外部評価委員長(名寄市大) 松倉 聡史

平成 28 年度地(知)の拠点整備事業に係る外部評価について

先に諮問を受けた稚内北星学園大学地(知)の拠点整備事業に係る、平成 27 年度事業実績について、平成 29 年 7 月 4 日外部事業評価委員会を開催したので、評価委員会における審議結果及び事業評価について別紙答申書として答申いたします。

なお、貴学におかれましては、今後とも大学 COC 事業の総合的かつ計画的な推進を着実に遂行され、目標が達成できるよう最善の努力を尽くされることを期待します。



# 答 申 書

## 答申にあたって

貴学は平成26年度より「地(知)の拠点整備事業」に取り組み、「地域の教育力向上」「観光まちづくり」「中心市街地活性化」という3つの地域課題に対し、大学の教員及び学生が一体となって地域志向・地域貢献に係わる多種多様な事業を展開し、多くの成果をあげられています。

平成28年度施行の大学COC事業の実施成果に係る、貴学の内部評価である自己点検評価結果について、「稚内北星学園大学地(知)の拠点整備事業外部評価に関する要綱」第3条により、外部評価についての諮問を受けました。

このことを受け、平成29年7月4日「外部事業評価委員会(以下「評価委員会」という)を開催し、貴学の実施した全ての事業の自己点検評価について、それが適正な評価であったのかどうかを、あらためて「地(知)の拠点整備事業に関する自己点検評価及び外部評価委員会による評価の実施要領」に基づく評価基準に照らし合せて評価を行うとともに、貴学のCOC事業に関する年度計画とその事業進捗状況等について、慎重かつ公正に審議を行い、本答申を行うものです。

## 1. 外部事業評価委員会総評

平成28年度事業実績としては、事業計画に記載された事業実施項目のいずれも計画どおりに達成できており、それによる成果も確認できました。また、個別事業に係る自己点検評価についても、評価委員会の評価とほとんど差異はなく、いずれも妥当なものであると結論できます。

取り組まれた22の個別事業について、それぞれの事業遂行にあたって様々な工夫を行い、学内外の連携がうまく機能して取組みがされていることは、貴学の地域志向、地域貢献への思い入れの強さを感じさせるものであります。



学内で行われた自己点検評価も、昨年度より事業の到達度に加え観点別評価を取り入れ、客観的評価と差異のない自己評価を心掛けている印象でした。結果、自己評価としては、多少自己抑制的に評価された事業もあったようですので、評価すべき事柄については、むしろ自己を高く評価しても良いと考えます。

貴学 COC 事業は、各事業を展開していく中で、目的に掲げている「地域に根ざし地域で活躍できる人材の育成」を図る一環として、「まちを教室に」を基本理念に据えて、随所に学生の実践授業(アクティブラーニング)を取り入れ、また個別事業における学生の役割を重視することで、学生の自発的かつ活発な活動が恒常的に行われており、貴学 COC 事業の成果が着実に表れてきていると言えます。

それらは「まちなかメディアラボ」による中心市街地活性化に向けた各種事業や、子どもたちの合同学習会における学習支援などに表れており、今後の活動にも期待が持てます。

中心市街地活性化への大学の拠点として位置づけられる「まちなかメディアラボ」については、課題とされる商店街等との連携強化をはかることで協働による発展が達成できるよう今後の活動にも注視していきたいと思えます。

また、意欲ある学生が多く事業を担当することによる負担については引き続き十分に留意して学生の活動を支援してください。

この他、「第1回全国シンポジウム」が参加者から高く評価され成功裏に終了できたことや、文部科学省による平成26年度からの取組みの中間審査である「平成28年度評価結果について」で「A」評価となったことは、これまでの不断の活動の成果によるものと理解しております。

評価委員会としては、貴学が「地(知)の拠点」にふさわしい大学を目指し、地域課題に真摯に向き合い、課題解決のために全学一丸となって取り組んでいることを高く評価するとともに、貴学が本 COC 事業を通じて名実ともに道北地域の「地(知)の拠点」となれることを願うものであります。



## 2. 分野別事業についての個別的評価と意見

### (教育分野)

- まちなかメディアラボは、市民向けの講習会を行うにとどまらず、貴学のアクティブラーニングの拠点として講義で使うなど、多様な運営を行っている点で評価できます。今後も市民や学生のニーズを掌握した運営が行われることを期待します。
- わくほくメディアラボは他大学での同様の施設運用を視察することで、学生が利用しやすいように運用などを改善し、学習コンシェルジュを中心として様々な企画を行っている点で今後ますます学生のアクティブラーニングの拠点として機能することが期待できます。
- 地域情報発信として、学生の視点でYouTube やアプリ開発を行い、映像作品についてはコンテストに入賞するなど外部からも評価をうけており、今後も一層の情報発信に努めることを期待します。

### (研究分野)

- 地域志向教育研究経費を活用した地域課題解決への方策について、研究分野の成果については、学会発表や地域活動報告会以外にも市民へ公開するよう努めてもらいたいと思います。
- 中央商店街に関する調査分析については、今後の取組みにも通じる重要な提言であると思うので、より具体的な分析や課題の公開を期待します。
- 制作した観光ガイドアプリなどは事業終了後も継続して利用できるよう進めて、市民も気軽に利用できるアプリになることを期待します。

### (社会貢献)

- 「まちラボにおける無料塾（教たま数学教室）」「放課後学力グングン塾」「豊富町の小中合同学習会」など、視察の成果を活かしながら教職課程の学生が活動している頑張りが伝わり非常に評価できます。反面、これまでも課題となっているように、学生の精神的、物理的負担は相当なものと推察されます。今後、それら負担について一層留意しながら事業を進めてください。



○まちなかメディアラボに常勤しているメディア表現指導員によって講座や個別指導を行うことで、常連となっている市民も増えてきたことは評価します。一方、総利用者数はやや減少傾向にあるということですので、さらなる対策を行い、中央商店街におけるまちなかメディアラボの存在意義を維持されることを期待します。

## (全体)

○平成 28 年度の大きな事業であった「全国シンポジウム」について好評であったことや、「地域活動報告会」「地域シンポジウム」が定期的に行われた点は評価できます。また、数多くの新聞報道を見ても貴学の COC 事業について、市民にも様々な情報が提供されていると思われま

す。○COC 推進連絡会議において、大学教員と自治体関係者や市内の関係各団体・機関の方々が一同に介して様々な意見交流を行うことはとても大切ですので、今後も一層の連携協働体制の構築を図られることを期待します。

○今年度は、昨年度に見られたスケジュール管理の甘さから未達成となるような事業もなく、予定通りに各事業が実施されたので、今後も工程管理をしっかりと行った事業運営を行って



## 6. 地域志向教育研究経費

### 6-1 平成 28 年度 地域志向教育研究経費（成果報告書）

#### (1) インバウンド観光における日本の「おもてなし」はどうあるべきか

～観光施設の展示説明を中心とした調査研究～

特任助教 高 シュウ

講 師 黒木 宏一

#### 【事業実績】

本研究は稚内市における中国語圏観光客の訪問動機に明確し、観光現状を整理し明らかにすることと主に、中国人観光客に対する観光施設の展示説明の外国語表記（多言語化）のあり方を検討することを目的とした。

具体的には以下二つの工程を遂行し、概ね研究目標について一定の成果を得た。

- ①、「中国語版ガイドブック」制作(平成 29 年 3 月完成、同年 4 月より水族館受付にて貸出し開始の予定)

平成 27 年度の水族館他言語プロジェクトにおいて作成された英語及びロシア語ガイドブックを引き続き、中国内陸向けの簡体字版と台湾・香港向けの繁体字版を作成しました。また、ガイドブックには中国語圏観光客に人気がる魚の食べ方や名前の由来などの情報を初めて記載され、中国語圏観光客向けの説明のあり方を試した。また、中国語版ガイドブックのデザインは留学生が中心として行った。

- ②、中国語圏観光客向けアンケート調査の実施（平成 28 年 7 月～9 月）

アンケート調査は中国語圏（内陸・台湾・香港）を対象とし、稚内観光協会、稚内ホテル旅館業組合と連携しながら市内に 7 軒ホテル・旅館・ペンションでアンケート調査を実施し、15 枚有効回答が得られた。調査結果から稚内を訪れる中国語圏観光客は以下の傾向が見られた。

- 1). 年齢層は 20 代、40 代が最も多く、比較的若い年齢層である。
- 2). 稚内での観光手段は半分以上の回答者はレンタカーを利用し、特に中国内陸の方も利用した回答が得られたことにより、今後における中国内陸と台湾・香港の観光客は酷似した交通手段を利用し観光する傾向が考えられる。
- 3). 観光地の情については中国内陸と台湾・香港は異なるメディアから入手することが明らかになった。中国内陸の観光客には SNS や口コミなど、旅行に関する専門性低いメディアをよく利用する一方、台湾・香港の観光客にはガイドブックや旅行雑誌など、旅行に関する専門性高いメディアを利用する傾向が見られた。

- 4). 稚内を訪れる目的については風景を選択した観光客が最も多く、買い物という回答がなかったため、稚内しかない自然景色を用い、幅広く宣伝するのは効果的であると考えられる。
- 5). 二度稚内に来るならどのような観光体験をしたいかという質問に対して、離島観光は第一選択として人気ではあるが、最も興味がないの第二位も選ばれた。このような状況は偏ったメディアにより情報発信にもたらず可能性が高く、今度における有効的なメディアを利用し、稚内を発信していく必要性を示唆した。

しかしながら、本研究はアンケート調査の有効回答に限られたため、上記の結果は稚内における中国語圏観光客の旅行現状には十分とは言えない。また、ノシャップ水族館展示物の入れ替えにより、中国語版ガイドブックの更新については今度の課題とする。

なお、本事業の研究経費は、ガイドブックのデザイン（学生アルバイト）と印刷に約7割、アンケート調査の実施にかかり約3割の研究費用を支出した。

### 【事業に係る具体的な成果】

論文[1] Shu Gao 「A consideration of the concept of “omotenashi” in regards to inbound tourism ~A case study of Wakkanai City~（紀要（稚内北星学園大学）第17号、2017年3月、査読なし、ページ未確定

[2] 黒木宏一・高澍・佐賀孝博「地域課題の解決への大学の主体的な関与：稚内ノシャップ寒流水族館多言語化 PJT を事例として」(紀要（稚内北星学園大学）第17号、2017年3月、査読なし、ページ未確定、H28 地域志向教育研究経費採択課題「ICT教育及び研究シーズを活用した観光施設の多言語化の検討」研究代表者：黒木宏一の成果を兼ねる)

学会報告等[1] 黒木宏一・高シュウ「地域課題の解決に大学のシーズを活かすこと—ノシャップ寒流水族館での取り組みの事例」(稚内北星学園大学第6回地域活動報告会第1部第2報告、H28 地域志向教育研究経費採択課題「ICT教育及び研究シーズを活用した観光施設の多言語化の検討」研究代表者：黒木宏一の成果を兼ねる)

[2] 黒木宏一・高シュウ・佐賀孝博「地域課題の解決に大学が教育研究活動として関与する意義—稚内ノシャップ寒流水族館多言語化 PJT を事例として」(日本経済政策学会第74回全国大会、自由論題セッション報告審査中)

そのほかに、稚内北星学園大学地域創造支援センター（一般社団法人稚内観光協会委託）日・英・個人観光客アンケート調査事業報告書（2016年11月30日）に本事業の成果の一部が用いられている。

## (2) ICT教育及び研究シーズを活用した観光施設の多言語化の検討

講 師 黒木 宏一

教 授 佐賀 孝博

### 【事業実績】

本研究の目的は、以下の通りであった。

平成27年度本学地域志向教育研究経費採択課題「インバウンドを意識した観光施設づくり―本学のシーズを活かした地域連携の試行―」（以下、「黒木ほか（2015）」という）は、観光施設においてインバウンドへの対応が未だ不十分である現状に着目し、本学のシーズを活かしてこの問題の解決を図ろうとしたものであり、その過程を整理し検証しようとするものであった。その結果、平成27年度に水族館の展示説明をもとに英語版とロシア語版のガイドブック（冊子）を学生とのプロジェクトチーム（水族館多言語化プロジェクト）を組織して制作した。

一方で、昨今のインバウンド観光においては、外国人観光客がスマートフォンなどの電子端末を持って来日しており、ホテルのロビーや周囲の路上でfree Wi-Fiを利用する姿が多くみられる現状にある（読売新聞オンライン[2015年2月10日]）。また、地図やガイドマップの多言語化の必要性や無料公衆無線LAN環境を求める外国人の声が顕著に高いことが、観光庁（2011）や総務省情報流通行政局（2014）などから報告されている。このようなことから、外国人旅行客の受け入れにあたっては、ガイドマップの多言語化と、無料公衆無線LAN環境の整備が行政施策として、あるいは観光地の取り組みとして求められているものと思料される。以上を踏まえ、本研究は黒木ほか(2015)において当初から次年度以降の課題として示していた「本学のシーズ＝ICT」の活用を、佐賀ゼミナールを中心として研究し、その結果の観光施設における実用化を検討すること目的に設定する。（以上、研究計画書を引用した。）

具体的には以下の各工程を遂行し、概ね研究目標について一定の成果を得た。

本研究は、次の内容で構成される。

#### 2-1. データベースの構築

水族館の展示は、季節や魚の成長に合わせて変更される。冊子では、水槽番号などの変更を定期的に行う必要がある。ICTの活用によってこれらの手間は格段に軽減されるが、そのために現に展示されているもの、展示が見込まれるものの個体の写真と説明文のデータ（英語、ロシア語、中国語）を格納するデータベースを構築した。

#### 2-2. Webページの制作

上記データベース構築の成果を活用するには、格納されたデータから必要な情報を取出し、利用者（外国人観光客）にわかりやすく表示されるWebページを制作した。

#### 2-3. 総合的な検証

本研究は、社会科学系と情報系の教員の共同研究である。社会科学系教員がリサーチア

ドミニストレーターとしての役割を担うことが、プロジェクトの成功に与える効果等についても合わせて検証し、教育の実践例として研究プロセスを整理した論文にまとめ公開する（3月末刊行予定。）

#### 2-4. 研究成果の公開

本研究におけるデータベース及びWebページは、稚内市で検討が進むWi-Fiの公共施設における活用方法を提示する一例として公開する(水族館H29年度グランドオープンより公開予定。)

#### 【事業に係る具体的な成果】

論文[1] 黒木宏一・高澍・佐賀孝博「地域課題の解決への大学の主体的な関与：稚内ノシャップ寒流水族館多言語化PJTを事例として」(紀要(稚内北星学園大学)第17号、2017年3月、査読なし、ページ未確定、H28地域志向教育研究経費採択課題「インバウンド観光における日本の「おもてなし」はどうあるべきか」研究代表者：高澍氏の成果を兼ねる)

学会報告等[1] 黒木宏一・高澍「地域課題の解決に大学のシーズを活かすこと—ノシャップ寒流水族館での取り組みの事例」(稚内北星学園大学第6回地域活動報告会第1部第2報告、H28地域志向教育研究経費採択課題「インバウンド観光における日本の「おもてなし」はどうあるべきか」の成果を兼ねる)

[2] 黒木宏一・高澍・佐賀孝博「地域課題の解決に大学が教育研究活動として関与する意義—稚内ノシャップ寒流水族館多言語化PJTを事例として」(日本経済政策学会第74回全国大会、自由論題セッション報告審査中)

その他成果物[1] 佐賀孝博、データベース「aqua.xlsx」(エクセル形式)

[2] 佐賀孝博、Webページ「<http://noshappu-aqua.jp/aqua.php>」

(3) 連続ドラマ制作による学生と豊富温泉街住民の意識変容

准教授 侘美 俊輔

准教授 若原 幸範

講師 黒木 宏一

#### 【事業実績】

本研究における調査は、4つ実施した。第1に、アンケート調査の実施である。2016年4月、7月、11月の3度実施した。4月は「本授業」のガイダンス、7月は本ドラマ制作の中間段階、11月はクランクアップ後(一部編集作業はあり)の段階で実施した。調査者の選定に当たっては、「本授業」を履修していた2年生14名、3年生1名への調査を3度実施した。なお4月は2人、11月は1名が欠席した。本授業の履修学生の出身地は、稚内市12名、豊富町1

名、釧路市1名、海外1名であった。

第2の調査、インタビュー調査である。インタビュー調査は、2016年11月～12月に実施した。調査者の選定に当たっては、他の学生と大きく仕事内容が異なると推察される俳優の学生2名と、本ドラマの制作に協力いただいた4名へ聞き取り調査を実施した。調査対象者には、事前に調査の主旨を説明し、ボイスレコーダーによる録音の承諾をとりながら実施した。インタビューアーは筆者が行った。調査は、一人当たり45分程度を目安とし、学生と地域住民に「半構造化インタビュー」を行った。学生への調査項目は、①本ドラマ制作の大変だったところ、②本ドラマを通じた学び、③豊富町への印象の変化、などについてである。また豊富町住民への調査項目は、①本ドラマの感想、②学生が作った意義について、③本映像を通じて学んだこと、などを質問した。本稿では得られた音声データの「テープおこし」を行い、そのトランスクリプトをもとに、質的記述的分析をおこなった。本研究費は、「テープ起こし」の研究補助と、調査旅費として4割を支出した。

第3に、旅行者へのアンケート調査である。7月から実施し、調査協力への、ノベルティとして約2割の研究費を支出した。川島旅館の旅行者へ、動画を見たかどうかのアンケート調査を実施し、回答者へのお礼としてサロベツ・エコネットワークで購入したポストカードを200枚使用した。

第4に、11月に千葉市幕張で開催された「全映協2016フォーラム」への参加による情報収集である。このシンポジウムは、名作との呼び声が高い映画『この世界の片隅に』の制作秘話、クラウドファンディングや、まちづくりへの発展可能性などが議論され、本研究に多大なる示唆を与えた。本研究費から宿泊費を支出している。

### 【事業に係る具体的な成果】

本研究の成果として、最も注目すべき成果について下記に述べる。映像制作に当たった「学生の地域意識に対する変容」についてである。本ドラマの制作に当たった学生のほとんどは稚内市出身であるが、その多くは、「隣町」である「豊富町」、「豊富温泉街」について「行ったことがない」、「ほとんど知らない」と回答していた。稚内から豊富町へは距離にして約40キロ、車で約40分程度の距離にある。前章までに見たように、学生たちは5月～9月の土、日の多くを豊富町に通い詰めた。また7月に川島旅館で合宿したことや、撮影で豊富町の住民との交流を深めながら撮影に望んだ。その結果として、学生たちは、当初「とよみ」と記号的な理解であった町について、本ドラマ制作によって自然、景色、食材（食品）、人など、「まち」を多面的に理解する大きな契機として脳裏に刻まれたものと推察される。これらの結果は、「映像制作を通して、地域を理解する」という1つの新しい可能性となることが示唆された。

本研究では、学生による連続ドラマ制作を「映像制作」の枠組みにとどまらず、学生、地域住民、旅行者（動画視聴者）や、地域づくりなど多様な視点を取り入れた分析を試みた。とりわけ本学は「情報メディア学部」を持つことから、映像制作を通じて学生や地域住民がどのように学びを深めるのか、その一連の制作過程を実践的に追い上げ検証することには、一定の意義があるものと推察される。このような民間企業との連携による教育実践は、

COC 事業終了後におけるモデルケースの1つとなりえるものと推察される。その点では、本研究に一定の意義があったと言えよう。

<本研究成果の発表、刊行物>

- ・ 侘美俊輔、牧野竜二、黒木宏一、若原幸範、2017、「連続ドラマ制作による学生と豊富町住民の意識変容～『エゾガンゾウの咲くまちへ』の制作過程に注目して～」、稚内北星学園大学紀要17。
- ・ 侘美俊輔、2016、「連続ドラマ『エゾカンゾウの咲くまちへ』制作による教育効果の検証」、第6回地域活動報告会（第1部）、稚内北星学園大学。
- ・ 侘美俊輔、若原幸範、黒木宏一、牧野竜二、2016、「連続ドラマ制作による学生と豊富温泉街住民の意識変容」、第1回COC全国シンポジウム、稚内北星学園大学。

(4) プログラミング文脈が数学の理解に及ぼす影響－稚内北星学園大学の学生を対象とした調査

准教授 小泉 真也

### 【事業実績】

■2016年7月19日（火）18:20～21:30

本学12名の学生を被験者とする検証授業を実施

（協力した学生に対する人件費、金3,000円 × 12名=金36,000円は、2月1日以降、順次執行）。

■2016年10月29日

公益社団法人日本数学教育学会 第49回秋期研究大会 口頭発表

渡航費として金58,240円を支出

■2017年3月16日

予備費清算として書籍4冊とノートホルダー4件、計金 8/9 : 3 円を支出

### 【事業に係る具体的な成果】

■2016年9月17日、18日

第1回COC全国シンポジウム ポスター発表「プログラミング文脈が数学の理解に及ぼす影響」

■2016年10月29日

公益社団法人日本数学教育学会 第49回秋期研究大会 口頭発表

「プログラミング的文脈が数学の理解に及ぼす影響」（於 弘前大学－青森県弘前市）

共著：濱田百代（情報メディア学部4年）、佐藤元彦（元本学教授・現北海道芸術高校）、澁谷久（本学教授）

■2017年3月

稚内北星学園大学紀要第16号「プログラミングは数学教師を夢見るか」執筆

(5) 「近所」のためのメディアの可能性

准教授 若原 幸範

教授 斉藤 吉広

**【事業実績】**

2017年1月12日 書籍6冊購入（書籍代：7,673円＋送料：1,542円）

2017年1月18日 書籍6冊購入（書籍代：22,842円）

2017年3月10日 調査補助（データ書き起こし：60,000円＝30,000円×2名）

**【事業に係る具体的な成果】**

■2016年9月17日～18日

第1回COC全国シンポジウム／第5回地域活動報告会 ポスター発表

表題：「近所」のためのメディアの可能性

■2017年2月14日

第6回地域活動報告会 口頭発表 ※本研究の一部を含めた報告

表題：稚内市中央商店街における状態調査 報告

※ 最終的な成果は2017年度の第7回地域活動報告会において発表する

(6) 「稚内オントロジー」の構築と公開

教授 安藤 友晴

助教 石橋 豊之

**【事業実績】**

■2016年8月から2017年1月にかけて、学生5名にデータ入力を依頼し、作業が完了した。

経費は84,000円であった。

■2017年1月にファイルを購入した。経費は9,180円であった。

■2017年3月に書籍を購入した。経費は6,361円であった。

**【事業に係る具体的な成果】**

オントロジーの基本設計は6月までにほぼ完了し、8月以降に稚内の主要な観光資源について、Wikipediaの記述をベースにしながらデータ入力を行った。プログラムでの処理がしやすいように、稚内の主要な観光資源に関する基礎データを整備できたことが本研究の成果である。

(付記) 以上は、各研究代表者より、平成29年3月に提出された「平成28年度地域志向教育研究経費事業実施報告書」の記載のとおりである。



## 6-2 平成 28 年度 地域志向教育研究経費

### (1) 応募要項

#### 平成 28 年度 稚内北星学園大学地域志向教育研究経費 応募要領

#### I 地域志向教育研究の目的と領域

##### 1. 目的

地域志向教育研究経費は、平成 26 年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択された「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備」（以下「本事業」という。）を推進するにあたり、研究の成果を通じて地域に新たな活力を与え、地（知）の拠点として地域に貢献することを目的とする。

##### 2. 研究課題（事業）の領域

- ①地域の教育力向上に関する研究
- ②観光まちづくりに関する研究
- ③中心市街地活性化に関する研究
- ④その他、本事業を推進する上で学長が必要と認める研究

#### II 申請要領

##### 1. 申請数と申請上限額

1 人の申請者（個人研究または共同研究代表者）としての応募は 1 つの研究課題（事業）とし、申請上限額は 10 万円とする。

##### 2. 選定件数

選定件数は 6 件以内とする。

##### 3. 研究期間

研究期間は単年度（平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日）とする。ただし、今年度採択された申請者が同一の研究課題（事業）によって次年度以降に再申請することを妨げない。

##### 4. 申請者の範囲

当研究経費の申請者は、教育・研究・社会貢献を地域志向に改革しようとする本学の常勤教員（特任教員を含む）でなければならない。なお、他から類似の経費の助成を受けている者は除く。

##### 5. 対象経費について

研究実施にあたっては、パソコン、カメラ、器具など本学既存の備品等を極力活用することとし、備品購入は学長がやむを得ないと認める場合に限る。

学会参加のための旅費については、申請した研究に係る成果発表として 1 回分のみを対象とする。

## 6. 申請方法と申請期限

### ①応募方法

「地域志向教育研究経費申請書」(様式1)により、具体的な活動計画を記載の上、COC推進委員会(coc@wakhok.ac.jp)へ提出する。なお、地域志向教育研究経費審査委員会の選考にあたり公開プレゼンテーションを実施\*するので、プレゼンテーション用資料を合わせて提出する。

※ 公開プレゼンテーションは学生を含めた大学関係者が参加でき、発表15分・質疑応答10分で行う。プレゼンテーション内容についての質問は地域志向教育研究経費審査委員会のみとするが、その他参加者がプレゼンテーション内容について質問や感想などあれば配布する感想用紙に記入することとする。なお、公開プレゼンテーションは3月16日(水)教授会終了後を予定する。

### ②申請期限

平成28年3月11日(金)までに提出する。

## III 選考方法及び採択

地域志向教育研究経費審査委員会(事業推進代表者(学長)、事業推進責任者(副学長)及びプログラムオフィサー)において選考し、学長が最終決定する。採択結果は、申請者(共同研究の場合は研究代表者)に通知する。ただし、審査委員会委員が代表研究者、もしくは共同研究者を務める申請の選考には当該委員を除くものとする。

## IV 研究成果の報告と公表

すべての研究計画及び成果については、下記の形式により報告・公表しなければならない。

①平成29年3月31日までにCOC推進委員会へ「地域志向教育研究経費成果報告書」(様式2)を提出する。

②平成28年度中に開催される「地域活動報告会」にて研究計画を発表する。

③平成29年度中に開催される「地域活動報告会」にて発表する。ただし、研究過程において公表可能な成果がある場合には、平成28年度中に開催される「地域活動報告会」にて発表することが望ましい。

④本学紀要または学会誌等において、掲載可能な論文形式で発表する。

## V その他

この要領に定めるもののほか、地域志向教育研究経費に関し必要な事項は別に定める。

(2) 選考結果講評



稚内北星学園大学 COC 事業

## 平成 28 年度「地域志向教育研究経費」の選考について

平成 28 年 3 月 31 日

地域志向教育研究経費審査委員会

事業推進代表者：斉藤吉広

事業推進責任者：佐賀孝博

プログラムオフィサー：手島孝通

(選考結果)

次の 6 件を採択とする。

- ・ インバウンド観光における日本の「おもてなし」はどうあるべきか -観光施設の展示説明を中心とした調査研究-
- ・ ICT 教育及び研究シーズを活用した観光施設の多言語化の検討
- ・ 連続ドラマ制作による学生と豊富温泉街住民の意識変容
- ・ プログラミング文脈が数学の理解に及ぼす影響 -稚内北星学園大学の学生を対象とした調査
- ・ 「近助」のためのメディアの可能性
- ・ 「稚内オントロジー」の構築と公開

(選考経過)

本学 COC 事業計画に基づいて、平成 28 年 2 月 24 日に「平成 28 年度 稚内北星学園大学地域志向教育研究経費 応募要領」を学内に公表し、応募を 3 月 11 日に締め切った。応募は 6 件あり、以下の通りである。

タイトル	申請区分	研究代表者	共同研究者
インバウンド観光における日本の「おもてなし」はどうあるべきか -観光施設の展示説明を中心とした調査研究-	観光まちづくり	高	黒木
ICT 教育及び研究シーズを活用した観光施設の多言語化の検討	観光まちづくり	黒木	佐賀
連続ドラマ制作による学生と豊富温泉街住民の意識変容	その他	侘美	若原、黒木
プログラミング文脈が数学の理解に及ぼす影響 -稚内北星学園大学の学生を対象とした調査	地域の教育力向上	小泉	
「近助」のためのメディアの可能性	中心市街地活性化	若原	斉藤
「稚内オントロジー」の構築と公開	観光まちづくり	安藤	石橋

これらの応募を受け、3 月 28 日に本学教職員・学生を対象とした公開プレゼンテーションを行い、同日、地域志向教育研究経費審査委員会を開催し、選考基準の検討および個々の研究計画に対する評価を行った。

(選考基準)

「応募要領」にある通り、地域志向教育研究経費は、平成 26 年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択された「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備」を推進するにあたり、研究の成果を通じて地域に新たな活力を与え、地（知）の拠点として地域に貢献することを目的としている。

審査委員会は、この目的に適った研究計画を選考するべく、以下の基準を設けた。

- (1) 課題設定が、地域のニーズに適ったものであるか、そしてそのニーズの解決に向かうことに寄与するか
- (2) 波及効果として、その研究が個人的な成果にとどまらずに大学全体の地域志向の向上に役立ち、地域における大学の存在意義を高めるものであるか
- (3) 研究過程が、学生の育成を伴うものか、また、学外との連携のもとに進められるものであるか
- (4) 経費使用が適切か

(選考理由)

- ・ **インバウンド観光における日本の「おもてなし」はどうあるべきか -観光施設の展示説明を中心とした調査研究-**

中国語のガイドブック制作に関しては昨年度の「インバウンドを意識した観光施設づくり」の取り組みをさらに充実する上で評価できる。

外国人に対するアンケート調査についても、地域課題を考える上で重要であるが、調査方法等に関しては十分に準備して望んでほしい。また、得られたアンケート結果については行政や関係団体等へ何らかの形で情報提供できるよう進めることとする。

- ・ **ICT 教育及び研究シーズを活用した観光施設の多言語化の検討**

昨年度の「インバウンドを意識した観光施設づくり」を拡充して、ICT 分野での貢献を加えた点で評価できる。

成果物は外部に公開できるよう進めることとする。また、今後類似の取り組みを行う際の参考になるように作業工程や費用の算出などシステム構築のノウハウも蓄積できることを期待する。

- ・ **連続ドラマ制作による学生と豊富温泉街住民の意識変容**

実際の映像制作を通しての学生の地域意識に対する変容について考察するということは前例がないということであり評価する。

考察に関しては、主観的にならずに客観的指標に基づいて計測されることを期待する。

- ・ **プログラミング文脈が数学の理解に及ぼす影響 - 稚内北星学園大学の学生を対象とした調査**

「数学嫌い」な学生をプログラミングという観点で学ばせ、数学を興味ある科目とすることについては評価する。

ただし、本研究の結果について公開プレゼンテーションで代表者が述べていたように、地域の中学校・高等学校の生徒においてもその手法が役立つことを意識し、中学校・高等学校教員の研究会での成果発表など何らかの形での情報発信は必須とする。

- ・ **「近助」のためのメディアの可能性**

構成員の特徴が異なる2つの町内会について、調査を行い、今後の町内会活動について一定の提言を行うという点は評価する。

将来的には稚内市の全町内会を対象とした調査を行うことを期待する。

そのためにも、本調査結果については何らかの形で成果を公表するよう進めることとする。

また、地域通貨についての調査は付随的なものと考えられるので時間的な制約がある場合は、必ずしも進めなくても良い。

- ・ **「稚内オントロジー」の構築と公開**

稚内市の観光施設等のデータを観光資源として活用する取り組みとしては評価する。

ただし、対象や収録語彙数の具体例が曖昧なので、例えば「稚内市観光ガイドマップに掲載されているワードについてはすべて登録する」というように具体的な達成目標をもって進めることとする。

(総評)

6件の応募には11人の教員が参画しており、多くの教員が地域志向研究に積極的に取り組む姿勢を示したことは高く評価されるべきであるが、教育研究費が減額されたためか、昨年よりも件数で2件、延べ応募人数が5名少ない点は憂慮すべき点である。しかしながら内容については、昨年度に引き続きそれぞれの専門性を活かしながら地域課題に臨もうとしており、「地（知）の拠点」としての研究面での本学のポテンシャルが示されており、さらに本学学生と共に進めるテーマが複数あり学生の育成という観点からも意義深い公募となった。

採択されたテーマについては、審査委員会の意見をもとに着実な実行と成果報告がなされることを期待する。

今回の選考における研究計画のプレゼンテーションは、昨年度の「教員相互の研究交流の場となったと同時に、それを通して稚内・宗谷地域の抱える課題について共有するよい機会となった。次年度以降はさらに幅広く公開することも検討したい。」という評価を基に学内教職員・学生も聴衆対象としたが、周知期間が短かったせいもあり、事務職員・学生の参



加がなかった。この点については公開プレゼンテーションを行う時期も含めて来年度は再度検討したい。

なお、平成 29 年度も引き続き文科省に補助金調書を提出する予定である。今回応募を見送った教員も来年度に向けて構想・研究を進めていただきたい。



## 7. 平成 28 年度 COC 全国シンポジウム

---

平成 28 年度 COC 全国シンポジウム所管支援室長  
地域教育支援室長 米 津 直 希

### 全国シンポジウム 1 日目

2016 年 9 月 17、18 日の二日間にわたって本学の COC 事業にとって第一回目の全国シンポジウムを開催した。前年度の地域シンポジウムとのつながりを意識して、同様のテーマ「地域の教育力向上に果たす大学の役割—稚内・宗谷の子育て運動に学ぶ地域の担い手づくり—」を掲げ、地域における大学の役割を考えることを大きな狙いとした。また、広く全国から参加者を招くことを意識して、市外・道外の知見に学ぶことと、本地域の取り組みを全国の方々にお伝えすることを意識した。

こうした考えに基づき、基調講演では宗谷の教育を 25 年にわたって研究されてきた、名古屋大学大学院の植田健男教授にご講演をお願いし、パネルディスカッションでは稚内市内の教育関係者の方々にご登壇いただいた。植田教授に専門的・研究的視点からご講演いただいたことで、宗谷の教育について客観的にとらえ、その価値を確認する機会となった。また稚内市内の教育関係者の方々にも実際の取り組みについてお話いただいたことで、本地域の教育の状況や地域における位置づけについて知る機会を得た。これら基調講演とパネルディスカッションを同時に開催したことで、宗谷・稚内の教育についてより立体的に理解する機会とすることができたと考えている。

基調講演では植田教授が学生とともに学んでこられた際のエピソードも交え、本地域の教育の意義について、近年の教育をめぐる情勢と照らし合わせながらお話いただいた。本地域の教育関係者があたりまえのものとして認識している、教育・子育てのあり方（教育の目的）や地域との結びつきの強さが、全国的な視点で見れば必ずしも当たり前のことではなく、注目されるべき取り組みであることが改めて理解された。

続いてのパネルディスカッションでは、表純一氏（稚内市教育長）、若林利行氏（稚内高等学校校長）、網谷一幸氏（稚内潮見が丘中学校校長）をお招きし、それぞれの地域への思いや大学への期待を語っていただいた。また、斉藤吉広本学学長が、これまでの活動とその意義について報告した。これらのご報告に対するコメンテーターとして植田教授にもご登壇いただいた。進行は佐賀孝博副学長が行った。

表教育長からは、行政の立場からの大学へのご支援や、これからの活動への期待についてお話しいただいた。若林校長からは、稚内高校のご紹介や地域での活動、また本学

と連携した教育事業の展望についてお話しいただいた。網谷校長からは、稚内市の子育て運動と教育の課題、学校の役割、大学への期待についてお話しいただいた。稚内市の状況や、その中での大学の位置づけと期待される役割について共有された。また、斉藤学長から学生による地域での活動についてお話しいただいたことで、学生の活動を知っていただき、またそのことで学生を激励する機会にもなった。

以上のご報告を受けて、植田教授からは、大学が地域へ貢献することを、大学が地域に何かをしてあげるといった関係ではなく、地域で学んでいる大学生たちがここで成長し自立していくことで、広い意味での教育力の向上を目指すことが必要なのではないか、という趣旨のコメントをいただいた。今後のCOC 事業推進、大学のあり方を考えるために、極めて重要なご指摘をいただいた。

本シンポジウムのCOC 事業としての位置づけは、「本学COC の意義、進捗、発展可能性を地域内外の人々と共有するため」(平成 28 年度調書)とされている。上述の内容から、この目的は十分に達成されたと考えている。これは、ご多忙の中ご登壇下さった先生方はもちろん、ご参加いただいた方々、また本学スタッフのご協力があったることであることは言うまでもない。本シンポジウムに関わったすべての方が、本地域の教育のあり方に学び、今後の将来を展望していただければ、より幸いである。



## 全国シンポジウム 2 日目 兼 第 5 回 地域活動報告会

全国シンポジウム 2 日目は「第 5 回地域活動報告会」「ポスターセッション」「エクスカージョン」を行った。

地域活動報告会は、通常「地域教育」「地域観光」「まちなか振興」がそれぞれの活動を同一会場で報告していたが、第 5 回となる今回の地域活動報告会は全国シンポジウム内で開催するためそれぞれのセッションに興味をもって参加いただく方々とより深い議論ができる



のではないかとということで、3セッションを別会場で同時に開催した。本試みは意図通り各セッションで活発な議論が交わされ有意義な時間となった。アンケートでも「写真も活用されていて、学生自身にも楽しみに感じていると伝わりました」「アンケートや実体験にもとづく詳細な分析・検討があり、今後のまちづくりに役立つと思います」「こんな活動していることを商店街の人達に伝えて中央商店活性化策を共有していくことが大切と分かった」など好意的な評価をいただいた。

ポスターセッションは本学のCOC 関連研究のほか、山形大学、東北公益文科大学からも発表があり、それぞれの研究内容について熱心な質疑が行われ、予定時間を過ぎた後も議論する光景も見られた。

エクスカージョンでは、宗谷岬、北防波堤ドーム、旧瀬戸邸（国登録有形文化財）などを巡った。主なガイド役は学生が担当し、慣れないながらも当日までの準備と練習が活かされ熱心なガイドに好評を得ることができた。

2日間に渡って行われた全国シンポジウムは、全国の方に本学のCOC に関連する事業について理解をしていただけたと同時に稚内の良さを知っていただく良い機会になったと感じている。また、1日目の夜に行われた情報交換会も含めて、本学教職員も全国の関係者の方と多くの意見交換を行うことで、今後のCOC 事業への取り組みに活かす発想やヒントを多数いただいた。これら全国の方と交流を持つことで、さらなる事業の進展を推進できそうだという実感を持たせたことが、全国シンポジウムを開催した何よりの成果であった。今後も全国のCOC 事業に注目しながら本学も活動に注力していきたい。





# 第1回 全国シンポジウム

## 地域の教育力向上に果たす大学の役割

稚内・宗谷の子育て運動に学ぶ地域の担い手づくり



### 2016.9.17 土

稚内北星学園大学 (1401 教室)

- 13:30 受付
- 14:00 開会式
- 14:15 基調講演
- 15:30 パネルディスカッション
- ※18:00 情報交換会 (有料)

### 2016.9.18 日

稚内北星学園大学 (1401 教室)

- 9:30 受付
- 10:00 地域活動報告会 (課題別)
- 11:30 ポスター発表
- 12:30 昼食 (大学食堂)
- ※13:30 エクスカーション

 稚内北星学園大学  
Waknanai Hokusei Gakuen University

 地(知)の拠点

稚内北星学園大学  
第1回COC全国シンポジウム・第5回地域活動報告会

## 「地域の教育力向上に果たす大学の役割」

稚内・宗谷の子育て運動に学ぶ地域の担い手づくり

主 催：稚内北星学園大学

会 場：新館 1401 教室ほか

日 時：2016（平成28）年9月17日（土）14時00分～19時30分

18日（日）10時00分～17時00分

後 援：稚内市、稚内市教育委員会、猿払村、猿払村教育委員会、豊富町、豊富町教育委員会、利尻町、利尻町教育委員会、浜頓別町、浜頓別町教育委員会、枝幸町、枝幸町教育委員会、中頓別町、中頓別町教育委員会、利尻富士町、利尻富士町教育委員会、礼文町、礼文町教育委員会、幌延町、幌延町教育委員会、稚内市校長会、宗谷校長会、稚内市教頭会、宗谷公立学校教頭会、北海道高等学校協会道北支部ブロック、北海道教育庁宗谷教育局、北海道宗谷総合振興局、稚内市子育て推進協議会、稚内市連合父母と先生の会、稚内市教育研究会、株式会社宗谷新聞社、株式会社稚内プレス社、稚内市母と女教師の会

### 1. 第1回COC全国シンポジウム・第5回地域活動報告会プログラム

#### 【第1日目】9月17日（土）

13:30～	受付開始（稚内北星学園大学新館1階ロビー）
14:00～14:15	●開会（稚内北星学園大学新館1401教室） 開会挨拶 稚内北星学園大学 学長 斉藤 吉広 ご来賓挨拶 稚内市長 工藤 広様 実行委員長挨拶 稚内北星学園大学地域創造支援センター地域教育支援室長 （情報メディア学部講師） 米津 直希
14:15～15:15	●基調講演 演題：「宗谷における地域に根ざした教育運動の今日的意義」 講師：植田 健男氏（名古屋大学大学院教授）
15:15～15:30	休憩
15:30～17:00	●パネルディスカッション パネラー 表 純一氏（稚内市教育委員会教育長） 若林 利行氏（北海道稚内高等学校校長） 網谷 一幸氏（稚内市立潮見が丘中学校校長） 斉藤 吉広氏（稚内北星学園大学学長） コメンテーター 植田 健男氏（名古屋大学大学院教授） 司会進行 佐賀 孝博氏（稚内北星学園大学副学長）
17:00～18:00	移動
18:00～19:30	●情報交換会 キッチン倶楽部「菜好」（大黒ビル3F）

#### 【第2日目】9月18日（日）

9:30～	受付開始（稚内北星学園大学新館1階ロビー）
10:00～11:30	●第5回地域活動報告会 a. 地域教育セッション（稚内北星学園大学本館303教室） 座長：米津 直希（地域創造支援センター地域教育支援室長・講師）

（次頁続く）

(前頁続き)	●第5回地域活動報告会
	b. 地域観光セッション (稚内北星学園大学本館 302 教室) 座長：藤崎 達也 (地域創造支援センター地域観光支援室長・准教授)
	c. まちなか振興セッション (稚内北星学園大学本館 301 教室) 座長：若原 幸範 (地域創造支援センターまちなか振興支援室長・准教授)
11:30～12:30	●ポスターセッション (稚内北星学園大学本館 3 階)
12:30～12:45	休憩 ※ 学生食堂が営業しています (11:30～L.O.13:00)
(12:45)	(エクスカーション参加者集合：稚内北星学園大学新館 1 階ロビー)
13:00～17:00	●エクスカーション 大学====宗谷岬==== (14:45 稚内空港)====北防波堤ドーム ====国登録有形文化財「旧瀬戸邸」==== (16:30 稚内駅)====大学 ※ ==：貸切バスでの移動

## 2. 基調講演者 ご紹介



### 植 田 健 男 氏

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 (教育経営学)  
名古屋大学教育学部附属中・高等学校前校長。現学生相談総合センター長。  
平間信雄氏 (現稚内市教育相談アドバイザー) との出会いから、宗谷の教育調査を開始。  
以来、学生と共に 25 年にわたって宗谷教育調査を続けている。

## 3. 第5回地域活動報告会報告要旨

### 【地域教育セッション】

#### a-1. Kacotam 視察について 18 日 (日) 10:05～

- 山内飛龍 (情報メディア学部3年)
- 私たち稚内北星学園大学の教たまゼミの取り組みの一つに「教たま数学教室」というものがある。その活動を進めるうえで、先進事例である札幌の NPO 法人 Kacotam の活動に注目し、視察を行った。Kacotam とは学びの機会格差の解消を目的として立ち上げられ、楽しい学び場を作り、学びの機会と自己肯定感の向上をキーワードに活動している組織だ。実際に視察に行き、子供との接し方や、子供たちを集中させるための工夫に学ぶべき点を感じた。今回の視察で学んだことと、私たちの取り組みへの活かし方について、ご報告します。

#### a-2. 「教たま数学教室」での学び 10:15～

- 佐藤千秋 (情報メディア学部3年)
- 教職ゼミでは、地域活動の一つとして、商店街のまちラボにて数学教室を行っている。現在、毎回大学生 2 人と中学 3 年生 4 人で行っている。活動の目標は数学が苦手な生徒に「わかった」という体験、学生が「教える勉強になった」という体験を作ること。数学以外にも、生徒との関わり方や次回の活動準備等、実践的なことが行え、学ぶことも多い。今後は夏休み、後期と活動を予定している。

#### a-3. 「放課後学力向上グングン塾」での学び 10:35～

- 東雲恭平 (情報メディア学部3年)
- 平成 28 年 5 月 31 日から始まった「放課後学力向上グングン塾」に私たち学生が稚内中央小、東小、南小、潮見が丘小の 4 校に助手として行き、学習支援活動をさせていただいています。その中で、本学の「放課後学力向上グングン塾」に関わる意義、学生側が目的としているもの、具体的な活動内容、なにが私たちの学びにつながっているのかをご説明させていただきます。

**a-4. 「豊富町「学び」の教室～サマーチャレンジ～」での学び**

10:45～

○ 中島健太郎（情報メディア学部3年）

○ 平成28年8月4日（木）から6日（土）の3日間にわたり、豊富町の小中学生を対象とした「学び」の教室（サマーチャレンジ）が開かれた。場所は豊富町セミナーハウスで行われ、小中学生40人ほどに対し、大学生9人がゼミ活動の一環として取り組んだ。今回、小中学生に対し「教えあう」「学びあう」といった活動の中で、子ども達を見て理解することや、能動的に学ぶ姿勢を身につけさせるよう工夫した指導方法などの成果について報告する。

**a-5. 学習支援における教職としての学び**

11:00～

○ 米津直希（情報メディア学部講師）

○ 地域教育支援室では、教職を目指すゼミ（数学教員養成ゼミ、以下「教職ゼミ」）のゼミ活動を中心に、地域の子もたちを対象とした学習支援活動を行っている。これは地域貢献の側面のみならず、教師を目指す教職ゼミの学生にとって重要な学びの機会になっている。本報告では、学生の学習支援体験が、教職としての学びにおいてどのように意義づけられるかについて整理する。

**【地域観光セッション】****b-1. 地域情報発信映像作品制作のための学生のサハリン取材**

18日（日） 10:00～

○ 牧野竜二（情報メディア学部非常勤講師）

○ 稚内市は行政主導により、「秘境」「国境」「環境」というポテンシャルを生かした観光まちづくりを進めている。本事業では、そのうち「国境」を取り上げ、旧樺太（現サハリン）を望む地理的・歴史的背景は他地域では持ち得ない本市固有の資源と再認識し、それを観光まちづくりに活用するため、サハリンに残る樺太の痕跡を映像素材として収集した。その成果、そしてその過程における学生の変化を報告する。

**b-2. 観光ガイドアプリの開発「観光まちづくりにおける情報収集・発信」**

10:20～

○ 卒間静希、菅原拓人、山岸竜也、MARKOVA KATERINA（情報メディア学部3年）

○ 宗谷地方の観光はインバウンド（訪日観光客）への対応が遅れていると言われていています。そのような中で、稚内観光協会などで進めている取り組みの外国人を対象としたアンケートの最新データなどをもとに、稚内市の課題や各国の事情に即した対応策について検討しました。

**b-3. 観光ガイドアプリ（1）飲食店を魅せる**

10:45～

○ 清野恭大、橋 史晃、畠山 健、米本直史（情報メディア学部4年）

○ 稚内北星学園大学では、授業科目「ソフトウェア制作演習」において、地元の飲食店の紹介を行う観光ガイドアプリの開発を行っています。本発表では開発に携わっている学生から、開発中の観光ガイドアプリの概要について報告します。

**b-4. 観光ガイドアプリ（2）観光資源を魅せる**

11:00～

○ 山田汐莉、鈴木秀門、田中爽太、伊藤岬也、須貝龍之介（情報メディア学部3年）

○ 地域情報のデータは、せっかく集めていても人間が読むことが前提となっていてソフトウェアでの利用が想定されていなかったり、特定のソフトウェアにのみ対応していて他のソフトウェアでの活用が難しくなっていることがあります。本発表では、観光ガイドアプリのための、稚内の地理・観光資源・歴史などの地域情報に関する基礎データの整備について報告します。

**【まちなか振興セッション】****c-1. 「まちなかメディアラボ」について**

18日（日） 10:10～

○ 中野恋香（稚内北星学園大学メディア表現指導員）

○ 「まちなかメディアラボ（略称：まちラボ）」は中心市街地における学生の教育および自主的活動の拠点、またメディア表現活動等の市民の活動拠点、さらにこれらを通じた中心市街地・商店街活性化の拠点となること

を目指して 2015 年 4 月にオープンした。本報告では、オープン後 1 年間の「まちラボ」の事業内容や利用者数、利用者の様子などを整理し、その成果・課題を報告する。

**c-2. 映像制作を通じたまちなか振興・まちづくりの可能性～稚内中央商店街における動画制作を事例として～** 10:30～

- 佐美俊輔（情報メディア学部准教授）
- 現在、地元学や地域学などの講座が全国各地で行われていますが、本学ではこれに映像制作を組み合わせ、新たなアウトプットの展開を目指しています。学生 5 名が制作した映像をもとに商店街振興とまちづくりの可能性についてご紹介いたします。

**c-3. わっかないコーヒーフェスティバル 2016 について** 10:50～

- 山岸純樹、吉岡大輔（情報メディア学部 2 年）
- 稚内中央商店街企画のイベントプランコンテストにて採択された「WCF 稚内コーヒーフェスティバル 2016」を平成 28 年 2 月 13 日に開催。意外と知られていない稚内とコーヒーの関係。そして、縮小する喫茶店の魅力を稚内市民に知ってもらうために地元大学生が立ち上がった。今回はその一部に過ぎないがコーヒーフェスティバルを写真とともに企画内容と成果の説明を報告する。

**【ポスターセッション】**

18 日（日） 11:30～12:30

**d-1. 山形大学 COC+事業：協働・循環型「やまがた創生」人材育成事業の紹介**

- 堀内史朗（山形大学）
- 山形大学 COC+事業の概要について紹介する。

**d-2. 東北公益文科大学社長インターンシップ**

- 鎌田剛、小野敦（東北公益文化大学）
- 東北公益文科大学で展開している社長インターンシップについて紹介する。

**d-3. インバウンドを意識した観光施設づくりー 本学のシーズを活かした地域連携の試行ー（成果報告）**

- 黒木宏一、南満幸、相原成史、岩本和久、藤崎達也、高シュウ（稚内北星学園大学）
- 本学のシーズである留学生の存在（英語、ロシア語、中国語）と専門家の存在（英語、ロシア語）を活かすとともに、安価な方法でこれを実現するという経済的側面を合わせて検討し、稚内市ノジャップ寒流水族館における館内の展示説明の多言語化を行った。

**d-4. 「南中ソーラン」の今日的意義と課題の検証（研究成果）**

- 佐美俊輔、若原幸範（稚内北星学園大学）
- 稚内市立稚内南中学校で誕生した「南中ソーラン」は、稚内というローカルから出発し世界へと発信されている。本稿は、「南中ソーラン」を「教育学」と「体育学」の視角から重層的に検証し、「地域の教育力向上」に向けた基礎的な方向性を提示する。

**d-5. 稚内市の ICT 利用教育：実態の把握と教員向け研修カリキュラム策定**

- 安藤友晴、佐賀孝博、浅海弘保、小泉真也、ゴータム・ビシュヌ・プラサド、米津直希（稚内北星学園大学）
- 本研究は、稚内市の ICT 利用教育の充実のため、稚内市の小中学校の教員の ICT 活用に関する実態を調査するとともに、その結果をもとに小中学校の教員向けの ICT 利用教育に関する研修カリキュラムを策定するものである。

**d-6. 地域内在型物語の制作・蓄積・提供手法の構築**

- 小谷彰宏（稚内北星学園大学）、柊和佑（中部大学）
- 本研究は、地域住民およびそのコミュニティのニーズに合ったデジタルアーカイブのための基盤的情報技術と利用環境の構築手法に関する研究開発を、日本最北の地である稚内の気象状況・観光行政・事業にフィ

ットする形で実証実験を通じて進めるものである。ここでは、デジタルアーカイブの総合的な利用を通じた、新たな「まちづくり」の形態に関して研究を進める。

**d-7. ICT 教育及び研究シーズを活用した観光施設の多言語化の検討 (研究計画)**

- 黒木宏一、佐賀孝博 (稚内北星学園大学)
- 本研究は黒木ほか (2015) において当初から次年度以降の課題として示していた「本学のシーズ=ICT」の活用を、佐賀ゼミナールを中心として研究し、その結果の観光施設における実用化を検討すること目的に設定する。

**d-8. インバウンド観光における日本の「おもてなし」はどうあるべきか—観光施設の展示説明を中心とした調査研究— (研究計画)**

- 高シュウ、黒木宏一 (稚内北星学園大学)
- 中国人観光客に対してアンケート調査を実施し、稚内を訪れる動機を解明するとともに、黒木ほか (2015) で制作のガイドブックについて中国語版を制作する。これらの研究を通じて、中国人観光客への相応しい接遇の在り方を検討する。

**d-9. 連続ドラマ制作による学生と豊富温泉街住民の意識変容 (研究計画)**

- 佐美俊輔、若原幸範、黒木宏一、牧野竜二 (稚内北星学園大学)
- 本研究は、学生による豊富温泉街を舞台とした連続ドラマ『エゾカンゾウの咲くまちへ』の制作過程に着目し、①制作に当たった学生たち、②豊富町や豊富温泉街の住民にどのような意識の変容があるのか検証する。

**d-10. 「近助」のためのメディアの可能性**

- 若原幸範、斉藤吉広 (稚内北星学園大学)
- 本研究の目的は、町内会・自治会に即して「近助」の理論的な位置づけを図り、地域の来歴、機能、人などをメディア利用を含めてどのように共有し、“つながり”を構築し得るのかを明らかにすることである。

**d-11. 「稚内オントロジー」の構築と公開**

- 安藤友晴、石橋豊之 (稚内北星学園大学)
- 本研究では地域の地理・観光資源・歴史に関するオントロジーを考察し、その具体例として稚内の地域情報を整備する。成果物はLinked Open Data (LOD) として公開し、さまざまな応用を企図している。

**d-12. プログラミング文脈が数学の理解に与える影響—稚内北星学園大学の学生を対象とした調査**

- 小泉真也 (稚内北星学園大学)
- 本研究は、『『数学嫌い』の大学生』に対して、過去のつまづきを解消することを目的としている。検証ではプログラミング言語を取り入れた数学授業を企画し、プログラムによる理論の記述が数学の理解につながることの立証を試みる。

※ ポスター報告とは、参加者と報告者がポスターに書かれた研究内容を、時間をかけて検討する報告形式です。

稚内北星学園大学

**第1回COC全国シンポジウム・第5回地域活動報告会プログラム報告要旨**

■発行日：2016 (平成 28) 年 9 月 17 日 ■編集：稚内北星学園大学地域創造支援センターCOC事業推進室 (大学事務局総務課)  
■表紙デザイン：COCデザイン堂 坪内 晃 ■発行：稚内北星学園大学COC推進委員会第1回COC全国シンポジウム実行委員会  
委員長 米津直希 ■〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目 2290-28 電話 0162-32-7511 (代表) FAX 0162-32-7500 (代表)



COC推進委員会 活動レポート No.8 (2016.11.16)

## 第1回COC全国シンポジウム

地域の教育力向上に果たす大学の役割

—稚内・宗谷の子育て運動に学ぶ地域の担い手づくり—

### COC地域シンポジウム開催

9月17日、18日の2日間にわたって、第1回COC全国シンポジウム「地域の教育力向上に果たす大学の役割—稚内・宗谷の子育て運動に学ぶ地域の担い手づくり」を開催しました。

このシンポジウムはCOC事業の一環として取り組まれているもので、本学初めての本シンポジウムでは、昨年度の「地域シンポ」を踏まえ「教育」をテーマに開催しました。二日間でのべ250名の方々にご参加いただき、実り多い会となりました。



### 基調講演

14:15～15:15

開会式に続き、基調講演を行いました。開会式には**工藤広雅内市長**にもご出席いただき、激励のお言葉をいただきました。

基調講演は、これまで25年にわたって宗谷・稚内の教育を研究されてきた、名古屋大学大学院教授の**植田健男先生**にご登壇いただきました。宗谷・稚内の教育の魅力である地域に根ざした教育実践について語っていただき、またそれが新学習指導要領への対応など、現代教育の課題に対してどのように意味があるのかを語っていただきました。

### パネルディスカッション・情報交換会

パネルディスカッションでは、**表純一氏**(稚内市教育長)、**若林利行氏**(稚内高等学校校長)、**網谷一幸氏**(潮見が丘中学校校長)にご登壇いただき、それぞれのご活動における地域への思いと、大学への期待についてお話いただきました。それぞれのご活動における地域との結びつきやその中での大学の役割を確認しました。

また本学学長の**斉藤吉広**から、地域に対するこれまでの大学の取組みや、大学として考える担うべき役割についてお話ししました。

全体討議では道外からご参加いただいた方々からもご発言いただき、充実したディスカッションとなりました。

場所を移して行われた情報交換会にも多くの方にご参加いただき、他大学のご関係者や地域の方々に、ご感想と励ましのお言葉をいただきました。駆けつけていただいた**青山滋副市長**に締めのご挨拶をいただきました。



### 開催概要

主催：稚内北星学園大学

会場：新館1401教室ほか

日程：平成28年

9月17日(土)14:00～19:30

開会式／基調講演／パネルディスカッション／情報交換会

9月18日10:00～16:30

第5回地域活動報告会(課題別)／ポスターセッション／エキスカーション

目的：本学COCの意義、進捗、発展可能性を地域内外の人々と共有する(H28COC事業調書記載の事業内容より)

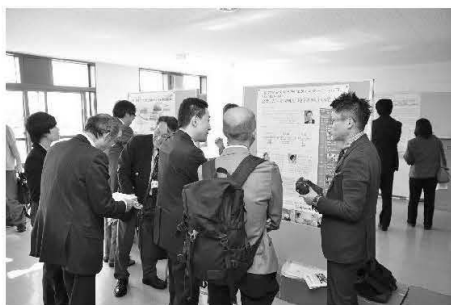


### 第5回地域活動報告会

18日は第5回地域活動報告会、ポスターセッション、エクスカーションを行いました。

地域活動報告会は年に2回、本学の取組みを地域の皆様にご報告することを目的として行っています。通常は一つの会場で「地域教育」「地域観光」「まちなか振興」がそれぞれの活動について報告しますが、今回は特別版として3セッションを別会場で同時に開催しました。各会場で、学生を中心とした報告会が行われました。

各会場に多くの方々にご参加いただき、学生の活動へ激励をいただきました。



### ポスターセッション

ポスターセッションは研究を一枚のポスターにまとめ、それを発表者と参加者が検討する報告形式です。本学教員が行った「地域志向研究」の発表が内容の大半でしたが、山形大学、東北公益文科大学の先生方からもポスター発表にご参加いただきました。

会場ではそれぞれの研究内容について熱心に議論が行われました。

### エクスカーション

エクスカーションでは宗谷岬、北防波堤ドーム、旧瀬戸邸(国登録有形文化財)などを巡りました。主なガイド役は藤崎准教授のゼミ生が担当し、この日のために準備と練習を重ねてきました。当日は慣れないながらも熱心な学生のガイド役にご好評をいただきました。



### アンケートより

(1日目)

- 自分たちの地域に関することだったため興味も沸き嬉しい話も聞けました。ありがとうございます。(学生)
- さまざまな学校段階の方からのお話を、1度にきけたことがとてもよかったです。稚内、宗谷の教育の全体像が良くわかりました。(ご所属無回答)
- 最近の北星大学は、本当に変わってきましたよね。近くに住んでいるので、学生の様子もわかります。地域と大学の双方向での発展を期待しています。(一般参加)

(2日目)

**<教育>**写真も活用されていて、学生自身にも楽しみに感じていると伝わりました。もう少し自信を持って発表すれば良いと思う。  
**<観光>**アンケートや実体験にもとづく詳細な分析・検討があり、今後のまちづくりに役立つと思います。観光という着眼から地域の歴史を知るという素晴らしい体験だと思えます。  
**<まちなか>**こんな活動していることを商店街の人達に伝えて中央商店活性化策を共有していくことが大切と分かった。一緒に活動してきた内容について改めて知ることができてよかったです。

### 総括

本シンポジウムは、本学の役割や学生の活動を市内外の方々にお伝えし、本学のあり方について共に考える機会として役割を果たすことができたと考えている。開催にあたっては様々な課題があったものの、結果的に学内外の多くの方々を支えられ無事閉会を迎えることができた。こうした取り組みを学内だけのものにするのではなく、地域の方々や他地域の方々にご参加いただき、成果や課題を共有できる場として機能させることが今後の本学にとって重要だと考える。

執筆: 米津直希(第1回COCシンポジウム実行委員長)

お問合せ先 稚内北星学園大学COC推進委員会  
 担当 米津直希  
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28  
 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500  
 E-mail info(アット)wakhok.ac.jp  
 ※(アット)は@に変換してください  
 URL http://www.wakhok.ac.jp/coc/html

## 8. 地域活動報告会

---

### 8-1. 第5回地域活動報告会

地域活動報告会も今回で第5回を数える。COC推進委員会では、具体的な実施計画の草案を4月19日に決定し、5月17日に実施計画を正式決定した。その後、教授会への報告、委員会での審議を重ね、実施に至ったものである。

主 催：稚内北星学園大学

会 場：新館 1301 教室

日 時：平成 28 年 9 月 18 日（日）9 時～12 時

#### 開催の目的

COC事業の個々の具体的事例を共有し、担当者（教職員・学生）を励ます【H28COC事業調査（34）記載の成果目標より】

#### 発表形式

口頭発表、ポスターセッション、エクスカージョンが行われた。

これまでの口頭発表は、一つの会場で「地域教育」「地域観光」「まちなか振興」がそれぞれの活動について報告が行われているが、今回は、特別版として、3つのセッションを別会場で同時に開催し、各会場で、学生を中心とした報告会が行われた。

また、ポスターセッションは、本学教員が行った「地域志向教育研究」の発表が内容の大半だったが、山形大学、東北公益分科大学の教員の方からの参加もいただき、それぞれの研究内容について、熱心な議論が行われた。

エクスカージョンでは、宗谷岬、北防波堤ドーム、旧瀬戸邸（国登録有形文化財）などを巡った。ガイド役は本学の学生が担当した。

<地域教育セッション>

---

報告 1

- 報告者 山内 飛龍 (情報メディア学部 3年)
- 報告題名 Kacotam視察について

報告 2

- 報告者 佐藤 千秋 (情報メディア学部 3年)
- 報告題名 「教たま数学教室」での学び

報告 3

- 報告者 東雲 恭平 (情報メディア学部 3年)
- 報告題名 「放課後学力向上グングン塾」での学び

報告 4

- 報告者 中島 健太郎 (情報メディア学部 3年)
- 報告題名 「豊富町「学び」の教室～サマーチャレンジ～」での学び

報告 5

- 報告者 米津 直希 (情報メディア学部講師)
- 報告題名 学習支援における教職としての学び

<地域観光セッション>

---

報告 1

- 報告者 牧野 竜二 (情報メディア学部非常勤講師)
- 報告題名 地域情報発信映像作品制作のための学生のサハリン取材

報告 2

- 報告者 卒間 静希、菅原 拓人、山岸 竜也、MARKOVA KATERINA (情報メディア学部 3年)
- 報告題名 観光ガイドアプリの開発「観光まちづくりにおける情報収集・発信」

報告 3

- 報告者 清野 恭大、橋 史晃、畠山 健、米本 直史 (情報メディア学部 4年)
- 報告題名 観光ガイドアプリ (1) 飲食店を魅せる

報告 4

- 報告者 山田 汐莉、鈴木 秀門、田中 爽太、伊藤 岬也、須貝 龍之介 (情報メディア学部 3年)
- 報告題名 観光ガイドアプリ (2) 観光資源を魅せる

## <まちなか振興セッション>

---

### 報告 1

- 報告者 中野 窓香 (稚内北星学園大学メディア表現指導員)
- 報告題名 「まちなかメディアラボ」について

### 報告 2

- 報告者 侘美 俊輔 (情報メディア学部准教授)
- 報告題名 映像制作を通じたまちなか振興・まちづくりの可能性  
～稚内中央商店街における動画制作を事例として～

### 報告 3

- 報告者 山岸 純樹、吉岡 大輔 (情報メディア学部2年)
- 報告題名 わっかないコーヒーフェスティバル2016について

## <ポスターセッション>

---

### 報告 1

- 報告者 堀内 史朗 (山形大学)
- 報告題名 山形大学COC+事業：協働・循環型「やまがた創生」人材育成事業の紹介

### 報告 2

- 報告者 鎌田 剛、小野 敦 (東北公益文化大学)
- 報告題名 東北公益文科大学社長インターンシップ

### 報告 3

- 報告者 黒木 宏一、南 満幸、相原 成史、岩本 和久、藤崎 達也、高 シュウ (稚内北星学園大学)
- 報告題名 インバウンドを意識した観光施設づくり  
ー 本学のシーズを活かした地域連携の試行ー (成果報告)

### 報告 4

- 報告者 侘美 俊輔、若原 幸範 (稚内北星学園大学)
- 報告題名 「南中ソーラン」の今日的意義と課題の検証 (研究成果)

### 報告 5

- 報告者 安藤 友晴、佐賀 孝博、浅海 弘保、小泉 真也  
ゴータム・ビシュヌ・プラサド、米津 直希 (稚内北星学園大学)
- 報告題名 稚内市のICT利用教育：実態の把握と教員向け研修カリキュラム策定

報告 6

○報告者 小谷 彰宏 (稚内北星学園大学)、終 和佑 (中部大学)

○報告題名 地域内在型物語の制作・蓄積・提供手法の構築

報告 7

○報告者 黒木 宏一、佐賀 孝博 (稚内北星学園大学)

○報告題名 ICT教育及び研究シーズを活用した観光施設の多言語化の検討 (研究計画)

報告 8

○報告者 高 シュウ、黒木 宏一 (稚内北星学園大学)

○報告題名 インバウンド観光における日本の「おもてなし」はどうあるべきか  
—観光施設の展示説明を中心とした調査研究— (研究計画)

報告 9

○報告者 侘美 俊輔、若原 幸範、黒木 宏一、牧野 竜二 (稚内北星学園大学)

○報告題名 連続ドラマ制作による学生と豊富温泉街住民の意識変容 (研究計画)

報告 10

○報告者 若原 幸範、斉藤 吉広 (稚内北星学園大学)

○報告題名 「近助」のためのメディアの可能性

報告 11

○報告者 安藤 友晴、石橋 豊之 (稚内北星学園大学)

○報告題名 「稚内オントロジー」の構築と公開

報告 12

○報告者 小泉 真也 (稚内北星学園大学)

○報告題名 プログラミング文脈が数学の理解に与える影響  
—稚内北星学園大学の学生を対象とした調査

## 8-2. 第6回地域活動報告会

地域活動報告会は今回で第6回目。COC推進委員会では、具体的な実施計画を平成28年10月24日に決定した。その後、教授会への報告、委員会での審議を重ねた。また、今回は初めての試みとして二部構成とし、第1部14時30分から（会場：稚内北星学園大学）、第2部19時30分から（会場：まちなかメディアラボ）として、開催した。

### <第一部>

主 催：稚内北星学園大学

会 場：新館1301教室

日 時：平成29年2月14日（火）14時30分～16時

### <第二部>

主 催：稚内北星学園大学

会 場：まちなかメディアラボ

日 時：平成29年2月14日（火）19時30分～20時30分

### 開催の目的

COC事業の個々の具体的事例を共有し、担当者（教職員・学生）を励ます【H28COC事業調書（34）記載の成果目標より】

### 発表形式

口頭発表とし、主に学生が参画した調書記載事業から選定した。

## <第1部>

---

### 報告1 (地域教育分野)

- 報告者 安藤 友晴 (情報メディア学部 教授)
- 報告題名 稚内市内における ICT 利用教育の実際と支援

### 報告2 (地域観光分野)

- 報告者 黒木 宏一 (情報メディア学部 講師)
- 高<sup>ガオ</sup> 澍<sup>シユウ</sup> (特任助教 学習コンシェルジュ)
- 報告題名 地域課題の解決に大学のシーズを活かすこと  
ーノシャップ寒流水族館での取り組みの事例

### 報告3 (地域振興研究)

- 報告書 佐美 俊輔 (情報メディア学部 准教授)
- 報告題名 連続ドラマ「エゾカンゾウの咲くまちへ」制作による教育効果の検証

## <第2部>

---

### 報告1 (まちなか振興分野)

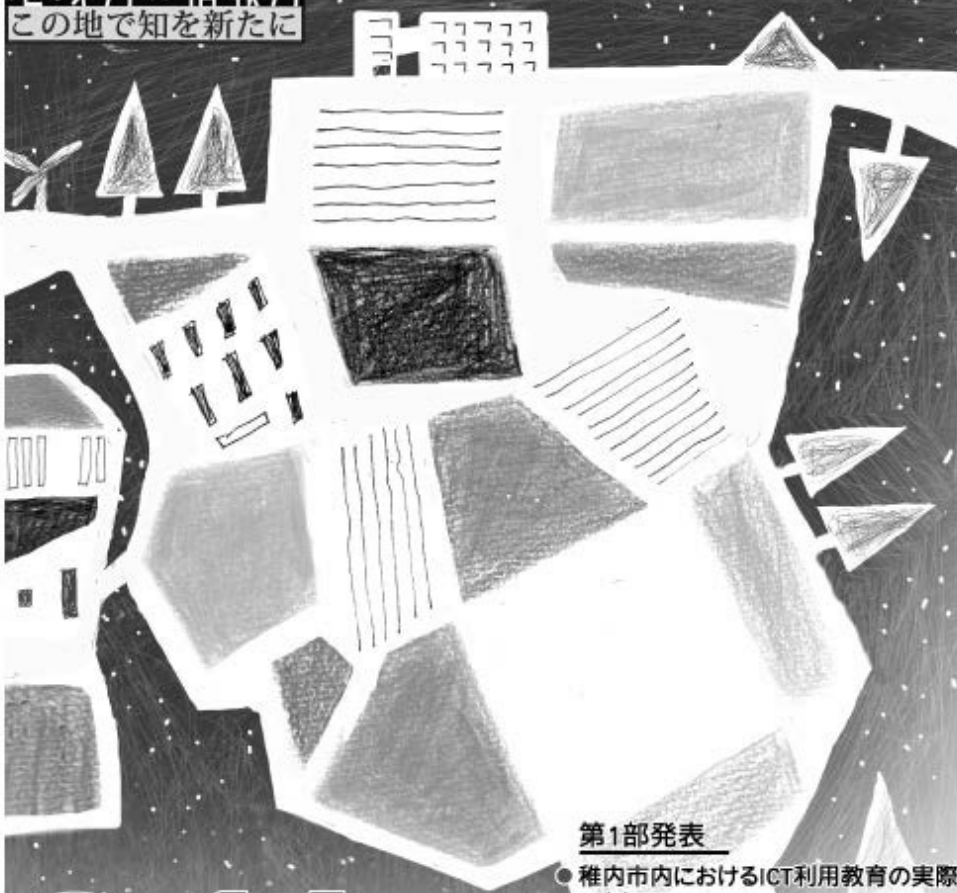
- 報告者 藤澤 翔太、武田 大貴、濱田 里実 (以上、情報メディア学部 4年)
- 報告題名 稚内中央商店街動画制作における学生の学び

### 報告2 (まちなか振興分野)

- 報告者 梶浦 里沙、勝又万由子、佐藤 佑介、中島 拓人、三石 美保、山岸 純樹、  
吉岡 大輔 (以上、情報メディア学部 2年)
- 報告題名 稚内市中央商店街における状態調査 (実習)



地域力×情報力  
この地で知を新たに



第6回  
COC

# 地域活動報告会

## 2.14火

**第1部**  
稚内北星学園大学新館3階中教室  
14時30分～16時

**第2部**  
まちなかメディアラボ  
19時30分～20時30分

誰でも参加できます(無料)

■事前受付の必要はありません。  
当日、直接お越しください。

■問い合わせ/  
稚内北星学園大学事務局  
フリーダイヤル 0120-311-014

■ホームページ/  
URL <http://www.wakoh.ac.jp/>



### 第1部発表

- 稚内市内におけるICT利用教育の実際と支援  
安藤友晴(情報メディア学部 教授)
- 地域課題の解決に大学のシーズを活かすこと—ノシャップ寒流水族館での取り組みの事例—  
黒木宏一(情報メディア学部 講師)  
ガオ・シュウ(特任助教・学習コンシェルジュ)
- 連続ドラマ『エゾカンゾウの咲くまちへ』制作による教育効果の検証  
佐美俊輔(情報メディア学部 准教授)

### 第2部発表

- 稚内中央商店街紹介動画制作における学生の学び  
藤澤翔太、武田大貴、濱田里実(情報メディア学部4年)
- 稚内市中央商店街における状態調査(実習)報告  
梶浦里沙、勝又万由子、佐藤佑介、中島拓人、三石美保、山岸純樹、吉岡大輔(情報メディア学部2年)  
若原幸範(情報メディア学部 准教授)



稚内北星学園大学  
Wakoh University



地(知)の拠点





## はじめに

地域活動報告会は今回で第6回目です。COC推進委員会では、具体的な実施計画を平成28年10月24日に決定しました。その後、教授会への報告、委員会での審議を重ねました。また、今回は初の取り組みとなる2部制の形を取り、第2部をまちなかで遅い時間に開催しました。また第4回に引き続き、学内公募を実施し、学生の参画を得ました。

以上の過程を経て、学生と教職員による「第6回地域活動報告会実行委員会」を組織し、実施に至ったものです。

主催：稚内北星学園大学

会場：新館1301教室 (第1部) / まちなかメディアラボ (第2部)

日時：平成29年2月14日 (火)

14時30分～16時 (第1部) / 19時30分～20時30分 (第2部)

### ●開催の目的

本年度の本学COC事業の成果が地域内外の人々と共有される【H28COC事業調書(21)記載の成果目標より】

### ●発表形式

口頭発表とし、第1部は教職員を中心に地域志向教育研究経費に採択された研究の成果報告、第2部は学生が中心市街地に関する事業・研究報告を行いました。

### ●実行委員

越後武蔵・梶浦里沙・勝又万由子・佐藤佑介・中島拓人・保坂崇秀・水本一哉・三石美保・山上純也・山岸 純樹・吉岡太輔・黒木宏一・石黒志津・鏡山 樹・佐藤ゆかり・中川圭太・三浦 猛・向 光宏・米津直希(実行委員長)

## 第1部 発表要旨

### <第1報告：地域教育分野>

#### ○報告者

安藤 友晴(情報メディア学部 教授)

#### ○報告題名

稚内市内におけるICT利用教育の実際と支援

#### ○報告内容要旨

稚内北星学園大学は、稚内市内のICT利用教育を支援するため、小中学校の教員を対象とした講習会を2014年度から継続して実施してきました。また、2015年度には小中学校の教員を対象としたICT利用教育に関する質問紙調査を実施しています。本報告では、これらの実践について詳しく報告し、得られた知見をご紹介します。

### <第2報告：地域観光分野>

#### ○報告者

黒木 宏一(情報メディア学部 講師)

高 樹(特任助教 学習コンシェルジュ)

#### ○報告題名

地域課題の解決に大学のシーズを活かすこと—ノシャップ寒流水族館での取り組みの事例

#### ○報告内容要旨

地域志向研究経費に採択された黒木らのノシャップ寒流水族館をフィールドとした3つの研究は、本学の持つシー

ズを生かすこと、教育活動と接近することを通じて行い、多言語化という一つの課題を解決しようとしています。これについて、研究の背景、学内、学外連携を通じた推進、調査の実施、成果の一端を紹介しました。

### <第3報告：地域振興研究>

#### ○報告者

佐美 俊輔(情報メディア学部 准教授)

#### ○報告題名

連続ドラマ「エゾカンゾウの咲くまちへ」制作による教育効果の検証

#### ○報告内容要旨

本学では、(株)川島旅館(豊富町)からの依頼により、連続ドラマ「エゾカンゾウの咲くまちへ」を制作しました。現在YouTube上で公開中の連続ドラマは、本学の2年生を中心に17名の学生と牧野先生(本学非常勤講師)を中心に制作いたしました。この連続ドラマ制作は、学生たちにどのような学び、意識変容をもたらしたのでしょうか。本報告では、連続ドラマの制作過程を俯瞰的に参与観察していた報告者(佐美)の視点からご報告いたしました。

<http://movie.kawashimaryokan.co.jp/>

## 第2部 発表要旨

<第1報告：まちなか振興分野>

○報告者

藤澤 翔太

武田 大貴

濱田 里実(以上、情報メディア学部 4年)

○報告題名

稚内中央商店街動画制作における学生の学び

○報告内容要旨

報告者たちは、2015年度に若原・侘美ゼミのゼミ生5名と牧野先生(本学非常勤講師)を中心に、稚内中央商店街のPR動画を5本制作いたしました。本報告では、この制作過程において、報告者たちが学んだこと、感じたことなどをそれぞれの立場からご報告いたしました。また、地域活動報告会の発表時に、ノーザンノースさん、大王本店さんの動画を初公開いたしました。URL [https://www.youtube.com/watch?v=ly\\_wHWy9ZtU](https://www.youtube.com/watch?v=ly_wHWy9ZtU)

<第2報告：まちなか振興分野>

○報告者

梶浦 里沙 勝又 万由子 佐藤 佑介 中島 拓人

三石 美保 山岸 純樹 吉岡 大輔

(以上、情報メディア学部2年)

○報告題名

稚内市中央商店街における状態調査(実習)

○報告内容要旨

講義「社会教育課題研究」では学生の実習として、稚内中央商店街の歴史と現状を明らかにし、今後の方向性を探るための調査を行いました。前期には資料調査を行い、後期には商店街の皆さんにインタビュー調査にご協力いただきました。この調査をふまえ、本報告では特に商店街の皆さんの“意識”に焦点を当てた分析を試みました。稚内中央商店街のこれらに向けてどんな取り組みが必要なのか、報告者による考察をご報告しました。



## 出席者へのアンケートから

当日第1部に参加された60名のうち31名(51.7%)から、第2部に参加された50名のうち15名(30%)から回答を得ました。

第1部の参加者からは、「活動を具体的に説明していただき、大変参考になりました」「地域での密着した活動について今後も期待しています」などのお声をいただきました。一方で「もっと市民に知らせてほしい」との課題もいただきました。第2部の参加者からは「稚内の歴史背景を良く調べてあり感心した」「学生の取組みが良かった」などの声をいただきました。一方で、もっと学生の発表の場を設けてほしい、もっと若い人の声を聞きたいとのご意見をいただきました。

「報告会に来てよかったと思いますか」との問いについて「大変良かった」の回答が第1部では46.7%、第2部では35.5%でした。

## 総括

今回は初の試みとなる2部制をとりました。第1部のみで見れば来場者は減少傾向にありますが、トータルの来場者ではのべ110名と、大変多くの方々にご来場いただきました。

また、2部に分けたことにより、学生と教職員、双方の取組みについてご報告することができました。双方にご来場いただいた方もいらっしゃいました。今回の状況も踏まえて、本学の取組みについて今まで以上に知っていただけるよう、今後の報告会についても工夫をしていきたいと思っております。

本学COC事業も来年度で4年目となり、事業期間終了まで残すところあと2年となりました。事業期間終了後も稚内・宗谷地域の皆様と協力しながら取り組みを進めていくため、具体的な展望を描きながら、残りの期間の活動に取り組む必要があると感じています。

お問合せ先 稚内北星学園大学 地域教育支援室 米津直希  
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail [info\(wak\)@wakhok.ac.jp](mailto:info(wak)@wakhok.ac.jp)  
URL <http://coc.wakhok.ac.jp/> ※(ワク)は@に変換してください

## 9. COC 推進連絡会議

---

### 9-1. 実施要項

#### 第3回稚内北星学園大学 COC 推進連絡会議

日 時 平成 29 年 3 月 21 日 (火) 15 時～17 時

場 所 稚内北星学園大学本館 1 階会議室

#### 議事次第

#### 1. 開 会

開会挨拶 (学長 斉藤 吉広)

#### 2. 委員紹介及び資料確認

#### 3. 議 題

##### (1) 支援室等の活動報告

1. 地域教育支援室
2. 地域観光支援室
3. まちなか振興支援室
4. 学生 COC 支援室
5. わくほくメディアラボ
6. 事業推進室

##### (2) 討議

#### 4. 閉 会

委員名簿（出席者のみ）

委員名称	所属・役職	規程第3条	氏名
議長	学長 「事業推進代表者」	1号委員	斉藤 吉広
委員	副学長 「事業推進責任者」	1号委員	佐賀 孝博
委員	学部長	1号委員	安藤 友晴
委員	地域教育支援室長	3号委員	米津 直希
委員	まちなか振興支援室長	4号委員	若原 幸範
委員	地域観光支援室長	5号委員	藤崎 達也
委員	学生COC支援室長	6号委員	侘美 俊輔
委員	事業推進室長代行	7号委員	石橋 豊之
委員	図書館長 「わくほくメディアラボ運営会議議長」	8号委員	安藤 友晴
委員	学習コンシェルジュ・特任助教	10号委員	高 澍
委員	メディア表現指導員「まちなかメディアラボ所属」	10号委員	中野 窓香
委員	稚内市教育研究所所員	2号委員	江川 善次
委員	稚内市まちづくり政策部長	2号委員	川野 忠司
委員	稚内市建設産業部水産商工課長	2号委員	手塚 光行
委員	稚内市教育委員会学校教育課長	2号委員	田中 克良
委員	稚内中央商店街振興組合理事長	2号委員	尾崎 篤志
委員	（株）稚内観光協会専務理事	2号委員	東 政史
委員	猿払村教育委員会教育長	11号委員	眞坂 潤一
委員	豊富町教育委員会教育長	11号委員	小野寺英治
委員	北海道開発局稚内開発建設部地域振興対策室地域振興対策官代行	11号委員	鈴木 淳子
委員	北海道宗谷総合振興局地域政策部地域政策課長	11号委員	黒田 研一
委員	稚内商工会議所専務理事	11号委員	達 英二

## 9-2 議事要旨

紙面の都合上、討議及び感想（外部委員から）のみ抜粋して掲載する。

**○稚内市教育委員会学校教育課（田中委員）** 私たちの関係するところといいますと、やはり地域の教育支援室というところが直接的なかわりがあるのかなという中、ICTの研修というところで、電子黒板を今年は力を入れてやってもらったのですけれども、私たちも、電子黒板については、購入するのが非常に高価だということで、有用性というか、それを活用することで、いろいろ子どもたちに、どのように学習指導していくかというところではすごい有益なものだと思います。ただ、なかなか実情として、電子黒板を購入して、各学校に配置するという所までなっていないというのが現状なのです。

そういった中で、今、学校のほうで配置してやっているのが、実物投影機で手元を見せながらというところに力を入れて、各学校でやっております。先生方も、操作性とかということを考えて、すごく使いやすく、すぐ実践で使っているような状況ですので、そういったところも、もし実物投影機の活用方法というのですか、いろいろなまちでもやっているのですけれども、もし何かアイデアみたいなものがあれば教えていただきたいなということと、あとは継続してグングン塾ですとか、中学生を対象にした無料塾、そういったところについては今後もお願いしていきたいなと思っています。

ICTの研究について、今後どういうふうなお考えがあるのかなということはちょっと聞きたいところだったのですけれども。

**○安藤学部長** 実物投影機につきましては、実は初年度、若干取り扱わせていただいたということもありまして、少しお休みしていたところもあったのですが、今御質問もいただきましたので、ぜひ積極的に考えてまいりたいと思います。

**○稚内市まちづくり政策部（川野委員）** このCOCの部分とは直接関係ないのかもしれないのですが、普段から稚内市のまちづくりに対して、今までは先生たちがいろいろな部分で御協力をしていただいていたのですけれども、近年、学生さんも、例えば環境審議会ですとか、男女共同参画の委員ですとか、そういった部分で、公募の委員として申し込んで委員になっていただいて、若い意見で、いろいろ活性化を図っていただいています。

それと、会議ファシリティという、うちは数年前から、要はいろいろな会議の進行役を養成しようということをやっているのですが、それにも学生さんが結構参加をされていて、市役所に入庁した、職員で入った大学生のOBの方もいろいろ庁内のほうでやっ  
ていただいているので、非常に助かっているなと思います。

あと、今後は、COCの部分につきましても、何とか、うちの部分で言うと広報なりそ  
ういった部分の部署もありますので、もっともっと市民に対して周知というか、広報でき  
るような、そういった仕組みをまた、いろいろ協議しながら進めていきたいと思っていま  
す。

**○稚内市教育研究所（江川委員）** 私のほうからも、地域教育支援室のかかわりが多いの  
ですけれども、特に、先ほども話していたICT機器のことについては、研究所としても、  
先生方、あるいは学校の授業改善だとか、それから学力向上にICT機器をどう活用して  
いくのか、授業の現場にどう生かしていくのかということのニーズに応じていくというこ  
とを大きな目的にしていますので、その意味でいいコラボができていくのではないかなと  
いうふうに思います。

ただ、非常に学校現場のほうで忙しくなってしまうと、研修に出てくる時間もないとい  
う中で、どうやって各学校の研究と、どう結びつけていくかということでは知恵を出し合  
っていかなければならないかなというふうに思っています。

それから、無料塾やグングン塾の関係で、学生さん、本当に、こちらが心配するぐらい  
一生懸命やってくれているのですよね。ボランティアという名前はかなり過酷な条件の中  
で、それでも一生懸命笑顔でやってくれているということで、子供たちはやっぱり年齢が  
近いお兄さん、お姉さんに支援をしていただけるということで、すごく楽しみにもしてい  
るし、期待をしているというところで、これは3年目になって、間もなくそこでかわった  
子供たちが、きっとまた北星の学生になっていくというローテーションができてくるの  
ではないかなということも期待するぐらい、非常に大きな役割を果たしているかなとい  
うふうに思っています。

お忙しい中ですがけれども、何とか、私たちも学生の実力向上ということの一つの視野に  
入れながら、もっと大きくしていきたいなというふうに思っています。

**○宗谷総合振興局（黒田委員）** まず、稚内北星学園大学との係わりといいますと、大き  
な出来事として、先般、1月13日に振興局として初めての統括連携協定を締結させてい  
ただきました。実際、地方創生の潮流の中で、やっぱり管内唯一の教育機関ということで、  
北星さんと今後、北海道として、いろいろな意味でアクティブにやっ  
ていけるのではない

かなというものもありまして、特にうちとしては、今現在、移住・定住でありますとか、管内担い手不足の解消、あるいは宗谷そのものの売り込みというものに非常に力を入れています。来年も振興局の事業として拡充する方向でいろいろ検討しているところです。

なかなか、今までもお話がございましたけれども、学生さん、あるいは先生方の負担というものも相当あるとは思いますが、まずできることからということで、いろいろ考えています。出前講座でありますとか、あるいは、近々、北星学園の先生を交えて映像セミナーとかもやっていただく予定になっていますけれども、先ほど報告の中でも観光の大変素晴らしいプロモーションビデオみたいなものの御紹介がありましたけれども、一応エリアの中の周知ではなくて、いかに対外的に発信していくかというのが、まず振興局として一番考えていかなければならないのかなと思っています。

うちは首都圏とか札幌とかでプロモーションとかもどんどんやっていますので、まずこういった映像をどんどん、北星学園は、このような素晴らしいものをつくっているのですよというものを発信していきたいと思えますし、また、あと、先ほどの報告の中でも、北星学園自らがしかけるのではなくて、地域が望むものにうまくマッチングして、こういった映像をつくっていききたいという話もありましたけれども、先ほどもお話がありましたように、うちでは移住・定住、あるいは担い手の確保という部分を最重点課題として取り組んでいく予定ですので、もしよろしければ、そういった部分で誘導政策のお力をかりられればと考えています。すぐにはなかなかできないかもしれませんが、今後調整させていただきたいと思えますので、よろしくお願いします。

最後に、先ほど学生COCのほうから報告がございましたけれども、飲酒の部分で若干注意喚起のほうがございました。同じく報告の中で、「SOYA fresh☆network」の取り組みについても触れていただきましたけれども、一応、再度の御説明になりますけれども、fresh☆networkというのは、管内の行政機関、民間などの横のつながりをつくるという、管内の市町村からも比較的要望が高かったことで、去年の3月からこの取り組みをしています。今回、包括連携を機に、学生さんにもぜひ参加していただきたいということで、実際に5名の学生さんに参加いただいて、その部分は感謝申し上げたいと思います。

当然、限られた時間なので、なかなか、うちのワークショップだけでは十分いろいろな懇親を深めるということができないので、今後も、ちょっと飲酒の場というものも、もちろん可能性としてはあるのかなと思っています。ただ、このようなお話もありましたので、一応学生さんですから、大切な学生をお預かりするという気持ちで、十分主催者側としても注意

喚起していきたいなというふうに考えていますので、引き続き学生さんの参加のほうをよろしく願いいたします。

**○稚内開発建設部地域振興対策室（鈴木氏）** 今日には室長の代理で参りまして、具体的な発言と申しますか、いろいろ皆さんの御意見を聞かせていただいているという立場で参りまして、発言には困ってしまっているところなのですが、どちらかという、振興局さんとかと違いまして、うちの場合は距離がありますというか遠い部分があつて、皆様のほうに教えていただくという部分が多いかと思われまふ。おくれればながら地域の中にどうやっていくかという意見もいろいろと聞かせていただくように、講師の方とかも勉強をさせていただいているところでもありますので、これからどうやってそういう形を仕上げていくか、どういうふうにしていくかという形になるかと思ひます。

具体的な案としてはちよつと、いろいろとは、教えていただくようなものを聞くような形だと思ひますので、この地域に関してやっていけること、もしくは連携していろいろとやれることということも考へている状況でありますので、今のところは、学びに来ましたというか、いろいろと御指導、また御意見いただければと、そういう形で思ひます。

**○豊富町教育委員会（小野寺委員）** 今日には、豊富町と大学とが包括連携協定を結んでいるという中で参加させていただきましたが、ただいま報告を聞かせていただいたのですが、本当に大学はさまざまなことを地域で活動されているのだなということを改めて認識をさせていただきましたけれども、豊富におきましても、学生さんが制作された映像作品ですとか、あるいはPRドラマの制作ということで大変お世話になっているところでございます。

そして、地域教育支援室の夏休み、冬休みの子どもたちのチャレンジ教室ということで、ことし、3年目もまたお願いをしていこうという予定でいるわけですが、この部分におきましても、学習ももちろん、一生懸命教材を学生さんにつくっていただいて、3日間みっちりやっていただいているわけですが、その学習の時間以外でも、いろいろな催し物を企画しながら、学生さんも楽しんでいただいて、小中学生と非常に交流が進んでいるということです。

その学生さんと一緒に、高校生も先生役として参加をいただいたりしておりますけれども、やはり大学生への憧れと申しますか、そういったものも非常に芽生えてきているのではないかなというふうに思ひますし、小中学生の意見の中には、宿泊などもして日程も長くって



ほしいというような意見があったり、やはり勉強がよくわかるようになったというアンケート結果も出ているところで、大変ありがたいなというふうに思っておりますし、最初は、中学生などは親から言われて参加したとか、それから学校の部活の延長で参加したと、いわゆる嫌々参加したような子どもも、最後には、アンケートの中では参加してよかったというような意見になっていたり、本当に、これからも継続していきたいなというふうに思いますし、やはり宗谷の大学という位置づけの中で今後発展していただきたいとしたいと思いますし、それから、豊富としても、通学圏内ということもありますので、やはり進学の、これから奨励に向けたことについても努めていきたいというふうに思いますし、これから町と大学と、いろいろな、できるところでお互いに協力をしたりされたりというような関係を引き継いでいきたいなというふうに感じておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

**○猿払村教育委員会（眞坂委員）** 大学さんには昨年協定を締結させていただいて、学生さんを、小学生が対象なのですが、遠隔授業という形で、お力をおかりして授業を展開してまいりました。実は今年度、ちょっと時期設定がちょっとおくれたものだから、子どもたちの参加が少なく、残念ながら中止という形になりましたけれども、引き続き、子どもたちは非常に、村には学習塾もありませんし、そういった機会に飢えていて、非常に楽しみにしている子どもが多いということもありますので、引き続き、こういった形でいろいろつながりたいなど。

学生さんも、先生におかれましても大変なスケジュールになるかとは思ひますけれども、村としてはそういう教育環境をぜひ継続していただければというふうに考えております。

子どもたちの授業とは別に、村の観光まつりのほうにも御協力をいただいているということも聞いておりますので、学校のOBも教育現場で頑張っておりますので、そういった面でも引き続き、いい協力関係を結べたらいいなというふうに考えてございます。

よろしくお願ひいたします。

**○稚内商工会議所（達委員）** 僕は、これを聞いて、全国で申請した学校の中で、やる気のある大学が選択されたという思いでこの事業が進んでいるのだろうなと思ひますし、皆さんの成果というか、評価を聞いていますと、自己とは言ひませんが、学内でもそのように先生方も評価していると、学生も評価していると。その事業としては、私も断片的ではありますが、地域のいろいろな情報の中で成功の部類という思いがありますけれども、この後が大切なのだろうなと思ひています。ただ事業がよく前へ進んだとか、学生の活動が見えた

とかというだけではなく、この大学がいかにかに存続するかというためにも、この事業をしっかりと前へ進めて、学生同士にも影響するような形で地域貢献していただきたい、そのような思いです。

**○稚内観光協会（東委員）** 私は、観光についてお話しさせていただきたいと思うのですが、先ほど藤崎先生のほうからもいろいろお話がありましたとおり、学生さん、それから先生たちが地域の中に入り込んで観光振興のお手伝いをいただいているということについては非常に感謝申し上げますし、私どもも若い皆さんの動きに刺激を受けて、前に進まなければならないというふうに考えながら仕事をさせていただいております。

そのような中で、この地域の観光なのですけれども、私自身はちょっと追い風が吹き始めているのではないかなというふうに感じている部分がございます。最近、逆に気になることは、官の長もいらっしゃいますけれども、人口がやたら減少が加速しているのではないかなというような感じがしますので、黒田課長のお話にもありましたけれども、移住ですとか担い手事業というようなことで、定住人口維持だとか婚活というような対策を立てていただいていると思って、私どもも期待しておりますけれども、今の時点、私どもについては、減っている部分の人口を何とか観光の交流人口の増加でカバーしていけないかなというふうに考えながら仕事をしているところでございます。

追い風という話をさせていただいたのですけれども、先ほど藤崎さんからも話があった、観光庁から認定を受けた周遊ルートの作成事業、これは外国人のお客さんを何とかこの地域に呼び込もうということで始めた事業でして、非常に知られていない地域ということで、一生懸命アピールしていけばふえていくというような期待のできる地域ということで頑張っていきたいなと思っています。

それと、御案内のとおり、近年、空路については全日空という依存していた部分があったのですけれども、ここ数年来、名古屋のFDAという会社がチャーター便を飛ばしていただいて、これが5年になるのかな、非常にますますふえていくというような計画を立てていただいたりということも今後期待できる要件かなと。もろもろの最近のニュースがありますけれども、空港の民営化ですとか、稚内港の整備によって大型の船が入港できるというようなことの期待、それから、逆にJR問題等みたいなものもありますけれども、私自身では、非常に前に向いていけるかなというようなこともあります。

こういうことがうまくいくには、やっぱり、地域のおもてなしとといいますか、受入体制を充実させなければならないということで、地域の皆さん全員の理解があって、これからは観光が進んでいくのだろうと。

先ほど報告の中に、中学生を対象に観光のお話等々もあったということで、非常にいいことだなと思っています。今後も大学の皆さんについては、これまで以上の協力をいただきながら、連携させていただきながら、観光発展に尽くしていければというふうに考えておりますので、よろしく願いいたします。

**○稚内中央商店街振興組合（尾崎委員）** 私ども、今回、コーヒーフェスティバル、2年目をやらせていただいたのですけれども、1年目終わった後から、やはり参加されたお店のほうから非常によかったと。商店街の売り上げが上がったというお話も伺って、今年度どうするかというお話をちょっと先生方と相談させていただいて、継続できたらしようというようなお話をさせていただいたところであります。

やっていただいた結果、やはり同じように、今まで参加されていなかったところも参加したいというふうに言うてくださったお店があったりですとか、これは僕たちがお願いしてもできるようなことではない、やっぱり学生の力が少しずつ大きかったなというふうに感じている事例の一つだと思います。

また、商店街の調査事業等もやっていただいて、すごく興味深い結果もいただいています。僕たちがやるアンケートとはまた別の答えが出てきたりしている部分もあるので、そこがまたすごく非常に、おもしろいというか、今後、興味があるというか、皆さんの調査にすごく興味がある部分が、特に世代間ギャップのあたりの話も、僕も正直、やりながら感じている部分ではあるのですけれども、でもそのクッション役というものに、この大学がなってくれたらおもしろいのではないだろうか。直接的に僕らが動くよりも、やっぱり学生にちょっと違う視点で入っていただくことによって、またちょっと違うニュアンスで協力者がふえるという、今回の事業に関してもそういった点があったのですけれども、非常に、僕自身、当事者なのですけれども興味深いというか、今後を期待したいと楽しみにしている部分ではあります。

また、グングン塾等のお話も、先ほど江川先生からもありましたけれども、子供たちがすごく頑張っているという部分もあったり、あと、イベントに関してもそうなのですけれども、これはちょっと、可能かどうかわからないのですけれども、子供たちに対する対価というか、それに参加してくれている時間帯というのは、恐らくアルバイトを休んだり

とか、そういった部分というのは非常に大きいのではないかと僕は思うのですけれども、そういった大きい対価ではなくてもいいとは思いますが、何か子供たち、今後、COCの事業が終わった後も継続するためには、そういったことも必要なのではないかなと思います。

イベントとコンペに関しても、そこは人件費は取っていいということで僕のほうも学生には話をし動いてもらっているのですけれども、やっぱりそういう、負担が大きい分、何か自分たちもやるという気持ち、ボランティアだけでは済まされない部分というのが大いにあると思うので、そこはちょっと検討して、お金の捻出の仕方もあるのでしょうか、考えていったらどうかと思います。

**○米津室長** 現段階で、実際、皆様に御協力いただきながらというか、お声がけしていただいているものにつきましては、各自治体から学生への補助は出していただいております。今回出てきた無料塾につきましても御協力をいただきまして、大学のほうからも持ち出しがあるのですけれども、教育委員会のほうから学生への、アルバイト代ではないのですけれども、ボランティアの謝金というか、そういうような形は出していただいております。

ただ、これは上げろとかそういうことではないのですけれども、シビアに考えると、時間分やれば、もちろんアルバイトのほうが、その時間であれば高くなってしまいうことがありますので、生活が苦しいですとか、今も自分で学費を払っている学生、生活費も全部出している学生もおりますので、そういう部分で厳しいことが出てきてしまうと、なかなか学生としても、やりたいのだけれどもできないということがどうしても出てくるかなと思いますので、大切な問題かなと思います。

**○稚内市建設産業部水産商工課（手塚委員）** 私からは、今、尾崎理事長もお話ししていただきましたけれども、中央商店街にかかわる部分で、実は、非常に私も興味深く先ほど聞いていたのですが、中心市街地、それから中央商店街から行動調査を実施したと。その行動調査の方は、我々まだ目にはしていないのですが、実は私どもも昨年、中央商店街、それから中心市街地に対する市民アンケートを2,000人に対して実施しました。更に、ことしの4月から制定されます中小企業振興基本条例、3月議会で可決された条例が4月から施行となります。それに向けて、各個人、それから法人、各企業720社に、逆にそれもアンケートを実は行った経緯がございます。まさにうちのほうも、まだまだ中心市街地、それから中央商店街に対する新たな助成制度を新規創業に絡めて制定をして、まさにこれから具体的に、この

条例の持つ意味、それから魂を入れていく議論を、まさに皆さんとしていかなければならない時期に来ているということで、先ほどの、さまざまな、うちのほうのアンケートですか、商店街組合でもいろいろと考えていることはございますし、大学のこういう取り組みの中で、三者でまたいろいろな取り組み、それから話ができれば、まさに協働で、連携、連帯をもってまちを盛り上げていくという、今回制定した基本条例の目的に合致するのだろうというふうに考えているところでありますし、今後とも御協力いただけたらというふうに思っております。

○若原室長 調査の成果なのですけれども、先日の地域活動報告会で報告した段階で、まだペーパーにしていないのでこういう設定なのですけれども、ちょっとまだ、学生が書いたものをそのまま出してしまうというのは表現上の問題で余計な対立をおこしかねないので、ちょっと時間をいただいて、そのうち連携させていただければと思います。

よろしく申し上げます。

○稚内市建設産業部水産商工課（手塚委員） うちのほうの調査結果はもう既にありますから、1回学生さんにも見てもらって、見る視点が違うと、質問の中身が同じなわけではないのですが、お互いに参考になるし、我々も今後の部分で、取り組みとして大きな意味がここに出てくるのだろうなと思いますので、よろしく願いいたします。

（会議の最後に）

○斉藤学長 全体として、事業そのものへの評価はいただいたのかなと思います。それから、学生への期待というものも非常に語っていただきました。

今後についても、より連携を深めていきたいというような答えも多くて、非常にありがたかったです。ただ、学生確保につなげろという話は確かにそうですが、この事業を通じて、我々、もちろん地域貢献そのものも目標ですけれども、地域に生きる大学として、ある意味、地域の生活必需品になりたいと。その中で、なくては困るねといったことを、やっぱり皆さんに感じ取っていただけるようなふうにしていかなければいけないと思っています。そのことが、ちょっと遠回りになるかもしれませんが学生確保につながるのかなというふうにも感じたりしています。ほかにもまめな誘致が必要だと思いますけれども。

そういう意味で、このCOC事業については、あと2年あります。そもそも文科省に提出した申請書にないこともいろいろ含めて始まっています、実は今日、あまり主題的には語られませんでした、コーヒーフェスとかサンタランとか、それから映像制作に関しては、

学生が受賞したという作品だけではなくて、豊富でのドラマ制作とか、結構、学生の活躍として新聞に出ているものは、実はCOCの枠の中ではなかったりするものもあるので、その辺も含めて議論できたほうがよかったかなと、ちょっと最後になって思ったりしていますけれども、ただ、COCの、文科省に提出した枠内については、きょう大体見ていただいたということになるかと思います。

特によろしければ以上で終わりたいと思いますがよろしいでしょうか。

ありがとうございました。



## 10. 活動記録一覧

---

活動記録一覧表（各支援室活動を除く）

4月	1日	2・3・4年生ガイダンスで事業説明・行動提起とアンケート実施
	1日	「COC メールマガジン」 vol.10 発行
	19日	2016年度第1回 COC 推進委員会
5月	8日	「COC メールマガジン」 vol.11 発行
	17日	第2回 COC 推進委員会
	26日	文科省にフォローアップ報告書を提出
6月	3日	「COC メールマガジン」 vol.12 発行
	7日	第3回 COC 推進委員会
	17日	外部評価委員会の招集文書・資料一式送付
	28日	第4回 COC 推進委員会
	30日	外部評価委員会
7月	1日	「COC メールマガジン」 vol.13 発行
	12日	第5回 COC 推進委員会
8月	1日	「COC メールマガジン」 vol.14 発行
	2日	第6回 COC 推進委員会
	23日	第7回 COC 推進委員会
	30日	第8回 COC 推進委員会
9月	1日	「COC メールマガジン」 vol.15 発行
	6日	第9回 COC 推進委員会
	13日	第10回 COC 推進委員会
	17日	COC 全国シンポジウム1日目
	18日	COC 全国シンポジウム2日目/第5回地域活動報告会

- 20日 第11回 COC 推進委員会
- 10月** 3日 「COC メールマガジン」 vol.16 発行  
4日 第12回 COC 推進委員会  
24日 第13回 COC 推進委員会  
28日 北星学園大学ラーニングコモンズ視察  
29日 オホーツク地域創生シンポジウム in 北見工大
- 11月** 1日 「COC メールマガジン」 vol.17 発行  
22日 第14回 COC 推進委員会
- 12月** 1日 「COC メールマガジン」 vol.18 発行  
6日 第15回 COC 推進委員会
- 1月** 8日 「COC メールマガジン」 vol.19 発行  
13日 宗谷総合振興局との包括連携協定に調印  
17日 第16回 COC 推進委員会
- 2月** 1日 「COC メールマガジン」 vol.20 発行  
7日 第15回 COC 推進委員会  
14日 第6回地域活動報告会  
28日 第18回 COC 推進委員会
- 3月** 1日 「COC メールマガジン」 vol.21 発行  
6日 平成28年度 COC/COC+全国シンポジウム「地方創生と大学」(高知大学)への参加  
14日 第19回 COC 推進委員会  
21日 第3回 COC 推進連絡会議  
25日 「オール北海道雇用創出・若者定着プロジェクト」シンポジウム in Chitoseへの参加  
29日 第20回 COC 推進委員会



## 1 1 . 活動レポート・COC 新聞・その他広報資料

---

### 11-1. 活動レポート

#### (1) 地域教育支援室活動レポート

地域教育支援室活動レポート No. 6 (2016 年 5 月 11 日)

「ゼミ生 7 人の今年の抱負」

地域教育支援室活動レポート No. 7 (2016 年 7 月 11 日)

「札幌の学習支援を学んできました」

地域教育支援室活動レポート No. 8 (2016 年 7 月 11 日)

「稚内『放課後学カグングン塾』、まちラボ『教たま数学教室』

地域教育支援室活動レポート No. 9 (2016 年 12 月 22 日)

「2016 年のゼミ活動 アンケート結果」

地域教育支援室活動レポート No. 10 (2017 年 1 月 30 日)

「教たま数学教室を終えて」

活動レポートは、本学 COC 事業ホームページ (<http://coc.wakhok.ac.jp/education-room/>) よりダウンロードすることができます。



## 今年5月の お祝いお話し

気付いたら5月になっていた。年度初めに鼻息荒くして手帳に書き込んだ「4つの目標」のうち3つは手を付けてすらいない。ただ、1つだけは続いている。「記録を付けること」である。学生の活動の記録を振り返るとそこに多くの発見がある。それに刺激を受けているのだろう。積み上げられていくものを記録することの大切さに改めて気付いている。

新年度になり学生・教員ともに素敵な面々が加わった。これから記録されていく新たな活動からはどんな発見があるのかと楽しみだ。それを共有できることも。あとは自分の「残りの3つ」も楽しみながら、まずは手を付けてやればなぁと思いつつ多忙を理由に目を逸らす日々である。【COC 地域教育支援室長】

## ゼミ生7人の今年度の抱負

きれいな大学で、風車に見える景色は心が和みます。これから教員志望の人に教師の楽しさを伝えるのが楽しみです。(遠谷久教授：数学教育、創路から)

### 大学の印象を聞く

新しいゼミの先生

初めはこんな所に大学がって思ったけど、今は力強い印象を受けています。この自然の中で数学するんやって楽しみです！(藤田真依講師：数学、大阪から)

**ゼミ** 役員は恒例の全員投票で、植口さんが第4代ゼミ長に、「支持してくる人が多くて驚き嬉しかったです。ゼミをひっぱっていく責任と不安も感じました。一緒に学ぶ仲間なので、一緒に成長してゆきましよう！先輩方は優しく指導してください。同級生、後輩は支えて下さい。」

**存卒業**の4年生6人、正規採用の中学教員(横浜)と採用職員(礼文)、期間付き採用で教壇に立ち採用試験合格目指す4人。昨年の卒業生が福井大高卒の正規教員に。

**学** がわからなくて困っている中学3年生を対象に中央商店街「まちラボ」で週

**1** 回の「教たま数学教室」を5月から、毎週2名のゼミ生と心強い数学専門の先生の支援も。

**数** 学教員コースを現時点で希望している新入生7人。5月9日に、教たまゼミ(教師の玉子として存つゼミの意味)主催の歓迎会を同級生19人(学生15人、教員4人)の参加。

**ゼミ** 研究を「教師が育つ条件」(今津考次郎著「岩波新書」)で、3年前のゼミ出発時のテキストを再び使い「基本」をしっかりと。

**編集後記** 今年度初の「教たま」の発行で、改めて頑張ろうという気持ちになりました。今年度もよろしくお願いたします！(千枝)



## 2016年度の地域支援 活動中です。

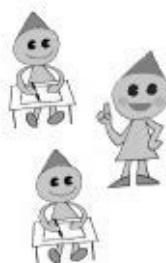
### 稚内「放課後学カグングン塾」



**今**年で3年目になる大学生の指導助手活動。潮見が丘小、中央小、東小、南小の4小学校にゼミ生7人が分かれて学校に行き、放課後の学習支援。今年も講義の合間をぬって火曜日の3時以降から、子どもたちが国語や算数のプリントを解き、指導員さんの指示に従って、学習の仕方やわからないところを大学生が教えています。放課後なのに、問題に対して真剣に取り組み、努力している姿がとても印象的です。子どもたちの「わかった!」という言葉が何よりも嬉しく、将来教師を目指している学生にとって、やりがいを感じています。子どもたちが楽しく学べるようにサポートしていきたいです。

### まちラボ「教たま数学教室」

**5**月からゼミ生交代で中3生徒4人を毎週火曜日6時から「まちラボ」で開催中。数学に絞り、数学嫌いを克服し、数学を好きになり、テストの点数を上げることを目標にしています。  
**私**たち大学生は毎回担当の生徒の理解度に合わせて教材を用意したり、ホワイトボードを使って解説したり、学習カルテを作って担当が変わっても生徒が困らないように教えています。  
**生**徒は中体連前で部活動の疲れがあるのにも関わらず、一生懸命で、わかるようになった、テストの点数が上がったと言ってくれてとても嬉しいです。  
**7**月で前期の教室を終え、あらためて生徒募集して9月から後期の教室開始。8月夏休み中の特別教室も計画しています。



### 在籍大学生の ありがたいお話



先日、一年生向けの講義で、卒業生の方に大学・社会での経験を話していただいた。個人の体験には学びと発見が溢れている。共通していたお話の一つは、多くの人と話すことの大切さだった。教たまゼミの学生にとっても同様に大切だ。

グングン塾での指導助手活動や、まちラボ数学教室の取り組みが始まり、新たに多くの人との対話が始まった。6月頭には2,3年生と札幌の子ども支援団体を視察。代表の方の想いや願いを聞き、刺激を受けた。各場面で新たな気付きがあり嬉しい体験になっている。

人と人の関わりの基本は、対話することだろうと思う。私も多くの方と対話したいな～と思いつつ、多忙を理由に研究室にこもりがちな毎日である。

■4年生2人が、教員含めた採用試験、教育実習に奮闘中。3年生もこの夏から教採試験に向けた計画的な準備に入ります。  
■7月30日(土)オープンキャンパス。教員養成コースは、参加高校生を交えた例年好評なゼミ生による教育テーマの話し合い。日ごろの活動成果が試されます。  
■「地域の教育力」がテーマの全国シンポジウムまで後2ヶ月。記念講演が、稚内・宗谷の小中学校で馴染みある名大の植田先生。私たちのゼミも大いに学べる機会。ゼミ担当の米津先生が実行委員長だからなおさらです。



**活動短信** ■8月4〜6日の3日間、ゼミ生による豊富町「サマーチャレンジ」(町教委主催)教育支援。昨年度の夏冬休みに続き3回目。泊まり込みで課題作成や指導方法の検討、食事の作成、小中学生との交流など、ゼミ生に大好評の活動。佐藤千と樋口が「しおり係」、佐藤幸と中島が「課題係」、上浦と東雲が「食事係」、会計が樋口(ゼミ長)。  
■札幌の視察に行きたかったなあ。



今回の17、18号の記事は中島健太郎(3年)が担当しておおくりしています。

### 号外

山内飛龍君(3年)が先月の学生会総会で、学生会委員長に選出されました。

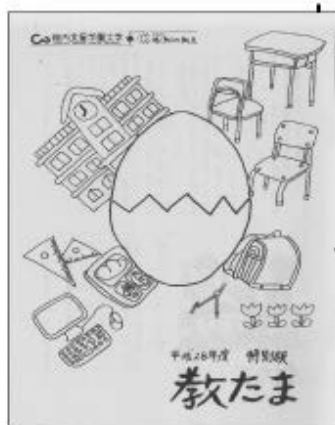




## 2016年のゼミ活動 アンケート結果

ゼミ生全員(4年2名、3年5名)が文章で回答。(数字)は人数。

- Q. あなたが一番、楽しい思い出に残ったゼミ活動は？
- A. 豊富【小中生】の教育支援活動(6)、グングン塾助手活動(1)
- Q. あなたが一番、勉強になったことは？
- A. 教たま数学教室(3)、文献研究「ブラックバイト」(1)、文献研究「教師が育つ条件」(1)、グングン塾助手活動(1)、学習支援活動(1)
- Q. あなたが「成長したなあ」と思えることは？
- A. 対応力(4)、自己反省(1)、教たま数学教室(1)、豊富遠征(1)
- Q. あなたが「成長していないなあ」と思うことは？
- A. 対応力(2)、発表や交流(2)、文献研究(2)、準備不足(1)
- Q. 続けていきたい活動は？
- A. 地域教育支援活動(6)、責任のある仕事(1)
- Q. 良いゼミにするために改善が必要なことは？
- A. 協力関係(2)、2年生の自主参加(1)、出席(1)、特にない(1)、強制しない(1)



これ一冊で、教たまゼミの活動がわかる「平成28年度教たま 特別版」12月15日発行。初めて4年生の数学授業の指導案と授業後の自己評価を掲載。卒業時点の研究成果を発表する機会に。年明けから図書館で配布。お世話になった教育・自治体関係者にも配布予定。

■次号では、「教たま数学教室の1年」を予定しています。

■「教たま数学教室 入証書別対策」を1月17日から3回(火曜夜6時から)開催予定。中3の7名対象に後期教室は12月末に終了しましたが希望者多いため特別開催。飛び入りOKです。

■昨年卒業の4年生2名、1名は稚内大谷高教員として活躍中。大学院(教育大札幌)に進学したもう一人は、道の公立中学校教員採用試験に合格。今年の4年生は地方公務員と教員の道に。



## 新年も

## よろしくお願ひします。

## 夜寝先生の ありがたいお話

本学初のCOC全国シンポジウム実行委員長の大役をいただき、9月までの役割を何とか果たした。身に余る役割をどうにかこなす中で改めて大事だと痛感したのは、周りの人たちにお願いすること、頼ること、という基本的な事だった。

大学教員は基本的に個業である。全学体制で行う全国シンポも、私は危うく個業にしかねない状況だった。大役に身構える程に動きが硬く鈍くなった。それを打開してくれたのは周りの人たちで、同時に仕事を担って下さった。

人に頼るのに抵抗があるのは確かだ。ある授業で学生が指導案を参考にすることを「パクリ」と表現した気持ちも実は少しわかる。個の努力が求められる世相も感じる。しかし、できる人にお願いし、得意な人に頼り、一人では不可能なことを成し遂げて感じたことは「喜び」だった。お願いすることの罪悪感や、頼ることの不甲斐なさは意外なほど無かった。それが今回の大きな気付きだ。

改めて、ご参加下さった方々、助けて下さった方々にお礼を申し述べたい。



■1月10日から3日間、豊富町「ウインターチャレンジ」(町教委主催)。夏冬あわせて4回目。泊まり込みで、課題作成や指導方法の検討、食事の作成、小中学生との交流など、ゼミ生に大好評の教育支援活動。「しおり係」、「課題係」、「食事係」、会計は樋口さん(ゼミ長)。

■「教たま数学教室 入証書別対策」を1月17日から3回(火曜夜6時から)開催予定。中3の7名対象に後期教室は12月末に終了しましたが希望者多いため特別開催。飛び入りOKです。



### 中学生の声

※参加中学生 7名 (後期分) 中、6名の回答。

質問1 「数学教室」は、楽しく勉強できましたか？  
①とても楽しい 3 ②楽しい 2 ③楽しいと言えない 1 ④全然楽しくない

質問2 「数学教室」で、数学がわかるようになりましたか？  
①とてもなった 1 ②なった 4 ③わからない 1 ④そうでもない

質問3 先生(学生)の教え方は、どうでしたか？  
①わかりやすい 4 ②ふつう ③わかりづらい ④どちらとも言えない 2

質問4 あなたの学校の授業と比べるとどうですか？  
①わかりやすい 4 ②ふつう 1 ③わかりづらい 1 ④どちらとも言えない

質問5 週1回、90分、全15回についてはどうですか？  
①とても良い ②ちょうど良い 4 ③少ない 1 ④どちらとも言えない 1

質問6 あなたの態度は学校と比べてどうでしたか？  
①学校より良い 1 ②同じ 5 ③学校より悪い ④どちらとも言えない

質問7 来年の入試前、特別教室を開いたら参加したいですか？  
①とても参加したい 2 ②参加したい 3 ③どちらとも言えない 1

質問8 「数学教室」について感想や意見を書いて下さい。  
●とても分かりやすい説明で理解しやすかった。楽しかった(複数) ●もっとやってほしい●学校と違い、わからないところまで下がってきて教えてくれるのでありがたいです●わかりやすい先生と、わかりづらい先生がいた。わかるまで教えてくれた(複数) ●わかりやすい。集中できた。

昨年5月12日(全30回)開催の「教たま数学教室」▼未来の先生を目標に生きた勉強、地元稚内に貢献したいとすめてきたア活動▼新年度に向け大学生、中学生、保護者の声を聞きました。

### 大学生の声

※参加学生 7名中、6名の回答。

質問1 「数学教室」は、あなたには楽しい活動でしたか？  
①とても楽しい ②楽しい ③楽しいと言えない ④全然楽しくない

質問2 「数学教室」で、数学指導の意識が変わりましたか？  
①とてもなった 5 ②なった 1 ③わからない ④そうでもない

質問3 自分の先生としての教え方は、どうでしたか？  
①自信がついてきた 1 ②前と変わらない 3 ③自信を失って来た 2

質問4 中学生の学ぶ態度をどう思いますか？  
①真面目で真剣 5 ②ふつう 1 ③あまりよくない ④悪い時がある

質問5 週1回、90分、全15回についてはどうですか？  
①とてもよい ②ちょうどよい 3 ③少ない 3 ④どちらとも言えない

質問6 生徒には学校と比べてどうだと思いませんか？  
①学校よりよい 5 ②同じ ③学校より悪い ④どちらとも言えない 1

質問7 来年の入試前、特別教室を開いたら協力できますか？  
①協力したい 2 ②協力は難しい ③どちらとも言えない 4

質問8 「数学教室」について感想や意見を書いて下さい。  
●生徒の成績の上下が学生側にも得ることが多い●その場でわかるだけでなく継続して勉強に取り組めるように指導する難しさを感じた●前期は学生1人に生徒2人だったが、後期は3人を相手にしたのでとても大変だった●私たちに、確かな学力が必要●次回の内容や課題を考えることで教える力が向上できる●自分が成長できる場を与えていただいた。

教たま 後期(9~12月、毎週火曜)

数学教室を終えて

### 保護者の声

※保護者 7名 (後期分) 中、6名の回答。

質問1 「数学教室」には楽しく参加しているようですか？  
①とても楽しい 1 ②楽しい 4 ③楽しいと思えない 1 ④全然楽しくない

質問2 「数学教室」で数学がわかるようになってきたようですか？  
①おてもなった ②なった 5 ③わからない 1 ④そうでもない

質問3 先生(学生)の教え方を、どんなふうに聞いていますか？  
①わかりやすい 4 ②ふつう 2 ③わかりづらい ④どちらとも言えない 2

質問4 もし授業料を払うとすれば、1回90分でいくらですか？  
①3000円 ②2500円 ③2000円 ④1500円 ⑤1000円

質問6 学校と比べて何が一番違うと思いますか？  
①ゆとり進む 1 ②わからないが大事にされる 3 ③先生が身近 3

質問7 高校生の特別教室を開いたら参加させたいですか？  
①とても参加させたい 4 ②参加させたい 2 ③どちらとも言えない

質問8 「数学教室」について感想や意見を書いて下さい。  
●家庭学習が偏りがちだったが「教たま」に行き広がりが出てきた●週1回のペースが良かった●先生によってわかりにくい時がありました。すぐに聞くのと良いのに悪いと思ったようです。無料でやっていただきありがた思っています●とても良かったです。平均20点が50点になりました。文協は未だですが、週2回でも良い●前後期通わせてもらい少しづつわかってきたようです。大学生の皆さん、ありがとうございました●ありがとうございました。楽しみにして通っていました。

どの子も、わからないところから、ゆっくりと、親切に教えてもらえばわかること学ぶ貴重な機会になった。その分、子どもの期待に応えられる数学の指導方法を身に着ける大切さも痛感したことだろう。中学生と大学生のやる気、大学の全面的な応援で実現したが、これを一歩として今後も続いていくことを大いに期待している。(担当: 坪内)

「教師のたまごが中学生を助ける数学教室」が「教たま数学教室」の正式名称です。中学生のテストの点数が上昇したこと、楽しく勉強できたことは、「中学生を助ける」ことの表れですが、この活動には「中学生に助けてもらう」要素もあります。それは、学生が「教えさせてもらう」という意識をもてたこと、教えることが楽しいと思える基盤となる教える学力が向上したことに表れています。思いや願いに応える意義のある活動と感じます。(担当: 辻谷)

12月15日(火) 3日間の豊富町小中学生教育支援が終了。4回目も大きな成果があったが大学生の体調管理が課題に。好評につき、「教たま入試直前対策教室」を1月3日(実施: 潮中3、南中4、東中1名)が参加。大学生も毎回3名で。

(2) 地域観光支援室活動レポート

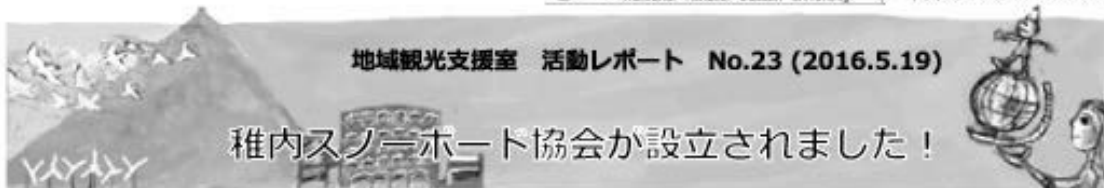
地域教育支援室活動レポート No. 23 (2016年5月19日)

「稚内スノーボード協会が設立」

地域教育支援室活動レポート No. 24 (2017年1月19日)

「稚内の中学生対象に観光ガイド育成研修開催」

活動レポートは、本学COC事業ホームページ (<http://coc.wakhok.ac.jp/education-room/>) よりダウンロードすることができます。



地域観光支援室 活動レポート No.23 (2016.5.19)

## 稚内スノーボード協会が設立されました！

**稚内北星学園大学メディア学部**  
**地域創造学科 講師 藤崎 達也**

### はじめに

去る4月21日日本学におきまして、第1回稚内スノーボード協会の総会が開催されました。地域観光支援室長が役員として関わることにより、今後さらなる支援を行なってまいります

### これまでの経緯

本学では2013年より稚内市こまどりスキー場へのスノーパーク造成や、体育館の使用、トランポリンの譲渡などを通して、稚内市のスノーボードコミュニティの支援を行ってきました。コミュニティの中心となる市内のスノーボードショップ「SEA MORE」は20年近く子供向けの教室を開催しており、その中から本格的に競技を行なう「TEAM SEA MORE YOUTH」で活動をする選手が30人近く所属するようになりました。親を含めて100人近くのコミュニティは稚内のスノーボードシーンを引っ張る中心となり、この度さらなる活動の発展を行なうために、当チームの父兄やコーチを中心に稚内スノーボード協会を設立しました。これらの活動は、存続の厳しいスキー場運営のオルタナティブを探るための実証・検証の研究として、地域観光支援室長の藤崎により「協働型ユーザーによる地域スポーツ施設の運営管理モデル」(2014年3月稚内北星学園大学紀要 第14号 P115-129)として発表されております。国内では先進的な取り組みとして、スノーボード業界やライダーなどに高く評価されております。



第1回稚内スノーボード協会総会(本学4月21日)



本学体育館でのトランポリンを使ったオフトレ



こまどりスキー場に完成したスノーパーク

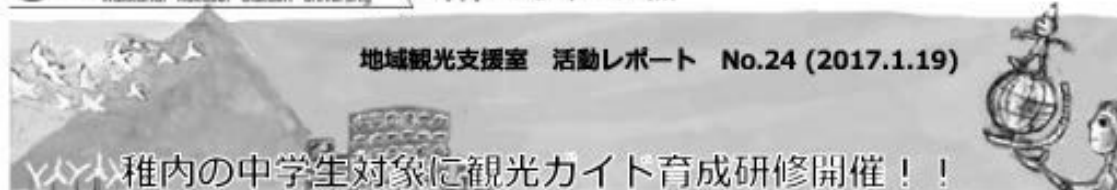
### 今後の展望

稚内スノーボード協会としては昨年夏に北海道スキー連盟(SAH)の強化指定選手の合宿を受け入れ、TEAM SEAMORE YOUTHでは全日本選手権や札幌パークエア一等の大きな大会に選手を輩出し、さらにSAHの強化指定選手を3名輩出するなど、今後ますますの活躍が期待されます。

また、協働型ユーザーによる地方スキー場の活性化は他の市町村からも注目され、パーク造成やコミュニティ育成の事業を行なう動きも見られます。稚内スノーボード協会や地域観光支援室としてもサポートを続けていく予定です。

お問い合わせ先 稚内北星学園大学 地域観光支援室 担当 藤崎達也  
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(77)@wakhok.ac.jp  
 URL <http://www.wakhok.ac.jp/coc.html> 兼(77)は8に変更してください





稚内の中学生対象に観光カイト育成研修開催！！

稚内北星学園大学メディア学部  
地域創造学科 講師 藤崎 達也

はじめに

去る12月10日、稚内中学の土曜授業と連携して稚内の観光ガイドメニュー作成のワークショップなどをおこない、未来の観光ガイドを育成する研修を行いました。90人近くの中学生達は休憩時間も熱心に取り組む子達も多く、校長先生や担当の先生からも大変好評をいただきました。

研修会の様子

稚内中学は、ホテルや飲食店などが集中する稚内中央地区、ノシャップ岬までの観光ルート上、そして誰もが憧れる西海岸の校区の子達が集まる学校です。しかし、事前の調査で稚内市を観光地だと思っている人は一人もおらず、30万泊の一大観光地であることや日本人が一度は訪れたい観光地に必ず稚内が入っていること、外国人旅行者から注目されつつあることなどをレクチャーし、稚内は誰もが憧れる観光地であるということを理解してもらうことから研修はスタートしました。



「なぜ観光地ではないのか」と聞くと、「何もないから」という声が上がリ、岩手県では津波跡の「空き地」を案内するガイドをしていることや、十勝では「ただの畑」「入ってはいけないと言われている畑」を案内して人気なことなどの事例をもとに、「何でもないもの」「ダメといわれていること」こそが観光資源になりうることをレクチャーし、グループに分かれての「何でもないこと」の抽出と観光メニュー化を検討しました。



校外区ごと地図にメニューを書き込み



校外区ごと観光メニューの発表

ワークショップで集まった情報は例えば「飲み屋の跡を、お父さん達が自分たちの『飲み場』にリフォームして酒盛りをしていること」や「地元の人しか買えないソフトクリーム屋があること」などすぐにでも観光資源となるものばかり。また「公園にトイレがないこと」などのネガティブ情報も観光客にとっては有益であることを知り、観光学的な視点と観光事業の視点を学びました。先生達からも、地元を見つめ直す良いきっかけになった、グループ学習の新しい形を学べたなど、観光を通して地域振興に寄与できたことを実感しました。

**お問合せ先** 稚内北星学園大学 地域観光支援室 担当 藤崎 達也  
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511  
 URL <http://www.wakhok.ac.jp/coc.html>

FAX 0162-32-7500 E-mail [info\(yt\)wakhok.ac.jp](mailto:info(yt)wakhok.ac.jp)  
 ※(yt)は@に変換してください

### (3) まちなか振興支援室活動レポート

まちなか振興支援活動レポート No. 18 (2016年4月2日)

「まちラボの活動の様子～3月編～」

まちなか振興支援活動レポート No. 19 (2016年4月18日)

「まちなかメディアラボ 平成27年度の利用状況について」

まちなか振興支援活動レポート No. 20 (2016年5月12日)

「まちラボの活動の様子～2016年4月～」

まちなか振興支援活動レポート No. 21 (2016年6月1日)

「まちラボの活動の様子～2016年5月～」

まちなか振興支援活動レポート No. 22 (2016年6月28日)

「白夜祭～大学市～」を開催

まちなか振興支援活動レポート No. 23 (2016年8月19日)

「まちラボの活動の様子～2016年6月～」

まちなか振興支援活動レポート No. 24 (2016年8月22日)

「まちラボの活動の様子～2016年7月～」

まちなか振興支援活動レポート No. 25 (2016年8月22日)

「シャッターアート ワークショップ」開催

まちなか振興支援活動レポート No. 26 (2016年9月27日)

「まちラボの活動の様子～2016年8月～」

まちなか振興支援活動レポート No. 27 (2016年10月3日)

「まちラボの活動の様子～2016年9月～」

まちなか振興支援活動レポート No. 28 (2016年10月31日)

「稚内北星学園大学 COC まちラボ シャッターアートプロジェクト」

まちなか振興支援活動レポート No. 29 (2016年11月9日)

「まちラボの活動の様子～2016年10月～」

まちなか振興支援活動レポート No. 30 (2016年12月27日)

「まちラボの活動の様子～2016年11月～」

まちなか振興支援活動レポート No. 31 (2017年1月10日)

「まちラボの活動の様子～2016年12月～」

活動レポートは、本学 COC 事業ホームページ (<http://coc.wakhok.ac.jp/education-room/>) よりダウンロードすることができます。



## まちラボの活動の様子～3月編～

### パソコン講座～ポスター・チラシの作り方～

2016年3月26日(土)に今年度8回目となる「まちラボパソコン講座」が開催されました。今回の講座は、開催初めてとなる上級者向けの講座で、イラストを描いたり、ロゴを作ったり、ポスター作成などができるソフト”Adobe illustrator”を使い、ポスター・チラシの作り方を行いました。講師は本学准教授で抽象絵画が専門の小谷彰宏先生で、きれいなデザインにする際の注意点や、Adobe illustratorの簡単な操作方法を学びました。

今回の講座の受講者は3名で、自営業を営む方などを中心に、仕事上の広告を作成することを目的に参加されました。全ての受講者がAdobe illustratorを使用するのが初めてで、慣れない操作方法に悪戦苦闘しながらも、集中して取り組んでいました。

次回のパソコン講座は初心者向けの「インターネットを使ってみよう」を行います。インターネットを使った調べ物のする方法を学びます。定員は8名(ノートパソコンを持参出来る方)で、講師はまちラボ常駐のメディア表現指導員中野窓香が行います。



### まちラボが1周年を迎えます

稚内中央商店街の空き店舗を活用し、市民の皆さんの活動拠点の場として開設した「まちなかメディアラボ(まちラボ)」が2016年4月18日に1周年を迎えます!!

いつもご利用いただいている方も、『ちょっと関心があるけど行ったことがない!』という方も、商店街が大好きな方も、まちラボのこの1年間の活動や学生たちの活動を写真や動画で振り返ります! 覗いてみませんか?



お問合せ先 まちなかメディアラボ(まちラボ) 担当 中野窓香 (2016.4.2 中野)  
〒097-0022 稚内市中央3丁目9-12 電話 (0162)-22-6565 FAX (0162)73-0973  
E-mail [machilabo\(アット\)wakhok.ac.jp](mailto:machilabo@wakhok.ac.jp) / URL <http://coc.wakhok.ac.jp/>

※(アット)は@に変換してください

# まちなかメディアラボ 平成27年度の利用状況について

## 1.はじめに

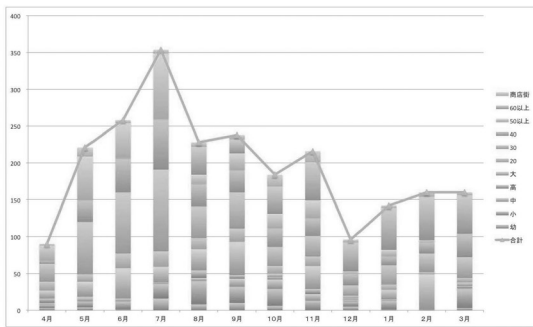
まちなかメディアラボ(略称:まちらボ)は中心市街地における学生の教育および自主的活動の拠点、またメディア表現活動等の市民の活動拠点、さらにこれらを通した中心市街地・商店街活性化の拠点となることを目指して2015年4月18日にオープンした。

本発表は今年度のまちらボの利用状況を統計的に分析し、今後の課題を明確にするための基礎資料とする。

## 2.月毎の利用者数

◎利用者数推移(平成27年4月以降ノ大規模イベントを除く)

月	小	中	大	20	30	40	50以上	60以上	70以上	合計
4月	3	5	2	6	11	12	24	4	21	83
5月	4	8	6	1	20	10	71	29	60	122
6月	1	11	4	0	41	20	83	46	48	203
7月	16	20	2	0	21	21	111	68	90	329
8月	8	32	4	10	29	15	43	30	13	205
9月	10	22	11	5	45	18	69	30	23	233
10月	6	23	13	3	5	10	26	25	20	161
11月	0	13	9	7	31	13	28	24	24	152
12月	5	7	2	0	2	4	14	16	3	51
1月	1	12	2	0	13	7	26	12	9	80
2月	0	1	0	0	48	3	25	13	3	93
3月	3	26	1	3	5	6	28	11	1	105
合計	53	141	53	32	205	123	449	272	302	1885

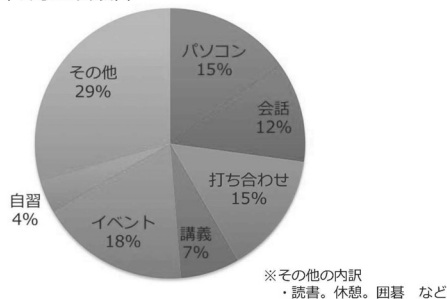


◎利用者数推移(平成27年4月以降ノ大規模イベントを含む)

月	小	中	大	20	30	40	50以上	60以上	70以上	合計
4月	3	5	2	6	11	12	24	4	21	83
5月	4	8	6	1	20	10	71	29	60	122
6月	1	11	4	0	41	20	83	46	48	203
7月	374	614	188	96	116	368	512	316	336	2990
8月	116	234	7	11	51	67	209	80	81	904
9月	10	22	11	5	45	18	69	30	23	238
10月	6	23	13	3	5	10	26	25	20	161
11月	0	39	11	7	42	13	28	24	24	152
12月	5	15	5	0	27	4	19	19	4	153
1月	1	12	2	0	13	7	26	12	9	80
2月	24	66	1	4	77	54	112	77	50	592
3月	3	26	1	3	5	6	28	11	1	105
合計	544	1049	250	133	448	522	1021	573	676	4426

## 3.利用目的

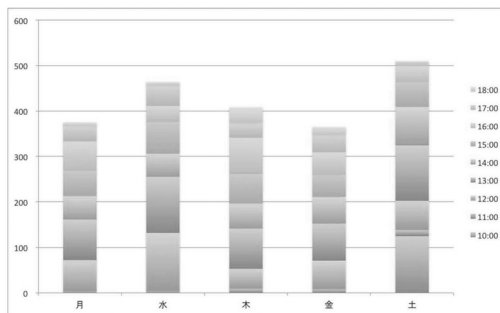
※2015年7月11日以降



## 4.曜日・時間別

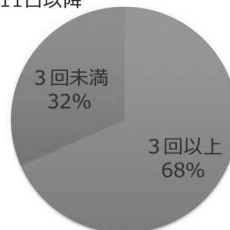
平成27年4月～平成28年3月

	月	水	木	金	土	合計
10:00	0	1	0	0	125	126
11:00	3	3	9	8	13	36
12:00	69	128	44	63	64	368
13:00	89	123	88	81	122	503
14:00	52	51	55	59	85	302
15:00	55	70	65	48	54	292
16:00	65	35	80	50	36	266
17:00	33	44	32	37	5	151
18:00	9	9	35	19	6	78
合計	375	379	408	365	510	



## 5.継続利用

※2015年7月11日以降



## 6.利用者の声(アンケートより)

- ・本館に入っているのかがドキドキしました。外のポスターをもう少し大きく書いてくれたら入りやすいです。妊婦なので少し休憩できたのはうれしかったです。ありがとうございました。(20代女性)
- ・人と関わるのが苦手なので、静かなところは大好きです。まちらボは学校とは違い緊張せず良いと思いました。(10代小学生)
- ・夏場、扇風機を設置してほしい。(20代大学生)
- ・午前10時くらいから閉館してほしい。(60代男性)
- ・親切に対応していただけてありがとうございました。これからも助言・指導よろしくをお願いします。(70代以上男性)
- ・楽しい時間をありがとうございました。話し相手になってくれて。(60代男性)
- ・楽しい(10代中学生)
- ・このルールみたいなのをチラシ(または黒板)に書けば良いと思います。(10代中学生)

お問合せ先

まちなかメディアラボ(まちらボ) 担当 中野窓香  
〒097-0022 稚内市中央3丁目9-12  
電話 (0162)-22-6565  
FAX (0162)-73-0973  
E-mail [machilabof7@wakhok.ac.jp](mailto:machilabof7@wakhok.ac.jp)  
※(アット)は@に変換してください  
URL <http://coc.wakhok.ac.jp/>

まちなか振興支援室 活動レポート No.20 (2016.5.12)

## まちラボの活動の様子～2016年4月～



### まちラボオープンから1周年！

2015年4月18日にグランドオープンしたまちなかメディアラボ(まちラボ)では、1周年を記念して「まちラボ1周年記念＊報告展示会」を開催しました。

展示会の期間はちょうど1年となる2016年4月18日から4月30日までで、月毎の取り組みの写真の展示や、学生が制作した商店街の店舗の紹介動画の上映、スクラップや活動レポート、年間の利用者数の統計調査の結果を展示しました。

また、同時期にアンケートに答えていただいた方にまちラボキャラクター「ラボちゃん」の手作りストラップをプレゼントしました。



平成27年度の年間の利用者数は6,426名で、あらゆる世代の方々に利用していただきました。今年度は講義などでも利用し、商店街についての調査も行って行く予定です。

### 「母の日のカード作り」ブースを設置しました

5月8日の母の日に向けて、「まちラボオリジナル母の日カード」を作成できるブースを設置しました。

4月18日から母の日前日の5月7日までの期間、常駐スタッフとともに、色画用紙やマスキングテープなどを使い、オリジナルのカードを作りました。子どもたちは日頃伝えられない感謝の気持ちなど思い思いにメッセージを書いていました。

この取り組みは6月19日の父の日にも同様に行う予定で、6月6日から18日までの期間設置します。



お問合せ先 まちなかメディアラボ(まちラボ) 担当 中野窓香 (2016.5.12 中野)  
〒097-0022 稚内市中央3丁目9-12 電話 (0162)-22-6565 FAX (0162)73-0973  
E-mail [machilabo\(アット\)wakhok.ac.jp](mailto:machilabo@wakhok.ac.jp) / URL <http://coc.wakhok.ac.jp/>

※(アット)は@に変換してください

## まちラボの活動の様子～2016年5月～

### パソコン講座開講中！

昨年10月から毎月開催している「初心者のための無料パソコン講座」は、5月で10回を迎えました。今回は初めての試みとして、5月13日(金)の平日にも開催し、第2土曜日の開催日と合わせて計10名の受講者が集まりました。

今月のテーマは「メールをつかってみよう」で、フリーメールサービスの『Gmail』でアカウントを作成し、使用方法を学びました。講座の後半では、受講者同士でメールの送受信を行うことができ、「今後仕事で使用するのに助かった」などの声も聞かれました。

6月のパソコン講座は特別編で、「上手なインターネットとの付き合い方」をテーマに講演を行います。講師は本学教授の佐賀孝博で、インターネットの基本的な仕組みや、賢い利用方法について学びます。



### 教たま数学教室開講

昨年度毎週火曜日に行っていた「まちラボ無料塾」から発展し、「教たま数学教室」が5月24日(火)から開講しました。『教師のタマゴ』が行うことから『教たま』とし、教職ゼミに所属する学生が中心となり、行っています。

受講生は中学3年生に限定し、学生たちが一人一人にきめ細かい支援を行います。

毎月火曜日の18:00から19:30まで行っており、前期は7月末まで行います。なお、後期の募集は8月に行う予定です。

▶  
昨年度  
行った  
まちラボ  
無料塾  
の様子



**前期の教室生を募集します**

こんな中学3年生を大事にしたい

- 数字(算数)が全然わからない
- 勉強のやり方を教えて欲しい
- ゆっくり、優しく教えて欲しい
- 頑りと比べられるのは嫌だ
- お金がかかるのは困る

教えるのは私たち7人の大学生(4年生2名、3年生5名) ■ 教員が中学と高校の数学免許を取得 ■ 未来の「教師のタマゴ」を目指しながら地元稚内に役立ついろいろな思いで開始するボランティア活動です。

**教たま**  
公開講座 教師のタマゴが中学生を助ける**数学教室**

**募集方法**

- 願書受け付け日に、中学生本人が保護者同伴でおいってください ● 説明後、希望者に願書記入していただきます ● 5月24日(火)教室開始です。

5/17(火)18:00  
まちラボにて  
説明・願書受付

**計画内容** ● 主催：稚内北星学園大学教員養成ゼミ ● 日時：毎週火曜日 18:00～19:30 ● 期間：5～7月末までの前期、8～2月末の後期(募集は8月) ● 場所：「まちラボ」(右地区校舎) ● 募集生徒数：最大6名(一人一人にきめ細かい支援をしたいため、希望者多数の場合、人数を絞らせていただきます) ● 先生：毎回2名が担当。支援効果を上げるため4回連続で担当 ● 教材：教科書の●費用：無料です。

教職養成ゼミの  
教員養成学生  
募集のタマゴを  
育てます

連絡先 稚内北星学園大学 0162-32-7511 電話(時間) ■ まちなか 0162-32-6565(休曜日/日曜、火曜)

お問合せ先 まちなかメディアラボ(まちラボ) 担当 中野窓香 (2016.6.1 中野)  
〒097-0022 稚内市中央3丁目9-12 電話 (0162)-22-6565 FAX (0162)73-0973  
E-mail [machilabo\(アット\)wakhok.ac.jp](mailto:machilabo(アット)wakhok.ac.jp) / URL <http://coc.wakhok.ac.jp/>  
※(アット)は@に変換してください



### 留学生による露店・フリーマーケット

2016年6月18日(土)、まちなかメディアラボ(まちラボ)の位置する稚内中央商店街で「第3回白夜! 稚内中央アーケード街」が開催されました。中央商店街が歩行者天国となったこのイベントで、「白夜祭～大学市～」として露店の出店や市民フリーマーケットを開催しました。

露店の出店を行ったのは、ロシアからの留学生を中心とした学生4名で、ロシア風クレープ「ブリヌイ」を販売しました。

気温が低く雨のぱらつくあいにくの天候の中でしたが、普段目にしないロシア料理は、市民の方々に好評でした。

また、市民フリーマーケットには5組の市民の方が参加し、販売を行いました。



学生による露店の様子



イベントフライヤー

### 父の日カードづくり&わたあめ体験

同日、まちづくり稚内・ばおばお隊(稚内大谷幼稚園)と共同で取り組んでいる「絵本の読み聞かせ」も開催されました。

稚内駅内での読み聞かせののち、まちラボへ移動し、翌日の父の日のためのカードづくりと、わたあめ体験を行いました。

参加した子どもたちは、思い思いにカードを作成し、学生とのわたあめづくりも楽しんでいる様子でした。

この日のまちラボの来場者は概算180名で、多くの方に利用していただきました。



お問合せ先 稚内北星学園大学 COCまちなか振興支援室 担当者 中野窓香  
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(アット)wakhok.ac.jp  
 URL http://coc.wakhok.ac.jp/ ※(アット)は@に変換してください



## まちラボの活動の様子～2016年6月～

稚内北星学園大学 Wakkanai Hokusei Gakuen University  
COCまちなか振興支援室 地(知)の拠点

稚内北星学園大学 メディア表現指導員  
中野 窓香

### パソコン講座特別編 ～インターネットとの上手な付き合い方～

2016年6月11日(土)、パソコン講座の特別編として「インターネットとの上手な付き合い方」をテーマとした講演が行われました。講師を務めたのは本学教授の佐賀孝博先生です。

今回受講したのは4月からのパソコン講座に参加していた4名で、5月までにインターネットの使い方やメールの使い方を学んできました。今回の講演では、インターネットを利用する際の注意点や、SNSの利用方法、賢い利用方法などを学びました。



### 浴衣の着付け教室

2016年6月25日(土)、竹内きもの学院の竹内ひとみ先生を講師にお招きして、「女性のための浴衣の着付け教室」を開催しました。

この企画は、7月4～6日に開催される「北門神社祭」の会場がまちラボ前であることから、『浴衣を綺麗に美しく着て、お祭りを楽しんでほしい』との思いで開催しました。

参加者は学生や市民の方など5名で、初めて浴衣に袖を通す人もいました。時間をかけずに着付けをするための準備の方法や、着付けをするときの注意点、帯の結び方などを学びました。可愛い帯の結び方や、アレンジの方法なども学び、教室の終盤になると、自分一人で着付けをできるようになりました。

この教室は来年以降も継続し、学生を含む若い世代にお祭りを浴衣で楽しく過ごしてほしいと願っています。



お問合せ先 稚内北星学園大学 COCまちなか振興支援室 担当者 中野窓香  
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(ｱｯﾄ)wakhok.ac.jp  
URL <http://coc.wakhok.ac.jp/> ※(ｱｯﾄ)は@に変換してください





### パソコン講座開催～家計簿をつくらう～

2016年7月9日(土)、パソコン講座のおさらい編「家計簿をつくらう」を行いました。この講座は以前にも同様の内容で取り組んでおり、Microsoft Excelを使って、表の作り方や表計算の方法を学びました。

今回受講したのは初めてパソコン講座を訪れた2名の主婦で、120分の時間をかけて、オリジナルの家計簿を作成できるようになりました。



### 短冊を飾りました

2016年7月25日(月)～8月8日(月)までの間、七夕の飾りを設置しました。

手作りの装飾に加え、来館者の方々も自由に短冊を作成できるブースを設置し、まちラボ内が華やかになりました。

来館者の中でも、小学生の子どもたちが作成することが多く、思い思いに願いを込めていました。

### 夏休み工作教室を開催

2016年7月28日(木)、小学校低学年を対象とした夏休み工作教室「ずぼんぼをつくらう」を開催しました。ずぼんぼとは、江戸時代から伝わる玩具で、和紙で作ったものをうちわであおぎ遊びます。

参加したのは小学1・2年生の親子3組で、子どもだけでなく保護者の方も熱心に制作しました。

オリジナルのずぼんぼが完成した後は、実際にうちわであおいで遊び、上手にあおぐことができず苦労している方もいたものの、楽しく遊ぶことができました。

参加者からの声もあったため、冬休みも工作教室を開催する予定です。



お問合せ先 稚内北星学園大学 COCまちなか振興支援室 担当者 中野窓香  
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(フット)wakhok.ac.jp  
URL <http://coc.wakhok.ac.jp/> ※(フット)は@に変換してください



### シャッターアートへの取り組み

2016年7月27日(水)、昨年度から継続して取り組んでいる「まちラボシャッターアートプロジェクト」のワークショップを開催しました。

この取り組みは、まちラボ閉館時のシャッターを彩り、商店街を華やかにすることを目的とし、「マルチメディア表現概論」「マルチメディア表現実習」(ともに小谷彰宏教授)の講義の一環として取り組んできました。

このワークショップには、講義を受講する学生の中から代表者4名が参加し、稚内中央商店街振興組理事長の尾崎篤志氏をお招きし、北海道滝川市の先行事例を視察に行った小谷彰宏教授からの報告を行いました。その後、これまでの取り組みや、シャッターをどのように彩る予定でいるのか、どのようなテーマで取り組んでいくのかなどを学生たちから報告を行いました。

「南中ソーラン」や「樺太犬タロ・ジロ」など稚内の歴史と関係深いものを題材としたシャッターアートのイメージが報告されました。



### 今後の取り組み

学生たちの報告の後、稚内中央商店街振興組理事長の尾崎篤志氏より、助言をいただきました。今後、商店街全体の取り組みに繋げていくために、目的を明確にすることや、「シャッター街」となってしまう商店街に少しでも「シャッターを観に」来る人が増えて欲しいと期待していただきました。

今後の取り組みとして、頂いた助言をもとにさらに検討を重ね、最終デザインの完成を目指します。

まちラボシャッターへの完成は8月末を予定しており、9月から学生たちがデザインしたシャッターアートをお披露目予定です。



お問合せ先 稚内北星学園大学 COCまちなか振興支援室 担当者 中野窓香  
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(アット)wakhok.ac.jp  
 URL <http://coc.wakhok.ac.jp/> ※(アット)は@に変換してください



### 「稚内みなと南極まつり」に参加しました

2016年8月6日(土)・7日(日)の2日間、稚内中央商店街周辺で「稚内みなと南極まつり」が開催されました。このイベントは、南極観測で活躍した樺太犬、タロとジロの故郷であり、南極ゆかりの地であることに由来し、今年で56回目の開催になります。

6日(土)夕方に行われた「北海てっぺんおどり」「南極おどり」には約1,500名が参加した中、本学教職員・学生も参加しました。

本学からは40名近くが参加し、「北海てっぺんおどり」では「大会長特別賞」を受賞することができました。



### 教たま夏の特別教室

2016年8月8～10日の3日間、「教たま夏の特別教室」を開催しました。この取り組みは、今年度から始まった「教たま数学教室」の夏休み特別編で、通常の教室では中学3年生が対象ですが、小・中学生を対象として行いました。

夏休みの宿題を持参した子どもたちは、先生役となった学生とともに楽しく勉強をしていました。



### 集中講義を開催

2016年8月10日(水)、集中講義「地域福祉論」がまちラボで行われました。この講義は、稚内養護学校の先生を講師にお招きし、実際に街へ出て商店や施設へ行く際、どのようなバリアがあるのかを調査しにフィールドワークを実施しました。

周辺のお店の方々にもご協力いただき、学生たちは実際に車椅子に乗って体験をしました。



お問い合わせ先 稚内北星学園大学 COCまちなか振興支援室 担当者 中野窓香  
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(アット)wakhok.ac.jp  
URL <http://coc.wakhok.ac.jp/> ※(アット)は@に変換してください



### 集中講義「児童サービス論」

2016年9月3日(土)、夏季の集中講義「児童サービス論」の一環で、絵本の読み聞かせを行いました。今年度の受講者は7名で、まちラボに稚内大谷幼稚園・オアシス保育園の子どもたちを招き、練習の成果を発揮しました。

子どもたちは学生の読み聞かせを真剣に聞いており、絵本の世界を楽しんでいました。また、全員の発表を終えた後も大型絵本のリクエストがあり、学生数名が応えました。



### 敬老の日イベント開催

2016年9月10日(土)、第2回目となる「敬老の日イベント」を開催しました。この日は午前高齢者向けのパソコン講座「文字の入力編」を開催しました。2名の高齢者の方が参加し、文字の入力をする上での注意点などを学びました。午後からは稚内大谷幼稚園「ばおばお隊」、「まちづくり稚内」と共催の『絵本の読み聞かせ』を稚内駅(キタカラ)で行ったのち、まちラボで『プラ板キーホルダー作り』を行いました。子どもたちの中には初めてプラ板を使う子どもも多く、楽しく作成しました。

### わくわくワークフェス会場に！

2016年9月11日(日)、稚内青年会議所主催の『わくわくワークフェス2016』が開催されました。このイベントは地域の子どもたちが様々な業種のお仕事を体験でき、稚内中央アーケード内で行われました。まちラボも「カメラ屋さん」、「電気屋さん」の体験スペースとなり、多くの子どもたちで賑わいました。



お問合せ先 稚内北星学園大学 COCまちなか振興支援室 担当者 中野窓香  
〒097-0018 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(フット)wakhok.ac.jp  
URL <http://coc.wakhok.ac.jp/> ※(フット)は@に変換してください



稚内北星学園大学 Wakkanai Hokusei Gakuen University  
 地域(知)の拠点 地域観光支援室副室長 小谷彰宏

まちらボシャッターアートが完成

はじめに

全国的に問題となっているいわゆる《シャッター商店街》は、コンビニエンスストアや大規模商業施設の増加、店主の高齢化と後継者不足など様々な要因によるものですが、商店街の空き店舗の増加は地域の魅力の喪失であり結果的に街の衰退へつながります。その対策としての地域活性化の方法は様々ですが、芸術の分野ではアートの持つ創造性を社会に還元する目的で地域イベントやまちづくりなど地域振興や観光産業振興等に活かしています。

そこで、稚内北星学園大学COCでは、まちなかメディアラボが開設されている稚内中央商店街でシャッターアートプロジェクトを立ち上げることになりました。少しずつですが、シャッターアートをまちらボから商店街全体に広げ、地域の魅力となるような事業に育つことを目標としています。

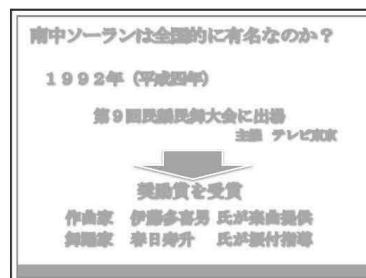
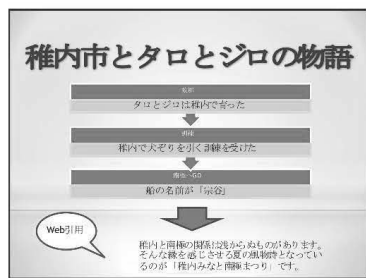
まちらボシャッターアートへの取り組み1年目 (2015年度)

◆ 商店街シャッターアート全体のコンセプトデザイン

物語性や地域性のある題材

・2015年度2年生情報メディアゼミで調査及び提案発表を行った。

- ① 稚内とタロとジロと南極祭りの関係を歴史的に考察
  - ・南極物語をテーマに各店舗のシャッターを絵本のように表現
  - ・なぜ南極祭りと言うのか?など「稚内あるある」のQ&A
- ② 南中ソーラン
  - ・決めポーズと歴史紹介
  - ・踊り方解説イラストと踊り体験イベントと連携
- ③ 風車・稚内の再生可能エネルギー
  - ・風車と宗谷丘陵の風景
  - ・再生可能エネルギーテーマパーク
- ④ 100年後の稚内
  - ・地理的あるいは歴史的等の観点から稚内でしか出来ない未来想像図(創造図)を描く(隣町に行く感覚でロシアサハリン州と交流する未来の稚内)



◆ 商店街活性化シャッターアート事例視察(教員)

視察日程: 2016年 3月18日(金)~19日(土)

場 所: 滝川市鈴蘭商店街(ベルロード)

短編映画「シャッター×シャッター」(中鉢貴啓監督 ※滝川市出身)のための取り組み。

空き店舗(6店舗)のシャッターに制作されており、シャッターの前で写真を撮ることができるように工夫されたデザイン

## まちラボシャッターアートへの取り組み2年目（2016年度）

### ◆まちラボシャッターアートのデザイン（設計）

- デザイン制作チームを編成し、昨年度の2年ゼミの提案を元にビジュアル表現のコンセプトデザインを行った。（科目：マルチメディア表現概論、実習）
- 中央商店街関係者を交えたワークショップの開催（COCまちなか振興支援室活動レポートNo.25参照）
- 2016年4月～7月中旬

### ◆ビジュアルデザイン制作（監修：小谷彰宏）

- 原案→デジタルイラスト等の制作→構成→印刷データ作成  
（科目：「マルチメディア表現概論、実習」「ビジュアルデザイン」「画像加工技術」）
- 2016年6月～8月中旬

### ◆シャッターアート制作

- デジタルデータ→業者にラッピングフィルム印刷発注→学生と業者によりシャッター施工  
2016年8月下旬～9月中旬
- 完成：2016年9月17日（土）
- 協力：（有）北都工芸社（フィルム印刷・施工）



### ◆発表

2016年9月18日（日）稚内北星学園大学COCシンポジウム全国大会地域観光支援室エクスカーションにて発表

## 成果

デザイン表現による地域活性化がテーマであり、2年生メディア表現コースと地域デザインコースが中心になりましたが、2015年度の2年生（現3年生）の調査提案から、観光資源や地理、歴史、情報化社会と密接に関わる再生可能エネルギーなど本学の5コースすべての分野が関わっていることで学科全体の協働とし、アクティブラーニングの実践教育と成りました。

## 次年度に向けて

情報メディアコースの協力でAR（拡張現実）を活用したマトリョーシカデジタル版顔ハメの制作を行い、シャッターアートと並んでCG顔ハメの撮影で楽しめるようにする。



（AR試作品は完成済み）



お問合せ先 稚内北星学園大学 COCまちなか振興支援室 協力：地域観光支援室 担当者：小谷彰宏（教授）  
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(アット)wakhok.ac.jp  
URL <http://coc.wakhok.ac.jp/> ※(アット)は@に変換してください

2ページ

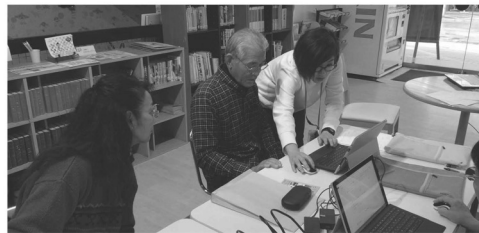


### 毎月開催！パソコン講座

2016年10月22日(土)、「wordで案内文を作ろう」をテーマに、パソコン講座を開催しました。このパソコン講座は昨年10月より定期的に開催しており、今回で14回目となります。

この講座にはご高齢の方を中心に7名の方が受講し、「Microsoft word」を使った町内会などの案内文の作成方法を学びました。文字の入力方法だけでなく、操作を簡単にできる方法や見やすくするための工夫など、参加者全員がオリジナルの案内文を作成することができました。

次回パソコン講座は「wordでデザイン」をテーマに、今回作成した案内文に画像を挿入したり、背景をつけたりする方法を学び、12月の講座では年賀状の作成方法を学ぶ予定です。



### 公開講座～中国語って面白い！～

2016年10月29日(土)、公開講座「中国語って面白い！」を開催しました。地域の教育力向上に資するべく、企画したものです。その他にも英語・数学・オリンピック関連と様々な講座をすべて無料で開講しています。今回の講座は学習コンシェルジュのガオシュウ先生を講師に行いました。

中国語講座は定期的に開催されているものもありますが、今回は市民も方からも募集をし、13名の方が受講しました。

今回の講座では日本語と中国語の違いや、同じ漢字での意味の違い、文化の違いなどを学び、講師のガオシュウ先生から、中国の郷土料理「銀耳湯(きくらげスープ)」も用意されました。あたたかい雰囲気の中、受講者からも多くの質問があり、有意義な講座となりました。



お問い合わせ先 稚内北星学園大学 COCまちなか振興支援室 担当者 中野窓香  
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(アット)wakhok.ac.jp  
URL <http://coc.wakhok.ac.jp/> ※(アット)は@に変換してください



## まちラボの活動の様子～2016年11月～

稚内北星学園大学  
Wakkanai Hokusei Gakuen University  
地(知)の拠点

稚内北星学園大学 メディア表現指導員  
中野 窓香

### パソコン講座を継続しています

2016年11月19日(土)、毎月定期的に開催をしているパソコン講座が行われました。今回の講座で15回目を迎え、「Wordでデザイン」のテーマのもと実施しました。受講したのは10月に開催されたパソコン講座「wordで案内文を作ろう」にも参加した6名で、案内文作成の応用編です。

この講座の内容は「Microsoft word」を使い、案内文を作成した後、画像の挿入の方法を学びました。文章だけでなく画像を入れることで、華やかな文書を作成することができました。また、インターネットから画像を保存する方法も学び、受講者たちからは『今までの疑問が解消された』などの声も上がりました。

次回パソコン講座は「wordで年賀状」をテーマに、これまでの文章の作成方法や画像の挿入方法を応用し、年賀状の作成に挑みます。



### 中国語講座残り数回…

平成27年度から開催されている「中国語講座」。平成28年度の講座は残り2回となりました。

この講座は中国出身の本学学習コンシェルジュ、ガオシュウ先生が講師となり、平成27年10月から月に2回程度行っています。受講者は多くの方が初回から継続して参加しているため、互いにコミュニケーションをとりながら行っています。

はじめは一音の発音に戸惑っていた参加者も、会話の練習をおこなっており、1年の取り組みの成果が現れています。

平成28年度の中国語講座は残り2回となっており、12月3日、10日の講座で終了となります。来年度以降も継続して行う予定で、新規受講者の募集はせず、これまでの受講者で行う予定です。

お問い合わせ先 稚内北星学園大学 COCまちなか振興支援室 担当者 中野窓香  
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(アット)wakhok.ac.jp  
URL <http://coc.wakhok.ac.jp/> ※(アット)は@に変換してください





## パソコン講座 ～Wordで年賀状～

2016年12月15日(木)、17日(土)に初心者向けのパソコン講座「Wordで年賀状」を開催しました。受講者は2日間合わせて9名で、10月から継続して開催した講座の最終回でした。講座の内容はインターネットで干支やお正月のフリー画像を検索・ダウンロードしたのち、「Microsoft Word」をつかって画像・文章の挿入、デザインを行いました。

これまでに継続して参加していた方は復習も兼ねて、初めての方は時間をかけながらゆっくりと作成し、思い思いの年賀状が完成しました。

2017年1月からは、「Microsoft Excel」の講座を3回にわたって開催予定で、どのように使うことができるのか、表計算やグラフの作成方法を学びます。



## 毎週木曜「パソコン指導強化DAY！」

まちラボでは通常開館時にパソコンやタブレットなどの操作方法や使用方法についての相談に応じていますが、12月より毎週木曜は「パソコン指導強化DAY」となりました。

いつもはメディア表現指導員1名の常駐ですが、毎週木曜日の13時～17時は、職員2名体制で対応いたします。

パソコンやタブレット、スマートフォンなどの電子機器の使用方法、ポスターやチラシのデザインのお手伝いを行っておりますので、初心者の方も安心してぜひお越しください。

木曜日  
**パソコン指導強化デー**

毎週木曜日：13:00～17:00  
料金：無料

パソコンを使ってみたい、インターネットで調べ物してみたいなど、パソコン操作のご相談に乗ります！お気軽にスタッフにお声がけください。普段お使いのノートパソコンがありましたらお持ちいただけますとスムーズです。

## 中国語講座終了！ありがとうございました！

2016年10月から開催されていた後期中国語講座は、すべての講座を終了いたしました。今回の講座から、まちラボで開催されていた「日常会話グループ」、本学内のわくらボで開催された「観光案内グループ」の約20名の参加がありました。

今後は新規募集はせず、2017年4月以降に、再開する予定です。受講してくださった皆さん、ありがとうございました。

お問合せ先 稚内北星学園大学 COCまちなか振興支援室 担当者 中野窓香  
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(アット)wakhok.ac.jp  
URL <http://coc.wakhok.ac.jp/> ※(アット)は@に変換してください

#### (4) COC 推進委員会活動レポート

COC 推進委員会活動レポート No. 8 (2016 年 11 月 16 日)

「第 1 回 COC 全国シンポジウム」

COC 推進委員会活動レポート No. 9 (2017 年 3 月 1 日)

「第 6 回 COC 地域活動報告会」

活動レポートは、本学 COC 事業ホームページ (<http://coc.wakoh.ac.jp/education-room/>) よりダウンロードすることができます。

# 第1回COC全国シンポジウム

## 地域の教育力向上に果たす大学の役割

—稚内・宗谷の子育て運動に学ぶ地域の担い手づくり—



### COC地域シンポジウム開催

9月17日、18日の2日間にわたって、第1回COC全国シンポジウム「地域の教育力向上に果たす大学の役割—稚内・宗谷の子育て運動に学ぶ地域の担い手づくり」を開催しました。

このシンポジウムはCOC事業の一環として取り組まれているもので、本学初めての本シンポジウムでは、昨年度の「地域シンポ」を踏まえ「教育」をテーマに開催しました。二日間でのべ250名の方々にご参加いただき、実り多い会となりました。



### 基調講演

14:15～15:15

開会式に続き、基調講演を行いました。開会式には**工藤広稚内市長**にもご出席いただき、激励のお言葉をいただきました。

基調講演は、これまで25年にわたって宗谷・稚内の教育を研究されてきた、名古屋大学大学院教授の**植田健男先生**にご登壇いただきました。宗谷・稚内の教育の魅力である地域に根ざした教育実践について語っていただき、またそれが新学習指導要領への対応など、現代教育の課題に対してどのように意味があるのかを語っていただきました。

### パネルディスカッション・情報交換会

パネルディスカッションでは、**表純一氏**(稚内市教育長)、**若林利行氏**(稚内高等学校校長)、**網谷一幸氏**(潮見が丘中学校校長)にご登壇いただき、それぞれのご活動における地域への思いと、大学への期待についてお話いただきました。それぞれのご活動における地域との結びつきやその中での大学の役割を確認しました。

また本学学長の**斉藤吉広**から、地域に対するこれまでの大学の取組みや、大学として考える担うべき役割についてお話ししました。

全体討議では道外からご参加いただいた方々からもご発言いただき、充実したディスカッションとなりました。

場所を移して行われた情報交換会にも多くの方にご参加いただき、他大学のご関係者や地域の方々に、ご感想と励ましのお言葉を

いただきました。駆けつけていただいた**青山滋副市長**に締めのご挨拶をいただきました。



### 開催概要

主催：稚内北星学園大学

会場：新館1401教室ほか

日程：平成28年

9月17日(土)14:00～19:30

開会式／基調講演／パネルディスカッション／情報交換会

9月18日10:00～16:30

第5回地域活動報告会(課題別)／ポスターセッション／エクスカーション

目的：本学COCの意義、進捗、発展可能性を地域内外の人々と共有する(H28COC事業調査記載の事業内容より)

## 第5回地域活動報告会

18日は第5回地域活動報告会、ポスターセッション、エクスカージョンを行いました。

地域活動報告会は年に2回、本学の取組みを地域の皆様にご報告することを目的として行っています。通常は一つの会場で「地域教育」「地域観光」「まちなか振興」がそれぞれの活動について報告しますが、今回は特別版として3セッションを別会場で同時に開催しました。各会場で、学生を中心とした報告会が行われました。

各会場に多くの方々にご参加いただき、学生の活動へ激励をいただきました。



## ポスターセッション

ポスターセッションは研究を一枚のポスターにまとめ、それを発表者と参加者が検討する報告形式です。本学教員が行った「地域志向研究」の発表が内容の大半でしたが、山形大学、東北公益文科大学の先生方からもポスター発表にご参加いただきました。

会場ではそれぞれの研究内容について熱心に議論が行われました。



## エクスカージョン

エクスカージョンでは宗谷岬、北防波堤ドーム、旧瀬戸邸(国登録有形文化財)などを巡りました。主なガイド役は藤崎准教授のゼミ生が担当し、この日のために準備と練習を重ねてきました。当日は慣れないながらも熱心な学生のガイド役にご好評をいただきました。



## アンケートより

(1日目)

- 自分たちの地域に関することだったため興味も沸き嬉しい話も聞けました。ありがとうございます。(学生)
- さまざまな学校段階の方からのお話を、1度にきけたことがとてもよかったです。稚内、宗谷の教育の全体像が良くわかりました。(ご所属無回答)
- 最近の北星大学は、本当に変わってきましたよね。近くに住んでいるので、学生の様子もわかります。地域と大学の双方向での発展を期待しています。(一般参加)

(2日目)

<教育>写真も活用されていて、学生自身にも楽しみに感じていると伝わりました。／もう少し自信を持って発表すれば良いと思う。  
<観光>アンケートや実体験にもとづく詳細な分析・検討があり、今後のまちづくりに役立つと思います。／観光という着眼から地域の歴史を知るという素晴らしい体験だと思います。  
<まちなか>こんな活動していることを商店街の人達に伝えて中央商店活性化策を共有していくことが大切と分かった。／一緒に活動してきた内容について改めて知ることができてよかったです。

## 総括

本シンポジウムは、本学の役割や学生の活動を市内外の方々にお伝えし、本学のあり方について共に考える機会として役割を果たすことができたと考えている。開催にあたっては様々な課題があったものの、結果的に学内外の多くの方々を支えられ無事閉会を迎えることができた。こうした取り組みを学内だけのものにするのではなく、地域の方々や他地域の方々にご参加いただき、成果や課題を共有できる場として機能させることが今後の本学にとって重要だと考える。

執筆: 米津直希(第1回COCシンポジウム実行委員長)

お問合せ先 稚内北星学園大学COC推進委員会  
担当 米津 直希  
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28  
電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500  
E-mail info(7つ)wakhok.ac.jp  
※(7つ)は@に変換してください  
URL <http://www.wakhok.ac.jp/coc.html>



## はじめに

地域活動報告会は今回で第6回目です。COC推進委員会では、具体的な実施計画を平成28年10月24日に決定しました。その後、教授会への報告、委員会での審議を重ねました。また、今回は初の取り組みとなる2部制の形を取り、第2部をまちラボで遅い時間に開催しました。また第4回に引き続き、学内公募を実施し、学生の参画を得ました。

以上の過程を経て、学生と教職員による「第6回地域活動報告会実行委員会」を組織し、実施に至ったものです。

主催：稚内北星学園大学

会場：新館1301教室 (第1部) / まちなかメディアラボ (第2部)

日時：平成29年2月14日 (火)

14時30分～16時 (第1部) / 19時30分～20時30分 (第2部)

### ●開催の目的

本年度の本学COC事業の成果が地域内外の人々と共有される【H28COC事業調査(21)記載の成果目標より】

### ●発表形式

口頭発表とし、第1部は教職員を中心に地域志向教育研究経費に採択された研究の成果報告、第2部は学生が中心市街地に関する事業・研究報告を行いました。

### ●実行委員

越後武蔵・梶浦里沙・勝又万由子・佐藤佑介・中島拓人・保坂崇秀・水本一哉・三石美保・山上純也・山岸 純樹・吉岡太輔・黒木宏一・石黒志津・鏡山 樹・佐藤ゆかり・中川圭太・三浦 猛・向 光宏・米津直希(実行委員長)

## 第1部 発表要旨

### <第1報告：地域教育分野>

#### ○報告者

安藤 友晴(情報メディア学部 教授)

#### ○報告題名

稚内市内におけるICT利用教育の実際と支援

#### ○報告内容要旨

稚内北星学園大学は、稚内市内のICT利用教育を支援するため、小中学校の教員を対象とした講習会を2014年度から継続して実施してきました。また、2015年度には小中学校の教員を対象としたICT利用教育に関する質問紙調査を実施しています。本報告では、これらの実践について詳しく報告し、得られた知見をご紹介します。

### <第2報告：地域観光分野>

#### ○報告者

黒木 宏一(情報メディア学部 講師)

高 澗(特任助教 学習コンシェルジュ)

#### ○報告題名

地域課題の解決に大学のシーズを活かすこと—ノシャップ寒流水族館での取り組みの事例

#### ○報告内容要旨

地域志向研究経費に採択された黒木らのノシャップ寒流水族館をフィールドとした3つの研究は、本学の持つシー

ズを生かすこと、教育活動と接近することを通じて行い、多言語化という一つの課題を解決しようとしています。これについて、研究の背景、学内、学外連携を通じた推進、調査の実施、成果の一端を紹介しました。

### <第3報告：地域振興研究>

#### ○報告者

侘美 俊輔(情報メディア学部 准教授)

#### ○報告題名

連続ドラマ「エゾカンゾウの咲くまちへ」制作による教育効果の検証

#### ○報告内容要旨

本学では、(株)川島旅館(豊富町)からの依頼により、連続ドラマ「エゾカンゾウの咲くまちへ」を制作しました。現在YouTube上で公開中の連続ドラマは、本学の2年生を中心に17名の学生と牧野先生(本学非常勤講師)を中心に制作いたしました。この連続ドラマ制作は、学生たちにどのような学び、意識変容をもたらしたのでしょうか。本報告では、連続ドラマの制作過程を俯瞰的に参与観察していた報告者(侘美)の視点からご報告いたしました。

<http://movie.kawashimaryokan.co.jp/>

## 第2部 発表要旨

### <第1報告：まちなか振興分野>

#### ○報告者

藤澤 翔太  
武田 大貴  
濱田 里実(以上、情報メディア学部 4年)

#### ○報告題名

稚内中央商店街動画制作における学生の学び

#### ○報告内容要旨

報告者たちは、2015年度に若原・柘美ゼミのゼミ生5名と牧野先生(本学非常勤講師)を中心に、稚内中央商店街のPR動画を5本制作いたしました。本報告では、この制作過程において、報告者たちが学んだこと、感じたことなどをそれぞれの立場からご報告いたしました。また、地域活動報告会の発表時に、ノーザンノースさん、大王本店さんの動画を初公開いたしました。URL [https://www.youtube.com/watch?v=ly\\_wHWy9ZtU](https://www.youtube.com/watch?v=ly_wHWy9ZtU)

### <第2報告：まちなか振興分野>

#### ○報告者

梶浦 里沙 勝又 万由子 佐藤 佑介 中島 拓人  
三石 美保 山岸 純樹 吉岡 大輔  
(以上、情報メディア学部2年)

#### ○報告題名

稚内市中央商店街における状態調査(実習)

#### ○報告内容要旨

講義「社会教育課題研究」では学生の実習として、稚内中央商店街の歴史と現状を明らかにし、今後の方向性を探るための調査を行いました。前期には資料調査を行い、後期には商店街の皆さんにインタビュー調査にご協力いただきました。この調査をふまえ、本報告では特に商店街の皆さんの“意識”に焦点を当てた分析を試みました。稚内中央商店街のこれからに向けてどんな取り組みが必要なのか、報告者による考察をご報告しました。



## 出席者へのアンケートから

当日第1部に参加された60名のうち31名(51.7%)から、第2部に参加された50名のうち15名(30%)から回答を得ました。

第1部の参加者からは、「活動を具体的に説明していただき、大変参考になりました」「地域での密着した活動について今後も期待しています」などのお声をいただきました。一方で「もっと市民に知らせてほしい」との課題もいただきました。第2部の参加者からは「稚内の歴史背景を良く調べてあり感心した」「学生の取り組みが良かった」などの声をいただきました。一方で、もっと学生の発表の場を設けてほしい、もっと若い人の声を聞きたいとのご意見をいただきました。

「報告会に来てよかったと思いますか」との問いについて「大変良かった」の回答が第1部では46.7%、第2部では35.5%でした。

## 総括

今回は初の試みとなる2部制をとりましたが、第1部のみで見れば来場者は減少傾向にありますが、トータルの来場者ではのべ110名と、大変多くの方々にご来場いただきました。

また、2部に分けたことにより、学生と教職員、双方の取り組みについてご報告することができました。双方にご来場いただいた方もいらっしゃいました。今回の状況も踏まえて、本学の取り組みについて今まで以上に知っていただけるよう、今後の報告会についても工夫をしていきたいと思っております。

本学COC事業も来年度で4年目となり、事業期間終了まで残すところあと2年となりました。事業期間終了後も稚内・宗谷地域の皆様と協力しながら取り組みを進めていくため、具体的な展望を描きながら、残りの期間の活動に取り組む必要があると感じています。

お問合せ先 稚内北星学園大学 地域教育支援室 米津直希  
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail [info@wakhok.ac.jp](mailto:info@wakhok.ac.jp)  
URL <http://coc.wakhok.ac.jp/> ※(ｱｯﾄ)は@に変換してください

発行 稚内北星学園大学  
編集 稚内北星学園大学 COC 推進委員会 (COC デザイン室)

2016.8.17  
vol.5

# COC 新聞

## 座談会



**米津 直希**  
全国シンポ開催実行委員長  
COC 地域教育支援室長  
講師

**米津** その通りです。COC をきっかけに、歴史と地域に支えられた地域活動が、一部の学生から全体に広がっている感じがしています。  
**手島** 原点は地域志向・貢献ですね。最初、「地域志向？」と言っていたはず

### きっかけの COC

**若原** これまでの地道な学生ボランティア活動、それを支援する大学の姿勢もあるのではないですか。  
**米津** 2年間の COC 事業も3年目。「地域の教育力向上」をテーマに来月開催する第1回全国シンポジウムはその中間決算。準備に忙しい関係者が集まり、その思いを語りあってみようという思いがあります。

**手島** 最近、市民の方から「大学変わったね」、「頑張っている」とよく言われます。先生たちはどう思っているのですか。  
**米津** 稚内に来て3年目以前のこととはわかりませんが、大学で、今回のシンポジウムで記念講演をしていただく植田先生のゼミでした。  
その時の宗教教育調査で、「教育は国民が直接に責任を負うべき共同事業」という理解があると聞きました。ここで仕事するようになり大学生を快く受け入れてもらえる環境にそのことを実感しています。

5年間の COC 事業も3年目。「地域の教育力向上」をテーマに来月開催する第1回全国シンポジウムはその中間決算。準備に忙しい関係者が集まり、その思いを語りあってみようという思いがあります。

**米津** 学生は無意味・無理・押しつけには逃げていきます。私がそうです(笑) 大事なものは、継続性と活動の興味理解、達成感だと思います。  
**手島** 地域と教育はもとより親和性があり、活動がわかりやすいのです。地域元は「教育」を実践的に学び、最良の教育と位置づけています。  
**佐賀** 今までうちの学生は、地域と積極的に協力していますが、企画から運営まで主体的に手掛けることが多くなりました。その中で地域の課題や解決策をより深く考えるようになったと感じています。

**米津** 学生は無意味・無理・押しつけには逃げていきます。私がそうです(笑) 大事なものは、継続性と活動の興味理解、達成感だと思います。  
**手島** 地域と教育はもとより親和性があり、活動がわかりやすいのです。地域元は「教育」を実践的に学び、最良の教育と位置づけています。  
**佐賀** 今までうちの学生は、地域と積極的に協力していますが、企画から運営まで主体的に手掛けることが多くなりました。その中で地域の課題や解決策をより深く考えるようになったと感じています。

**米津** 学生は無意味・無理・押しつけには逃げていきます。私がそうです(笑) 大事なものは、継続性と活動の興味理解、達成感だと思います。  
**手島** 地域と教育はもとより親和性があり、活動がわかりやすいのです。地域元は「教育」を実践的に学び、最良の教育と位置づけています。  
**佐賀** 今までうちの学生は、地域と積極的に協力していますが、企画から運営まで主体的に手掛けることが多くなりました。その中で地域の課題や解決策をより深く考えるようになったと感じています。

**米津** 学生は無意味・無理・押しつけには逃げていきます。私がそうです(笑) 大事なものは、継続性と活動の興味理解、達成感だと思います。  
**手島** 地域と教育はもとより親和性があり、活動がわかりやすいのです。地域元は「教育」を実践的に学び、最良の教育と位置づけています。  
**佐賀** 今までうちの学生は、地域と積極的に協力していますが、企画から運営まで主体的に手掛けることが多くなりました。その中で地域の課題や解決策をより深く考えるようになったと感じています。

**米津** 学生は無意味・無理・押しつけには逃げていきます。私がそうです(笑) 大事なものは、継続性と活動の興味理解、達成感だと思います。  
**手島** 地域と教育はもとより親和性があり、活動がわかりやすいのです。地域元は「教育」を実践的に学び、最良の教育と位置づけています。  
**佐賀** 今までうちの学生は、地域と積極的に協力していますが、企画から運営まで主体的に手掛けることが多くなりました。その中で地域の課題や解決策をより深く考えるようになったと感じています。



**手島 孝通**  
COC プログラムオフィサー  
客員教授

### 全国シンポまであと1ヶ月

## 大学と地域 これまで今これから

**米津** 「地域志向教育研究」に多くの教員から応募があり、各自の研究と地域を結びつける試みが続いています。  
**手島** どんな研究が行われているのですか?  
**佐賀** この2年間で14件の応募(採択10件)があります。稚内の観光や ICT、「南中ソーラー」など、身近な課題の探求が特徴です。  
**手島** ここに市民からいた

**米津** 「地域志向教育研究」に多くの教員から応募があり、各自の研究と地域を結びつける試みが続いています。  
**手島** どんな研究が行われているのですか?  
**佐賀** この2年間で14件の応募(採択10件)があります。稚内の観光や ICT、「南中ソーラー」など、身近な課題の探求が特徴です。  
**手島** ここに市民からいた

**米津** 「地域志向教育研究」に多くの教員から応募があり、各自の研究と地域を結びつける試みが続いています。  
**手島** どんな研究が行われているのですか?  
**佐賀** この2年間で14件の応募(採択10件)があります。稚内の観光や ICT、「南中ソーラー」など、身近な課題の探求が特徴です。  
**手島** ここに市民からいた

**米津** 「地域志向教育研究」に多くの教員から応募があり、各自の研究と地域を結びつける試みが続いています。  
**手島** どんな研究が行われているのですか?  
**佐賀** この2年間で14件の応募(採択10件)があります。稚内の観光や ICT、「南中ソーラー」など、身近な課題の探求が特徴です。  
**手島** ここに市民からいた

**米津** 「地域志向教育研究」に多くの教員から応募があり、各自の研究と地域を結びつける試みが続いています。  
**手島** どんな研究が行われているのですか?  
**佐賀** この2年間で14件の応募(採択10件)があります。稚内の観光や ICT、「南中ソーラー」など、身近な課題の探求が特徴です。  
**手島** ここに市民からいた

**米津** 「地域志向教育研究」に多くの教員から応募があり、各自の研究と地域を結びつける試みが続いています。  
**手島** どんな研究が行われているのですか?  
**佐賀** この2年間で14件の応募(採択10件)があります。稚内の観光や ICT、「南中ソーラー」など、身近な課題の探求が特徴です。  
**手島** ここに市民からいた

**米津** 「地域志向教育研究」に多くの教員から応募があり、各自の研究と地域を結びつける試みが続いています。  
**手島** どんな研究が行われているのですか?  
**佐賀** この2年間で14件の応募(採択10件)があります。稚内の観光や ICT、「南中ソーラー」など、身近な課題の探求が特徴です。  
**手島** ここに市民からいた

だく嬉しい評価の基礎があるのでしょうか。では課題はどんなことですか。  
**佐賀** 学生が多ければさらに深く多面的な実践・研究がすすむのに、と思います。  
また、地域連携がもともと難しい分野の研究も当然ありますので事業の成果や課題を大学全体でチームとして共有しながら前進していくことが大事だと思っています。



**若原 幸範**  
COC まちなか振興支援室長  
准教授

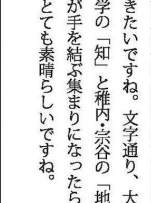
**米津** うちの事業は「教育」と「街づくり」が柱です。その「まちなか」(まちなかメディアアラボ)の様子が毎日のように新聞に出ています。  
**若原** 「まちなか」振興支援の活動は「まちなか」が中心です。目指していることは、「まちなか」を地域の皆さんと学生・大学とが交流できる場にする点にも、活動の拠点にしている点です。  
まだ道半ばですが、最近はいよいよ2月には稚内中央商店街と本学の共同企画で「中央商店街イベントプランコンテスト」を開催するなど地域と大学との連携が着実に進んでいます。

### 事業の2本柱

**米津** うちの事業は「教育」と「街づくり」が柱です。その「まちなか」(まちなかメディアアラボ)の様子が毎日のように新聞に出ています。  
**若原** 「まちなか」振興支援の活動は「まちなか」が中心です。目指していることは、「まちなか」を地域の皆さんと学生・大学とが交流できる場にする点にも、活動の拠点にしている点です。  
まだ道半ばですが、最近はいよいよ2月には稚内中央商店街と本学の共同企画で「中央商店街イベントプランコンテスト」を開催するなど地域と大学との連携が着実に進んでいます。

**米津** うちの事業は「教育」と「街づくり」が柱です。その「まちなか」(まちなかメディアアラボ)の様子が毎日のように新聞に出ています。  
**若原** 「まちなか」振興支援の活動は「まちなか」が中心です。目指していることは、「まちなか」を地域の皆さんと学生・大学とが交流できる場にする点にも、活動の拠点にしている点です。  
まだ道半ばですが、最近はいよいよ2月には稚内中央商店街と本学の共同企画で「中央商店街イベントプランコンテスト」を開催するなど地域と大学との連携が着実に進んでいます。

**米津** うちの事業は「教育」と「街づくり」が柱です。その「まちなか」(まちなかメディアアラボ)の様子が毎日のように新聞に出ています。  
**若原** 「まちなか」振興支援の活動は「まちなか」が中心です。目指していることは、「まちなか」を地域の皆さんと学生・大学とが交流できる場にする点にも、活動の拠点にしている点です。  
まだ道半ばですが、最近はいよいよ2月には稚内中央商店街と本学の共同企画で「中央商店街イベントプランコンテスト」を開催するなど地域と大学との連携が着実に進んでいます。



**若原 幸範**  
COC まちなか振興支援室長  
准教授

**米津** うちの事業は「教育」と「街づくり」が柱です。その「まちなか」(まちなかメディアアラボ)の様子が毎日のように新聞に出ています。  
**若原** 「まちなか」振興支援の活動は「まちなか」が中心です。目指していることは、「まちなか」を地域の皆さんと学生・大学とが交流できる場にする点にも、活動の拠点にしている点です。  
まだ道半ばですが、最近はいよいよ2月には稚内中央商店街と本学の共同企画で「中央商店街イベントプランコンテスト」を開催するなど地域と大学との連携が着実に進んでいます。

### 情報力 × 地域力

**米津** 今後の「まちなか振興」の鍵は何ですか?  
**若原** 今、教育・研究活動の一環として、稚内市の中心市街地・中央商店街の歴史・実態調査を学生たちと進めています。やはり、誰からも「見える研究活動」で、知と地との協働力合わせをすすめることが大事ではないでしょうか。  
**手島** 2年後の第2回全国シンポジウムは、5年間の研究成果発表の場になると思いますが、その核は観光や街づくりになるのでしょうか。  
**若原** はい。来月のシンポジウム※裏面の開催案内チラシ(参照)は、そのあらたな出発点にもなると思っています。  
**米津** そのためにも今回は、学生が、これまでの活動に確信を持つ機会になつて欲しいです。  
**手島** そうですね。誰よりも市民の皆さんにおいでいただきたいですね。文字通り、大学の「知」と稚内・六ヶの「地」が手を結ぶ集まりになつたらとても素晴らしいですね。

**米津** 今後の「まちなか振興」の鍵は何ですか?  
**若原** 今、教育・研究活動の一環として、稚内市の中心市街地・中央商店街の歴史・実態調査を学生たちと進めています。やはり、誰からも「見える研究活動」で、知と地との協働力合わせをすすめることが大事ではないでしょうか。  
**手島** 2年後の第2回全国シンポジウムは、5年間の研究成果発表の場になると思いますが、その核は観光や街づくりになるのでしょうか。  
**若原** はい。来月のシンポジウム※裏面の開催案内チラシ(参照)は、そのあらたな出発点にもなると思っています。  
**米津** そのためにも今回は、学生が、これまでの活動に確信を持つ機会になつて欲しいです。  
**手島** そうですね。誰よりも市民の皆さんにおいでいただきたいですね。文字通り、大学の「知」と稚内・六ヶの「地」が手を結ぶ集まりになつたらとても素晴らしいですね。



**佐賀 孝博**  
稚内北星学園大学 副学長  
COC 事業推進責任者  
教授

稚内北星学園大学 Wakkai Hokusei Gakuen University

発行 稚内北星学園大学  
 編集 稚内北星学園大学COC推進委員会(COCデザイン室)

2016.11.21  
 vol.6

# COC新聞

## 座談会

「地域の教育力向上に果たす大学の役割」をテーマにした9月の第1回全国シンポジウム。そこで明らかになった成果と課題をもとに、5年間のCOC事業は残り2年の後半戦に入ります。

**手島** COC全国シンポジウム(以下「全国シンポ」)では、どんな成果が生まれたと思いますか。

**斉藤** 稚内・宗谷の幼保小中高大の教育連携の中で、本学の存在意義が確認できました。地域の方からは大学のごくよかったという感想も多くいただいています。

**手島** 道外の方から「小さい大学ながら、とても熱心に地域貢献をしている」とか地元からは「稚内の子育て運動」が全国的にも有名なことや、大学がそこで果たしている役割を初めて知った、という声も聞きました。

**斉藤** 「子ども学校」を超えた「チーム地域」の教育実践は、全国的にも先進的で、それを学生と全教職員で確かめる機会になりましたね。



**手島 孝通**  
 COCプログラムオフィサー  
 客員教授

**手島** 今後を見通す上で、どんな課題があるのでしょうか。「頑張りやわかったが息切れしないのか」とか「素晴らしい内容だったのに参加のお知

### 見えてきた課題

ことも、「教育とは何か」を学ぶ機会になっていきます。それは教職以外の分野でも、こちら側に学ぶ気持ちさえあれば、間違いなく応援してくれるのがこの地域が持っている力であり、教育力だと思っています。



教職コースの学生はこれまでの活動に対する自信が湧いたようです。「わかる笑顔」を地元の子どもたちを教える中で体験できるのはとても有意義です。また、こうした活動を地域が全面的に応援してくれる



**斉藤 吉広**  
 稚内北星学園大学 学長

らせが少なかつた」という声もありますが。

**黒木** 本学改革の視点に立つて評価すれば、準備や運営の面は、「チーム大学」としてスタートを切ることが

## 大学と地域

### シンポを終えて

## 今後の道筋

### 見えてきた

できたと言えるのではないのでしょうか。今回は、メンバー「個々」の力が発揮されて乗り切ることができたように思います。その点では、推進室としての反省もたくさんあります。

**手島** アンケートからは、百点ではないが成功したのではないかと、という評価をいただいたように感じますが。

**斉藤** 学内では、当日が近づくにつれ、普段はCOCの活動に係わっていない分野の教員も含めて全教職員が役割を果たそうと努力しました。

こうした全学規模の催しは本学開学以来の大事事でした。  
**手島** 全国シンポの準備・運営では、教員の地域志向研究の発表方法の工夫、シンポジウムの時間配分、指揮命令系統の明確化、参加要請の仕方に関する課題を感じました。2年後の全国シンポで活かして欲しいですね。

### これからの道筋

**手島** 5年間のCOC事業は、2年後の第2回全国シンポで締めくくられます。どういう展望を持って迎えることが必要だと思いますか。

**黒木** 今度は「観光まちづくり」と「中心市街地活性化」がメインになるでしょう。補助事業としての成果を総括し、大学の役割を検証するとても大事な機会になると思います。

**斉藤** 同じ意見です。そのため、来年2月の地域シンポを端緒に、再



**黒木 宏一**  
 COC事業推進室長 講師(応用経済学)

- 9/17 全国シンポジウム  
 全体参加者数 253人
- 9/18 地域活動報告会  
 全体参加者数 102人  
 地域教育 36人  
 地域観光 36人  
 まちなか振興 30人

### MEMO

■第4回 地域活動報告会  
 2017年2月14日(火)

## 地域力×情報力 この地で知を新たに

**斉藤** 今回の全国シンポでは、地元からのご支援・ご協力をたくさんいただきました。深く感謝申し上げます。引き続き、本学を応援していただければ幸いです。



**澁谷 久**  
 COC地域教育支援室 教授(数学教育)

来年の全国シンポで十分な成果を発表できるように活動していきたいですね。また、豊富町や猿払村、利尻町以外の周辺自治体と連絡を取りあい、ニーズベースのマッチングを図り、より広域な地域連携を目指します。

**澁谷** 教員養成ゼミとしては、COCの有無に関係なく、今後も地元を基盤にした「学び」を大事にしていきたいです。継続することが重要だと思います。





発行 稚内北星学園大学  
編集 稚内北星学園大学 COC 推進委員会 (COC デザイン室)

2017.3.3  
vol.7

# COC新聞



ドラマ『2015年のあけくまへ』撮影風景

豊富町PRドラマ「エソカンソウの咲くまちへ」は、そうした本

て以来、映像の撮影・編集のスキルを身に付けて地域情報を発信する学生の活動は本学のお家芸のようなものとして育ってきました。

2000年に四年制大学になって以来、映像の撮影・編集のスキルを身に付けて地域情報を発信する学生の活動は本学のお家芸のようなものとして育ってきました。

## 映像

### 映像実績が信頼されて 地域振興ドラマを作成

昨年、学生制作の映像作品への受賞が続きました。「温泉街に、あかりをつけて」(2014年制作)が総務省地域デジタルコンテンツの大臣奨励賞、「感動がひとを動かす」市民第九合唱団の軌跡(2015年制作)が北海道映像コンテストで総合通信局長賞、「私たちは、「カラフト」を知らない」(2015年制作)が全映協グランプリの文部科学大臣賞をそれぞれ受賞しました。(いずれも、本学のホームページからどうぞご覧いただけます)

## 教育

### 子どもとともに成長 全国シンポで交流

本学の学生は、地域の教育への支援という点でも活躍しています。

教職課程に学ぶ学生を主力として、稚内市の「学方向上カンパニ」では指導助手を務め、利尻町

## 地域で活躍する 学生に励ましを

### 今年度の活動を振り返って

や豊富町で夏休み・冬休みに開かれる小中学生勉強会での学習支援を行い、猿払村とはインターネットで結んで小学生を対象に遠隔学習支援を試み、さらに「まちラボ」では無料塾での指導にも携わるなど本当にがんばっています。

こうした活動は、2014年度から5年間の文科省補助事業「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の一環として行っているものです。

昨年は9月にCOC全国シンポジウム「地域の教育力向上に果たす大学の役割」稚内・宗谷の子育

### まちなか振興 サンタとコーヒーで にぎわい創出

クリスマスを前にして企画された「サンタ・ランin WAKKANAI」は、短い周知期間にもかかわらず各所から130名の参加者を集め、市立稚内病院小児科病棟およびエンジェルボイスにプレゼントをお渡しすることもでき、成果に終えることができました。



130名が参加した「サンタ・ランin WAKKANAI」

ここで中心的に活動したのは本学の学生たち、特に1年生でした。

て運動に学ぶ地域の担い手づくりを催し、地域内外の方々との交流をもつことができました。

2月にはまちラボを拠点に「第2回 わっかないコーヒーフェスティバル」が開催されました。

庶民がコーヒーを飲んだ日本で初めての地が稚内であるという歴史的な背景も踏まえつつ、街のにぎわいを創出しようと立案されたもので、今年も参加していただいた喫茶店が10店舗増えてパワーアップ。「稚内」こんなに喫茶店があったのか」という驚きの中、チケットを購入した市民は新しい味やお店の開拓を楽しみました。

### 地域の支えがあったからこそ

これらのどの活動に関しても共通しているのは、地域の方々の支えがあったこそ、学生の活躍が可能になったということです。学生たち自身も、それを実感しているに違いありません。

今後とも、稚内北星学園大学の

## 研究発表

### 第6回 COC 地域活動 報告会を開催しました!



2月14日(火)、第6回目となるCOC地域活動報告会を開催しました。

第1部は教員による研究発表3本が行われたほか、第2部は中央商店街のまちラボに会場を移し、学生による2発表が行われました。

第1部は約60名、第2部は約50名のご参加をいただき、また両会場において激励のコメントをいただきました。ご参加下さった皆様、誠にありがとうございました。

Facebookで 情報発信中



地域力×情報力 この地で知を新たに

稚内北星学園大学 Wakkanai Hokusei Gakuen University

地(知)の拠点

11-3. その他資料

(1) COC 事業リーフレット

地域における活動



文部科学省  
平成 26 年度  
「地（知）の拠点  
整備事業」採択

**地域の教育力向上と  
まちづくりで協働する  
地（知）の拠点事業**

**地域力 × 情報力  
この地で知を新たに**



稚内北星学園大学  
Wakkanai Hokusei Gakuen University  
地(知)の拠点



**ICT 教育への  
支援**

小中学校の授業で ICT を効果的に利用するにはどうすればいいのかが、地域の実践と課題を明らかにするよう取り組むとともに、数学（統計）の教育に PC ソフトを用いる実践授業なども実施しています。



**地域観光  
情報発信**

観光協会と連携して、留学生による外国人旅行者への情報発信を強化しています。ガイドブックやインターネットばかりではなく、現場に出て直接お客様に案内することの大切さを学びました。



**まちなかで  
PC 講習**

中心市街地に設置したサテライト施設「まちなかメディアラボ」では、市民からの質問を随時受け付けています。累計簿づくり、年賀状づくりなどテーマを掲げての講習も行っており、好評です。



**水族館の  
多言語化  
プロジェクト**

増加を続ける外国人観光客のために、ノジャップ養漁水産館の展示説明を英語とロシア語で提供しようとして、学生・留学生も参加する「地域志向教育研究」の一環として取り組んでいます。



**小中学生への  
放課後  
学習支援**

市内の小学生の放課後学習や、近隣自治体の小学生の夏休み学習会などに、教職課程を学ぶ学生が指導助手として支援を行っています。まちなかの無料塾も開き、さらに 45 名で開催した学校とインターネットで繋いだ遠隔学習支援も始めています。



**観光ガイド  
アプリの  
制作**

稚内の観光案内をスマホで提供するアプリの制作に、授業の課題として取り組んでいます。前期は編集方針とテーマ収集、後期はそれをアプリとして実装するためのソフトウェア制作を行っています。



**商店街  
状態調査**

地元商店街の再生に貢献しようとして、学生たちが調査を実施しました。地域の歴史や社会・経済構造や商店街の方々の状態（意識や想い）を深める調査により、地域に学び地域に貢献することを目指しています。



**企業連携**

地（知）の拠点事業推進によって、大学の持つシーズの格付が高め、地元企業との連携も生まれています。正課、正課外のアクティブラーニングとして教員と連携した活動があります。（写真：蘭川島漁港魚笠取巻作品「エソカンソウの狭くまちへ」制作風景）

〒097-0013 北海道稚内市吉業台 1 丁目 2290-28  
TEL: 0162-32-7511 FAX: 0162-32-7500  
ホームページ: <http://www.wakkanai.ac.jp/>



稚内北星学園大学  
Wakkanai Hokusei Gakuen University

**学長挨拶**



稚内北星学園大学  
学長 斉藤 吉広

稚内北星学園は、1987（昭和62）年に稚内北星学園短期大学として誕生しました。そこに至る過程で先人の多大な努力がありました。その設立認可申請文書には「教育、文化機軸の中核としての高等教育機軸を整備することは、魅力ある地域社会を形成し、地域開発を促し、安定した生活と豊かな地域社会の創造を目指す当市の発展にとって極めて重要な意義をもつものである」という一節があります。

したがって本学園はその出発当初から、言わば「地（知）の拠点」としての役割を期待されてきたということになります。採択を機に、より地域とのつながりを強め、理業に地域の発展に寄与できるよう取り組んでいきます。



**地（知）の拠点整備事業**

文部科学省は、「全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献」を通じて「地域コミュニティの中核的存在」となる大学を支援するとして「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」を進めています。

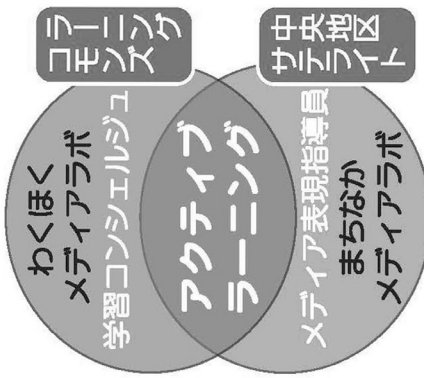
この事業で補助金交付の対象となっているのは、平成25・26年度の「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）を推進する地（知）の拠点整備事業として選定された全国77校、北海道で3校です。稚内北星学園大学の「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備」と題した事業は、平成26年度に採択され、30年度までが補助期間となっています。（平成28年度からは、専攻工業大学を申請者とする「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の事業協働機関として参加していただきます。）

**稚内北星学園大学、地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備**

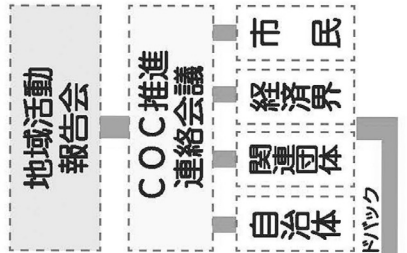
**<課題/活動内容>**

- 地域の教育力向上**  
放課後学習への支援  
ICT利用教育への支援
- 観光まちづくり**  
観光ガイドアプリの開発  
新たな観光資源の提供
- 中心市街地活性化**  
まちなか教室の展開  
「まちゼミ」コーディネート

**<活動拠点>**



**<共有・点検>**



**<人材>**

- まちなか教室に身をつなぐ社会力
- 情報メディアを地域に活かすスキル
- 業務に重まれるクリエイティブティ
- 学校教育・社会教育への柔軟的な能力

**まちなかメディアラボ**



本学のまちなかサテライトです。「メディア表現指導員」が常駐して市民活動を支援するほか、学生が「まちなか教室」学ぶ拠点となっています。学生移動専用ワゴン車も配置しています。

**わくほくメディアラボ**



「学習コミュニティ」が常駐しており、ラーニングコミュニティとして幅広く学生の支援を行っています。授業や地域活動に向けた調査や議論のためにも使用されており、チームで取り組むアクティブラーニングの拠点です。

**地域活動報告会**



この間の本学の地域活動における学生の活躍には目覚ましいものがあります。彼らの活動実績と、彼ら自身の成長の過程を学内外で共有し励ますために、年に2回開催しています。教員の活動は主にポスター発表の形をとっています。

**シンポジウム**



平成28年度の全国シンポジウムは「地域の教育力向上に果たす大学の役割—稚内、宗谷の子育て運動に学ぶ地域の担い手づくり」というテーマで開催し、地域住民、行政、学校関係者が地域内外から一堂に会して議論しました。



## 12. 報道一覧

---

### 広報・関連報道一覧

4月	5日	稚内プレス	まちラボ初心者パソコン講座
	6日	日刊宗谷	教育や産業振興などで豊富町と大学連携協定
	7日	稚内プレス	北星大観光や産業振興など豊富町と協定締結
	10日	日刊宗谷	30日に中国語講座開く
	15日	稚内プレス	まちラボ18日から1周年記念
	16日	稚内プレス	まちラボで中国語講座
	16日	北海道新聞朝刊	まちラボ活動1周年パネルで報告
	19日	稚内プレス	まちラボ 開設1周年経つ
	22日	日刊宗谷	まちラボで中国語講座
	27日	稚内プレス	まちラボ 一年間6200人利用
5月	7日	日刊宗谷	9日からスタート放課後学力グングン塾
	8日	日刊宗谷	まちラボ
	9日	稚内プレス	まちラボ平日パソコン講座
	11日	日刊宗谷	グングン塾 基礎学力定着など
	17日	日刊宗谷	きょうCOC事業連絡会議
6月	1日	日刊宗谷	まちラボフリマ開く
	5日	日刊宗谷	大学の果たす役割 9月全国シンポジウム
	7日	稚内プレス	9月全国シンポ 稚内北星大学
	9日	稚内プレス	北星大、水族館ガイドブック作成・外国人に見所などPR
	9日	日刊宗谷	事業活用し電子黒板購入
	9日	日刊宗谷	稚内北星大学COC事業教育、管区、市街地活性化
	10日	稚内プレス	浴衣着付け教室
	14日	日刊宗谷	中学生に数学の手ほどき
	27日	稚内プレス	浴衣を楽しんで
	28日	日刊宗谷	まちラボで着付け教室
7月	1日	日刊宗谷	初心者パソコン教室
	3日	日刊宗谷	まちラボの時間延長
	12日	日刊宗谷	まちラボで工作教室
	12日	日刊宗谷	きょう締結 猿払村と稚内北星学園大学
	13日	日刊宗谷	猿払村と本学包括連携協定締結
	14日	日刊宗谷	稚内北星学園大学 映像作品全国へ

	17日	日刊宗谷	川島旅館と稚内北星学園大学
	19日	稚内プレス	猿払村と協定を結ぶ
	30日	日刊宗谷	地域教育力の向上
<b>8月</b>	1日	毎日新聞朝刊	商店街にまちなかラボ
	4日	日刊宗谷	楽しく学ぼう 豊富小中生夏休み教室
	5日	日刊宗谷	宿題のサポート まちラボで開設
	10日	日刊宗谷	地域教育全国シンポ
	10日	日刊宗谷	まちラボでパソコン教室
	11日	日刊宗谷	稚内北星学園大学 苦手の克服に
	12日	日刊宗谷	夏休み返上し 豊富町教委
	13日	北海道新聞朝刊	算数、数学得意科目に
	13日	日刊宗谷	数学教室の参加受付
	31日	北海道新聞朝刊	大学の活動 地域に発信
<b>9月</b>	1日	月刊道北9月号	地域に根ざした大学へ
	6日	日刊宗谷	初心者向けパソコン講座
	10日	稚内プレス	全国シンポを開催
	11日	日刊宗谷	基本をゆっくり 敬老の日企画
	18日	日刊宗谷	COC 全国シンポ 稚内北星学園大学
	20日	北海道新聞朝刊	稚内北星大で文部省事業シンポ
	20日	稚内プレス	アートがお目見え
	21日	稚内プレス	大学の地域への役割とは
<b>10月</b>	4日	稚内プレス	パソコン講座の参加者募集
	12日	教育学術新聞	そやの子育て運動に学ぶ
	25日	日刊宗谷	豊富温泉をPR 川島旅館と稚内北星学園大
	25日	北海道新聞朝刊	豊富の魅力ドラマでPR
	28日	日刊宗谷	わくラボ 電子黒板の研修会
	30日	日刊宗谷	マス・フェス 教育
<b>11月</b>	3日	北海道新聞朝刊	電子黒板 授業にどう活用 わくラボ
	11日	北海道新聞朝刊	数学実験 楽しさ発見
	14日	稚内プレス	北星大で電子黒板導入 わくラボ
	15日	稚内プレス	大学の映像ドラマ第2話公開
	18日	稚内プレス	樺太題材にし最優秀賞
	19日	日刊宗谷	樺太題材のドキュメント 文科大臣表彰受賞
	21日	稚内プレス	樺太題材作品で最高賞

12月	1日	北海道新聞朝刊	稚内北星大生の作品 最高賞
	16日	稚内プレス	あす大学のドラマ第3話公開
	16日	日刊宗谷	ワードで年賀状を作ろう
	17日	稚内プレス	サンタランに110人参加
	19日	北海道新聞朝刊	サンタ130人 街を進行
	19日	稚内プレス	街にサンタが130人
	19日	朝日新聞	サンタさん130人笑顔運ぶ
	20日	日刊宗谷	130人のサンタ進行
	23日	全私学新聞	北海道豊富なPR動画制作‘エゾカンゾウの咲くまちへ’
	25日	北海道新聞朝刊	ひと2016 引き揚げ者の祖母を写した作品が全国Vの学生
1月	11日	北海道新聞朝刊	学力向上稚内北星大生が一役
	14日	北海道新聞朝刊	振興局と協定
	14日	読売新聞	稚内北星学園大と地域活性化で協定
	17日	日刊宗谷	テレビ電話で算数学習
	18日	朝日新聞	稚内北星と人材育成協定
	20日	実施委員会ニュース	稚内北星学園大学 権太プロジェクトの取り組み
	22日	日刊宗谷	エクセルの操作方法学ぶ
	28日	日刊宗谷	コーヒーフェス2017
	30日	稚内プレス	大学で第6回地域活動報告会
	30日	稚内プレス	初心者パソコン講座延期
	31日	稚内プレス	『カラフトをしらない』上映など国際女性デー稚内集会
	2月	1日	月刊道北2月号
2日		日刊宗谷	14日地域活動報告会
2日		教育研究所だより	1月18日第2回ICT機器活用研修会開催
3日		読売新聞	好みのコーヒーを見つけて
4日		日刊宗谷	18日豊富で試写会「エゾカンゾウの咲くまちへ」
5日		日刊宗谷	「エゾカンゾウの咲くまちへ」最終話YouTube発信
5日		日刊宗谷	自慢の味堪能 コーヒーフェス市内30店が参加
8日		広報わっかない2月号	国際女性デー稚内北星権太プロジェクトの取り組みを上映
11日		朝日新聞	わっかないコーヒーフェスティバル2017
11日		日刊宗谷	エクセルをつかってみよう まちラボ
16日		北海道新聞朝刊	自慢のコーヒー飲み歩き
16日		日刊宗谷	COC事業 大学で地域活動報告会
19日		北海道新聞朝刊	豊富PRドラマ先行上映会 稚内北星大と川島旅館制作
21日		日刊宗谷	豊富・川島旅館と稚内北星大が共同制作
23日		朝日新聞	豊富の自然と観光 大学生がPR動画作成
28日		北海道新聞朝刊	権太と戦争テーマ映像上映

3月	1日	月刊道北3月号	大学と地域の共同事業は街の未来を創る
	5日	北海道新聞朝刊	受賞作制作秘話語る
	6日	稚内プレス	国際女性デー稚内集会 樺太の悲劇から平和を知る
	7日	日刊宗谷	国際女性デー稚内集会 制作の舞台裏も
	7日	日刊宗谷	大学パソコン講座参加者募集中
	8日	稚内プレス	初心者パソコン講座参加者募集
	9日	北海道新聞朝刊	中央商店街動画で魅力紹介
	17日	日刊宗谷	振興局と大学の包括連携
	24日	日刊宗谷	パソコン講座 初心者対象に
	24日	稚内プレス	パソコン講座の参加者募集
	25日	稚内プレス	新たに中国語対応 パンプとQRコード
	26日	日刊宗谷	稚内北星大生講師役で手ほどき
	28日	日刊宗谷	休み返上頑張るぐんぐん学習塾



報道記事（125～133 ページ）に関しましては、著作権の關係で Web 版ではご覧いただけません。ご了承ください。

## 13. 規 程 集 (平成 29 年 3 月 31 日現在)

---

### 稚内北星学園大学 COC 推進委員会規程

(制定) 平成 26 年 12 月 1 日

(一部改正) 平成 27 年 7 月 1 日

平成 27 年 11 月 18 日

(目的及び設置)

第 1 条 文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択された「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備（以下「事業」という。）を全学あげて強力で推進するため、稚内北星学園大学にCOC推進委員会（以下「推進委員会」という。）を設置する。

(業務)

第 2 条 推進委員会は、次の各号の業務を行う。

- (1) 事業の実施に関すること
- (2) 事業の予算及び決算に関すること
- (3) 地域志向の教育・研究・社会貢献に関すること
- (4) 地域との連携に関すること
- (5) 学生参画に関わる業務組織間の調整及び学生生活の監督・助言ならびに情報の発信に関すること。
- (6) 文部科学省への報告等に関すること
- (7) COC外部評価委員会への諮問に関すること
- (8) その他事業の推進に関すること

2 前項の業務について、本学が定める他の規程と重複する場合は、この規程を優先とする。

(組織)

第 3 条 推進委員会の委員は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 学長「事業推進代表者」
- (2) 副学長「事業推進責任者」
- (3) 学部長
- (4) 地域教育支援室長
- (5) 地域観光支援室長
- (6) まちなか振興支援室長
- (7) 学生COC支援室長

- (8) 事業推進室長
- (9) 図書館長
- (10) プログラムオフィサー
- (11) 学習コンシェルジュ
- (12) 事務局長
- (13) 総務課長
- (14) メディア表現指導員
- (15) その他、学長「事業推進代表者」が必要と認めた者  
(委員長)

第4条 推進委員会に委員長を置き、学長「事業推進代表者」をもって充てる。

2 委員長は、推進委員会の業務を総理する。

(副委員長)

第5条 推進委員会に副委員長を置き、副学長「事業推進責任者」をもって充てる。

2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときはその職務を代行する。

(プログラムオフィサー)

第6条 推進委員会にプログラムオフィサーを置き、次に掲げる任務を遂行するものとし、学長「事業推進代表者」が委嘱する。

- (1) 事業全体の進捗状況等に関すること
- (2) 自治体・企業・機関・団体等との連携協力への支援に関すること
- (3) 評価システムの整備に関すること
- (4) その他事業を推進するための助言・提起・参画に関すること

2 プログラムオフィサーの業務の詳細な内容については、学長「事業推進代表者」が別に定める。

(推進委員会議)

第7条 推進委員会議は、副委員長「事業推進責任者」が招集し、その議長となる。

2 推進委員会議は、月1回開催する。但し、必要ある場合は、随時開催することができる。

(業務推進)

第8条 推進委員会が決定した本事業の実施にかかる第2条に規定する業務について、具体的に内容を検討し推進するための業務推進の組織を、次の表に掲げるとおりとする。

業務名	業務推進組織
地域志向の教育に関する業務	学長「事業推進代表者」が指名する教職員の組織

地域志向の研究に関する業務	学長「事業推進代表者」が指名する教職員の組織
地域志向の社会貢献に関する業務	地域教育支援室（地域の教育力向上） 地域観光支援室（観光まちづくり） まちなか振興支援室（中心市街地活性化）
学生参画に係る業務組織間の調整及び学生活動の監督・助言並びに情報の発信に関する業務	学生COC支援室
本条に掲げる組織間の業務の調整及び事業推進責任者の業務の補佐	事業推進室

2 各業務推進組織は、審議内容等について、随時、推進委員会へ報告するものとする。

（わくほくメディアラボ）

第9条 推進委員会は、本学の教育並びに研究等を支援するため、学内にラーニング・コモنزの拠点として「わくほくメディアラボ」（以下「わくらボ」という。）を設置する。

(1) 「わくらボ」は教授会に置き、管理は図書館をもって充てる。

2 「わくらボ」には、学生の能動的・共同的な学習を支援するため、学習コンシェルジュを配置する。

3 「わくらボ」の管理規定等については、図書館長が別に定める。

（まちなかメディアラボ）

第10条 推進委員会は、地域を志向した地域課題への取り組みを支援するため、学外にアクティブ・ラーニングの拠点として「まちなかメディアラボ」（以下「まちラボ」という。）を設置する。

(1) 「まちラボ」の管理は、まちなか振興支援室をもって充てる。

2 「まちラボ」には、学生の地域活動や学習支援、ICTを活用したサテライト教室等の取り組みを支援するため、メディア表現指導員を配置する。

3 「まちラボ」の管理規定等については、まちなか振興支援室が別に定める。

（関係組織等の協力）

第11条 推進委員会は、業務の遂行上必要があるときは、関係組織等に対し、教職員の出席や資料の提出など必要な協力を要請することができる。

2 前項の要請があった場合、関係組織等は推進委員会に積極的に協力しなければならない。

（事務）

第12条 推進委員会の事務は、大学事務局において行うものとする。

(補則)

第13条 この規定に定めるもののほか、推進委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成26年12月1日から施行する。

附 則 (平成27年7月1日)

この規程は、平成27年7月1日から施行し、平成27年6月16日より適用する。

附 則 (平成27年11月18日)

この規程は、平成27年11月18日から施行し、平成27年11月10日から適用する。

## 稚内北星学園大学 COC 推進連絡会議規程

(制定) 平成27年 3月23日

(一部改正) 平成27年 7月 1日

平成27年11月18日

平成28年 1月13日

(目的及び設置)

第1条 文部科学省より採択された「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備事業」(以下「事業」という。)における大学と地域との連携を円滑に推進するため、稚内北星学園大学にCOC推進連絡会議(以下「推進連絡会議」という。)を設置する。

(業務)

第2条 推進連絡会議は、次の各号の業務を行う。

- (1) 事業の推進にかかる成果の確認及び課題の整理並びに翌年への改善・提言に関すること
- (2) 大学と連携した自治体関係部署及び関係機関・団体との協力・連絡調整等に関すること
- (3) COC推進委員会(以下「推進委員会」という。)への要望や意見の集約に関すること
- (4) その他、大学と地域との連携を円滑に推進するために必要なこと

(組織)

第3条 推進連絡会議の委員は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 学長「事業推進代表者」、副学長「事業推進責任者」並びに学部長
- (2) 本事業の連携及び協力・連絡調整等に関わる自治体及び関連機関・団体の関係者

- (3) 地域教育支援室長
- (4) まちなか振興支援室長
- (5) 地域観光支援室長
- (6) 学生COC支援室長
- (7) 事業推進室長
- (8) 図書館長「わくほくメディアラボ運営会議議長」
- (9) COCプログラムオフィサー
- (10) 学習コンシェルジュ並びにメディア表現指導員
- (11) その他、学長「事業推進代表者」が必要と認めた者  
(議長)

第4条 推進連絡会議に議長を置き、学長「事業推進代表者」をもって充てる。

2 議長は、推進連絡会議の業務を総理する。

3 議長に事故があるときは、あらかじめ議長の指名する委員がその職務を代行する。

(会議)

第5条 推進連絡会議は、議長が招集し、必要に応じて開催する。

(事務)

第6条 推進連絡会議の事務は、大学事務局において行うものとする。

(補則)

第7条 この規程に定めるもののほか、推進連絡会議の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成27年3月23日から施行する。

附 則 (平成27年7月1日)

この規程は、平成27年7月1日から施行し、平成27年6月16日より適用する。

附 則 (平成27年11月18日)

この規程は、平成27年11月18日から施行し、平成27年11月10日から適用する。

附 則 (平成28年1月13日)

この規程は、平成28年2月1日から施行する。

稚内北星学園大学 まちなかメディアラボ管理規程

(制定) 平成 27 年 4 月 1 日

(一部改正) 平成 27 年 12 月 15 日

(目的)

第 1 条 この規程は、別に定めるものを除き、稚内北星学園大学（以下「本学」という。）サテライト施設まちなかメディアラボ（以下「まちラボ」という。）の管理に関し必要な事項を定めることにより、まちラボにおける秩序の維持を図り、以て本学の正常な教育の執行を確保することを目的とする。

2 まちラボは運用上支障の及ばない範囲で、地域社会の要求に対し開放を行う。

(定義)

第 2 条 この規程で「まちラボ」とは稚内市中央 3 丁目 9 番地 1 2 に所在する本学サテライト施設として使用している区域をいう。

2 学内者とは本学の教職員、学生及び以上の者が課外活動の為に組織する体育団体、文化団体等をいう。

3 学外者とは前号に定める者以外の者をいう。

(まちラボ管理者)

第 3 条 学長は、まちラボの管理を統括する。

2 学長はまちラボの管理に関する事務を教職員に分任させることができる。

3 学長と分任担当者は常に連絡を保ち、まちラボの管理に万全を期さなければならない。

(まちラボの開閉時間)

第 4 条 まちラボの開閉時間は、本学において特に定めた休業日を除き下記の通りとする。但し、学長が特に必要と認める場合はこの限りではない。

	平日	土・日・祝
時 間	12:00～19:00	10:00～17:00

2 閉鎖後にまちラボに入ろうとする者はその理由を学長に申し出て許可を受けなければならない。

(禁止行為)

第 5 条 何人もまちラボにおいて教育の正常な遂行を阻害する行為又は器物等を汚損若しくは破損する行為をしてはならない。

- 2 学長はその行動及び周囲の事情から合理的に判断して前項の行為をし、又はしようとしていると認められた場合は、理由を明らかにし、その行為の中止を勧告し又はまちラボから退去を求めることができる。

(使用許可)

第6条 学内者及び学外者が諸活動等でまちラボの利用を行う場合は、原則として事前に所定の様式により学長の許可を受けなければならない。

- 2 学内者が課外活動及び諸会合、又はその他の目的でまちラボを使用する場合は、原則として事前に所定の様式により学長の許可を得るものとする。
- 3 学外者がまちラボの利用を希望する場合は、所定の様式により学長の許可を得るものとする。
- 4 前項については、校舎使用料金等を納付しなければならない。ただし、学長は使用料の一部又は、その全てを使用目的によっては減免することができる。
- 5 第3項についてその他必要な事項は、別に定める。
- 6 使用終了後はその旨を届け出るものとする。

(利用者登録)

第7条 宗谷総合振興局管内に居住する者は、利用者登録をすることができる。

- 2 利用者登録を希望する者（以下「申請者」という。）は、まちラボ利用者登録申請書により学長に申請しなければならない。
- 3 申請者は、前項の規定による申請の際身分証明書又は官公署が交付した免許証、許可証等を提示しなければならない。また、18歳未満の申請には保護者の同意を必要とする。
- 4 18歳未満の電子機器の利用の場合は、利用者登録を必須とする。
- 5 登録者は、第7条2項の規定により申請した事項に変更が生じたときは、まちラボ登録事項変更申請書により、遅滞なく学長に登録事項の変更を申請しなければならない。
- 6 登録者は、利用者登録を廃止しようとするときは、まちラボ利用者登録廃止届により学長に届け出なければならない。

(まちラボの使用時間等)

第8条 まちラボの使用許可を受けた学内者及び学外者が使用できる時間は特別な場合を除き、平日19時、土曜日17時迄とする。ただし、学長が認めた場合、使用時間を延長することができる。

(掲示)

第9条 まちラボ内に掲示場を設け、学長が管理する。



- 2 学生及び学内団体の掲示板の使用については、学長へ掲示物の内容、期限の届出をしなければならない。
- 3 学外者の掲示場の使用については、所定の様式で学長の許可を受けなければならない。
- 4 掲示の大きさは原則として新聞紙1ページ程度以内とする。ただし、特別の場合はこの限りではない。
- 5 前各項に違反した掲示は撤去する。

(事故の届出)

第10条 まちラボの使用許可を受けた者がその使用時間中、事故(器具等の汚損又は破損を含む)があった場合は、ただちに学長に届け出なければならない。

- 2 まちラボにおいて盗難、遺失物、拾得物等があったとき又はその事実を知った者は、ただちに学長に届け出なければならない。

(防災管理)

第11条 学長は消防法の規定により防火管理者を定めなければならない。

- 2 防災管理について必要な事項は別に定める。

(委任規定)

第12条 この規程に定めるもののほか、まちラボの管理に関し必要な事項は別に定める。

#### 附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

附 則(平成27年12月15日)

この規程は、平成27年12月15日から施行する。

『稚内北星学園大学COC推進委員会ディスカッションペーパーシリーズ』発行規程

(制定)平成27年6月1日

(発行の趣旨)

第1条 『稚内北星学園大学COC推進委員会ディスカッションペーパーシリーズ』(以下、「本誌」という。)は、個々の執筆者の責任のもとに、研究の進展と地(知)の拠点整備事業の促進を図るため、研究の中間的なまたは最終的な成果を迅速かつ簡易な方法で印刷して発表するものとする。

- 2 同一内容または一部を修正した論文の公刊は妨げない。

3 第1項の印刷は、電子的方法による公開に代えることができる。

(投稿者)

第2条 本誌に投稿できるものは、次の各号の通りとする。

(1) 稚内北星学園大学教職員

(2) 前号の者との共同執筆者

(3) その他、特別にCOC推進委員会が承認し、または依頼したもの

(原稿の種類)

第3条 投稿できる原稿の種別は、論文、資料及び講演録(以下、「論文等」という。)とする。

(原稿の提出)

第4条 原稿はCOC推進委員会が指定する電子媒体で提出するものとし、最終版下原稿として体裁を整えたものとする。

2 原稿については、提出された後の校正、差換え等は一切受け付けない。

(著作権)

第5条 本誌に掲載された個々の論文等の著作物の著作権は、著作者に帰属する。

2 稚内北星学園大学COC推進委員会は、編集著作権を有する。

3 COC推進委員会に属する機関の活動を記録した著作物の著作権は、COC推進委員会に帰属する。

4 本誌に掲載された論文等は、原形のまま電子的方法で複製し、稚内北星学園大学機関リポジトリにアップロードし、ウェブにて公衆に供する。

5 著作者の申し出により全文に代えて論文等の要旨を掲載することができる。ただし、この場合は全文を稚内北星学園大学図書館に備えおき、公衆に供さなければならない。

6 第4項ないし前項の掲載にあたっては、第4条による原稿の提出をもって著作権者の承諾があったものとみなす。

(補則)

第6条 本誌の発行に関して必要な事項は、この規程のほかCOC推進委員会が別に定める。

2 この規程の改正は、COC推進委員会の議を経て学長が行う。

付 則

この規程は平成27年6月1日から施行する。

## 稚内北星学園大学地（知）の拠点整備事業外部評価に関する要綱

（制定）平成 27 年 4 月 6 日

（趣旨）

第 1 条 この要綱は、地（知）の拠点事業に関する「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備事業（以下「大学 COC 事業」という。）」の実施について、外部における事業評価に関して必要な事項を定めるものとする。

（設置）

第 2 条 外部の事業評価機関として「地（知）の拠点整備外部事業評価委員会（以下「評価委員会」という。）」を設置する。

（任務）

第 3 条 評価委員会は、稚内北星学園大学の実施する大学 COC 事業における事業実績について学長の諮問に応じ、別に定める評価の実施要領に基づいて評価及び評価に際して必要な事項を行う。

（組織）

第 4 条 評価委員会は、次の委員をもって組織する。

- 一 他大学の地域志向教育や研究等に精通する研究者 1 名
- 二 連携自治体以外の地域振興関係行政機関の職員 1 名
- 三 一般の有識者 若干名

2 前項各号の委員は学長が委嘱する。

3 第 1 項各号の委員の任期は 2 年とし再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（運営）

第 5 条 評価委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

第 6 条 評価委員会の招集は、必要に応じ学長が行う。

第 7 条 評価委員会は、必要に応じ委員以外の者の出席を求め、意見を聞くことができる。

（報告）

第 8 条 評価委員会は、評価結果について学長に報告しなければならない。

（庶務）

第 9 条 評価委員会に関する庶務は、大学事務局総務課において処理する。

（雑則）

第 10 条 この要綱に定めるもののほか、評価委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

## 附 則

- 1 この要綱は、平成 27 年 4 月 20 日から施行する。
- 2 この要綱施行後、最初に選出された第 4 条第 1 項各号の委員の任期は、同条第 3 項の規定にかかわらず、平成 29 年 3 月 31 日までとする。

稚内北星学園大学「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」におけるプログラムオフィサーの任務（通達）

（制定）平成 27 年 2 月 1 日

稚内北星学園大学 COC 推進委員会規程（平成 26 年 12 月 1 日）第 6 条第 2 項に規定する「プログラムオフィサーの業務の詳細な内容」について、以下のとおりとする。

この通達は、平成 27 年 2 月 1 日から施行する。

稚内北星学園大学「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」における  
プログラムオフィサーの任務

本学 COC 事業「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備」におけるプログラムオフィサーは、事業全体の進捗状況を把握しながら、学外との円滑な連携協力を図るとともに、適切な評価システムを整備することを任務とする。COC 推進委員会は、プログラムオフィサーから計画の改善・見直し等の提言があった場合には、すみやかに検討を行い、改善・見直し計画案等を策定するものとする。

### （1）進捗状況の把握

- ・「COC 推進委員会」や「地域活動報告会」への出席ならびに当該委員会からの情報提供により、事業全体の進捗状況を把握する。
- ・①地域の教育力向上 ②観光まちづくり ③中心市街地活性化という本学 COC 事業の掲げた課題それぞれについて議論や取り組み、実施環境、地域連携、人的配置、広報などが適切であるかを点検するとともに、全体のバランスにも配慮して必要な助言を行う。
- ・各「支援室」の社会貢献活動等、地域と連携する活動について、適宜現場への視察を行う。
- ・実施計画の内容およびスケジュール設定などについて、COC 推進委員会または事業推進責任者に対して、必要な変更・調整について提起する。

- ・状況に応じた事業全体の方向性の改善ならびに新たな活動内容について、COC 推進委員会または事業推進責任者に対して提起を行う。

## (2) 連携協力への支援

- ・稚内市ならびに宗谷地域の自治体・企業・機関・団体との連携協力を強化するために、仲介・調整・視察・広報など必要な活動を行う。
- ・「COC 推進連絡会議」の構成員選定につき COC 推進委員会または事業推進責任者に対して助言するとともに、当該会議の企画立案に参画する。
- ・連携対象の追加および当該対象との連携課題設定について提起・調整する。
- ・「COC 地域シンポジウム」「COC 全国シンポジウム」の企画立案に関して、COC 推進委員会または事業推進責任者に対して助言を行う。

## (3) 評価システムの整備

- ・「COC 外部評価委員会」の構成員選定につき、COC 推進委員会または事業推進責任者に対して助言するとともに、評価基準・方法について提起する。
- ・「地域志向教育研究経費」の採択基準の策定および採択につき必要な助言を行うとともに、研究成果に対する評価に参画する。
- ・経費使用の適切性について、COC 推進委員会に対して必要な意見を述べる。



問い合わせ先

稚内北星学園大学地域創造支援センター

COC 事業推進室 (事務局総務課)

〒097-0013 北海道稚内市若葉台 1 丁目 2290-28

T E L 0162-32-7511

F A X 0162-32-7500

E-mail info@wakhok.ac.jp

わくほくCOCホームページ

<http://coc.wakhok.ac.jp/>

COC推進委員会平成28年度事業実施報告書編集小委員会 委員一覧

齊藤 吉広 (学長/教授/事業推進代表者)  
佐賀 孝博 (副学長/教授/事業推進責任者)  
遠藤 孝夫 (教授/プログラムオフィサー)  
石橋 豊之 (助教/事業推進室長)  
高 澍 (特任助教/学習コンシェルジュ)  
中野 窓香 (メディア表現指導員)  
中川 圭太 (大学事務局総務課事務主任)  
向 光宏 (大学事務局総務課主事)

平成28年度地(知)の拠点整備事業  
事業実施報告書

2017(平成29)年11月27日発行

**編 集** COC推進委員会平成28年度事業実施報告書編集小委員会  
**装 幀** COCデザイン堂 中川 圭太  
**発 行** 稚内北星学園大学 地域創造支援センター  
〒097-0013 北海道稚内市若葉台 1 丁目 2290-28  
電 話:0162-32-7511 (代表)  
メール:info@wakhok.ac.jp

無断転載を禁じます。

二百年ほど前、この国の周縁は騒がしかった。この北辺の地は際立って帝政ロシアからの脅威に晒され、東北の各藩が警護の任を負った。彼らの越冬の装いは軽微であり、とても厳冬を生き延びられるものはなかった。

寒さに強いはずの津軽藩士も会津藩士も十九世紀初頭の越冬では野菜不足が原因とされる水腫病で多くの藩士が命を絶った。幕末、再び幕府からの警護を言い渡された東北の藩士たちは水腫病予防薬としてコーヒーを持参した。

そして、当時高価であったコーヒーを庶民でもある藩士達が供することで幾ばくかの命が救われた。コーヒーを飲むことができずに亡くなっていった藩士たちを悼み、その後、薬としてコーヒーを大切に飲んだであろう先人達に思いを馳せ、宗谷の地にはコーヒー豆の碑が建立され、この出来事を日常の中でも大切にするため「稚内コーヒーフェスティバル」が稚内北星学園大学の学生によって立ち上げられ、来年は三回目となる。

